

平成26年度 NCNP原著論文一覧表

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
1	Hidetsugu Komeda, Hirotaka Kosaka, Daisuke N. Saito, Yoko Mano, Minyoung Jung, Takeshi Fujii, Hisakazu T. Yanaka, Toshio Munesue, Makoto Ishitobi, Makoto Sato, Hidehiko Okazawa	"Autistic empathy toward autistic others"	Social Cognitive and Affective Neuroscience 2014	自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD)がある方々に、ASDの行動パターンを行う人物を記述した文と、ASDではない一般的な行動パターンを行う人物を記述した文を読んで、自分に当てはまるか、自分と似ているかを判断してもらった際の脳活動をfMRI(機能的磁気共鳴画像法)を用いて計測した。その結果、ASDがある方々はASD特徴がある人物を判断する際に、共感や自己意識と関連する脳部位が活動することがわかった。
2	De Bleecker JL, Amato A, Aronica E, Benveniste O, de Boer O, De Paepe B, de Visser M, Dimachkie M, Gherardi R, Goebel HH, Hilton-Jones D, Holton J, Lundberg IE, Mammen A, Mastaglia F, Nishino I, Rushing E, Daa Schroder H, Selcen D, Stenzel W	205th ENMC International Workshop: Pathology diagnosis of idiopathic inflammatory myopathies Part II 28-30 March 2014, Naarden, The Netherlands	NEUROMUSCULAR DISORDERS 25(3),268 - 272,2015	第205回ENMC国際ワークショップにて、特異性炎症性筋疾患の病理学的診断について討議され、その会議録が発表された。特異性炎症性筋疾患には、5つの大きな分類があるものの、分類基準が明確には標準化されていなかったため、2012年に開催された第193回ENMC国際ワークショップにて、診断のためのガイドライン策定のための討議が行われた経緯がある。今回は主に病理分類についての議論がなされた。当部からの出席者である西野一三は、本邦における炎症性筋疾患の発生頻度を詳しく報告した。
3	Matsumoto J, Uehara T, Urakawa S, Takamura Y, Sumiyoshi T, Suzuki M, Ono T, Nishijo H.	3D video analysis of the novel object recognition test in rats	Behavioural Brain Research 1 (272),16 - 24,2014	薬物などの学習記憶に対する効果をげっ歯類等で測定法の一つとして、novel object recognition(NOR) 試験がある。本論文では、これまで二次元の測定系が用いられてきたNOR試験を、3次元化する新たなパラダイムについて検討を行った。
4	Fujii T, Hayashi S, Kawamura N, Higuchi MA, Tsugawa J, Ohyagi Y, Hayashi YK, Nishino I, Kira JI	A case of adult-onset reducing body myopathy presenting a novel clinical feature, asymmetrical involvement of the sternocleidomastoid and trapezius muscles	JOURNAL OF THE NEUROLOGICAL SCIENCES 343 (1-2),206 - 210,2014	成人期発症の還元小体ミオパチー(reducing body myopathy; RBM)症例の臨床像を報告した。本症例は32歳女性で、FHL1遺伝子に変異を有し、胸鎖乳突筋と僧帽筋の非対称性萎縮が特徴的であった。FHL1遺伝子変異のある成人発症のRBM症例では、これまで胸鎖乳突筋、僧帽筋の非対称性萎縮は報告されておらず、貴重な報告である。
5	Suzuki M, Yamada A, Watanabe N, Akechi T, Katsuki F, Nishiyama T, Imaeda M, Miyachi T, Otaki K, Mitsuda Y, Ota A, Furukawa TA.	A failure to confirm the effectiveness of a brief group psychoeducational program for mothers of children with high-functioning pervasive developmental disorders: a randomized controlled pilot trial.	Neuropsychiatr Dis Treat 10,1141 - 1153,2014	高機能自閉症児の家族に対して、通常治療と家族心理教室の併用療法と、通常治療のみの比較における、家族の苦悩と患者の行動面での改善があるかどうかを無作為割り付け試験で比較した。結果として、心理教室はこのどちらにも改善をもたらさなかった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
6	Saitsu H, Tohyama J, Walsh T, Kato M, Kobayashi Y, Lee M, Tsurusaki Y, Miyake N, Goto YI, Nishino I, Ohtake A, King MC, Matsumoto N	A girl with West syndrome and autistic features harboring a de novo TBL1XR1 mutation	JOURNAL OF HUMAN GENETICS 59(10),581 – 583,2014	最近, TBL1XR1におけるde novo変異が2名の自閉症スペクトラム疾患に見つかった。この論文は, west症候群, Rett症候群様症状, 自閉症的特徴を示した日本人女児についての報告である。5か月時に一連の発作を起すまでは正常発達であった。7か月時の脳波でヒプスアリスミアを認め, west症候群と診断した。8か月時に常同的な手の動きが出現し, その後, 4歳9か月時にはコミュニケーション障害等の自閉症的な特徴, 多動, 易興奮性を認めた。患児と両親の全エクソーム解析では, F box様領域の進化的に保存されているアミノ酸に生じたTBL1XR1のde novo変異 [c.209G>A (p.Gly70Asp)]を認めた。TBL1XR1変異により, 自閉症的な特徴をもち, Rett症候群様症状を呈するWest症候群を起こしうる。
7	Tomioka H, Yamagata B, Kawasaki S, Pu S, Iwanami A, Hirano J, Nakagome K, Mimura M.	A longitudinal functional neuroimaging study in medication-naïve depression after antidepressant treatment.	PLoS One 10(3),e0120828 – ,2015	語流暢課題施行中の近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)検査は, うつ病の鑑別診断補助として承認されているが, 未だに状態依存性あるいは素因依存性の指標であるのか, 明らかでない。本研究では, 未服薬患者25名を対象に12週の抗うつ薬治療前後でのNIRS信号の変化を検討した。その結果, うつ症状の有意な改善効果にも関わらず, NIRS信号については, 有意な変化は認められず, 素因依存性の指標である可能性が示唆された。一方, ベースラインにおける下前頭, 中側頭回領域での神経活動性が高いほど, うつ症状の改善が著しかった。
8	Takehara K, Noguchi M, Shimane T, Misago C	A longitudinal study of women’s memories of their childbirth experiences at five years postpartum.	BMC Pregnancy and Childbirth 14 (221),2014	女性が出産後長年にわたり, 出産体験を正確に覚えているかどうかを検証した研究はほとんどない。そこで, 本研究では, 産後数日時と産後5年時における出産体験に関する回答が一致するかどうかを検証することを目的とした。本研究の対象は, 2002年5月から, 2003年8月に日本の1つの産院と4つの助産所にて分娩をした1168人の女性である。データは, 構造化面接と診療録の転記によって収集された。出産体験は, 産後数日時と5年後に回答を依頼し, 出産体験尺度を用いて測定された。584人(50.0%)の対象者から, 産後数日時と5年後の両方の回答が得られた。出産体験尺度の18項目中, 16項目にて, 2時点間の回答に統計学的有意差が認められた。産後数日時に出産体験尺度の項目に「はい(体験した)」と回答した女性の方が, 「いいえ(体験していない)」と回答した女性と比べて, 産後5年時の回答が一致しやすくなる傾向がみられた。女性は産後5年が経過しても, 出産体験をはっきりと覚えていることが明らかになった。
9	Watanabe Norio, Furukawa Toshi A, Horikoshi Masaru, Katsuki Fujika, Narisawa Tomomi, Kumachi Mie, Oe Yuki, Shinmei Issei, Noguchi Hiroko, Hamazaki Kei, Matsuoka Yutaka	A mindfulness-based stress management program and treatment with omega-3 fatty acids to maintain a healthy mental state in hospital nurses (Happy Nurse Project): study protocol for a randomized controlled trial.	Trials 16(1),36 – 36,2015	精神疾患, 特にうつ病や不安障害などのよく見られるものは本人のみならず社会への負担は高い。また特に看護師は労働者の中でもストレスが多いことが知られ, ストレスによる離職や労働能率低下は医療政策にも影響を与える。本研究は, 病棟看護師のストレス提言と一般精神疾患予防を目的として, マインドフルネス認知療法要素を取り入れた精神療法ならびにオメガ3系不飽和脂肪酸による介入効果を明らかにすることを目的とした。本稿はその研究計画である。
10	Goto M, Okada M, Komaki H, Sugai K, Sasaki M, Noguchi S, Nonaka I, Nishino I, Hayashi YK.	A nationwide survey on Marinesco-Sjögren syndrome in Japan.	Orphanet J Rare Dis. 9(1),58 – ,2014	希少疾患であるマリネスコシュエーグレン症候群の疫学, 臨床的特徴, 遺伝子変異との関連性を評価するために本邦初の全国規模の調査研究を行い36名の患者での解析を行い, 創始者効果を有することなど新しい知見を得ることができた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
11	Ohsawa N, Koebis M, Mitsuhashi H, Nishino I, Ishiura S	ABLIM1 splicing is abnormal in skeletal muscle of patients with DM1 and regulated by MBNL, CELF and PTBP1	GENES TO CELLS 20(2),121 - 134,2015	筋強直性ジストロフィー1型(DM1)は筋力低下、心筋障害を含む多様な症状を呈する遺伝性疾患である。今回の我々の研究により、actin-binding LIM protein 1 (ABLIM1)という蛋白がMBNL、CELF、PTBP1という蛋白による調節を受けている事、そしてABLIM1のスプライシング異常によりDM1の筋症状が生じる可能性がある事が示された。
12	Anada RP, Wong KT, Malicdan MC, Goh KJ, Hayashi YK, Nishino I, Noguchi S	Absence of beta-amyloid deposition in the central nervous system of a transgenic mouse model of distal myopathy with rimmed vacuoles	AMYLOID 21(2),138 - 139,2014	縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチー(DMRV)は進行性の筋力低下を示すが、骨格筋内に多数のベータアミロイドの沈着が観察される。一方、中枢神経系には異常が見られない。アルツハイマー病患者の脳ではベータアミロイドの蓄積が認められる。そこで、DMRVモデルマウス脳においてベータアミロイドの蓄積が認められるかを観察した。30匹以上のモデルマウスの脳及び脊髄サンプルを調べたが、ベータアミロイドの蓄積は認められなかった。DMRV患者脳でもベータアミロイドの蓄積はないと考えられた。
13	Kamiya K, Sato N, Saito Y, Nakata Y, Ito K, Shigemoto Y, Ota M, Sasaki M, Ohtomo K.	Accelerated myelination along fiber tracts in patients with hemimegalencephaly.	J Neuroradiol. 41(3),202 - 210,2014	片側巨脳症例において、髄鞘化促進現象をMRと病理で初めて報告した。また新たに異所性線維についても指摘した。
14	Xiao Z, Cilz NI, Kurada L, Hu B, Yang C, Wada E, Combs CK, Porter JE, Lesage F, Lei S	Activation of Neurotensin Receptor 1 Facilitates Neuronal Excitability and Spatial Learning and Memory in the Entorhinal Cortex: Beneficial Actions in an Alzheimer's Disease Model	J Neuroscience 34(20),7027 - 7042,2014	空間認知機能において重要な嗅内野は、アルツハイマー病変が早期から認められているが、同時に多くのニューロテンシン受容体が発現していることが報告されている。本論文で、正常マウスの嗅内野にニューロテンシンアゴニストを投与したところ、空間認知機能テストの成績が向上することを見出した。さらアルツハイマー病モデルマウス嗅内野のニューロテンシン受容体サブタイプ1を活性化すると、活動電位頻度が持続的に増加すること、空間認知機能試験の成績が改善することを見出した。これらはニューロテンシンアゴニストがアルツハイマー病モデルマウスに有益な作用を及ぼす可能性があることを示している。
15	Saitoh Akiyoshi, Ohashi Masanori, Suzuki Satoshi, Tsukagoshi Mai, Sugiyama Azusa, Yamada Misa, Oka Jun-Ichiro, Inagaki Masatoshi, Yamada Mitsuhiko	Activation of the prelimbic medial prefrontal cortex induces anxiety-like behaviors via N-Methyl-D-aspartate receptor-mediated glutamatergic neurotransmission in mice.	Journal of neuroscience research 92(8),1044 - 1053,2014	電位依存性ナトリウムチャンネル活性化薬ベラトリンを内側前頭前野上辺縁皮質領域に局所灌流させたマウスは、細胞外グルタミン酸濃度の上昇と不安様行動の惹起を示した。グルタミン酸NMDA受容体拮抗薬の同時併用により、ベラトリン誘発グルタミン酸濃度上昇に影響を与えることなく、不安様行動を改善させた。したがって、マウス内側前頭前野上辺縁皮質領域のNMDA受容体を介したグルタミン酸神経伝達が不安様行動の発現に関与することが示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
16	Abe H, McManus JN, Ramalingam N, Li W, Marik SA, Borgloh SM, Gilbert CD	Adult cortical plasticity studied with chronically implanted electrode arrays	J Neurosci. , 2015	大脳皮質の視覚野は、網膜の一部を損傷しても、その損傷部位以外からの視覚入力を受けるように変化することを、埋め込み型電極を用いた慢性記録から明らかにし、大人の大脳皮質でも可塑性があることを示した。
17	Koppensteiner P, Aizawa S, Yamada D, Kabuta T, Boehm S, Wada K, Sekiguchi M	Age-dependent sensitivity to glucocorticoids in the developing mouse basolateral nucleus of the amygdala	Psychoneuroendocrinology 46,64 – 77,2014	幼若期におけるストレス曝露はその後の脳発達に影響を及ぼすとされているものの不明な部分も多い。本研究ではストレスホルモン幼若期曝露が成長したマウスの情動中枢扁桃体ニューロンの性質に強く影響を及ぼすことを見いだした。さらに、この影響にはある種のカリウムチャネルの長期的発現変化が関与している可能性が示唆された。
18	Shingai Y, Tatenno A, Arakawa R, Sakayori T, Kim W, Suzuki H, Okubo Y	Age-related decline in dopamine transporter in human brain using PET with a new radioligand [18F]FE-PE2I.	Ann Nucl Med 28(3),220 – 226,2014	PETおよび[18F]FE-PE2Iを用いてドーパミントランスポーターの年齢効果を測定し、線条体で7.6-7.7%/10年、黒質で3.4%/10年の減少であった。線条体については過去の研究と同等の値であり、黒質については初めての報告であった。
19	Noguchi S, Ogawa M, Kawahara G, Malicdan MC, Nishino I	Allele-specific Gene Silencing of Mutant mRNA Restores Cellular Function in Ullrich Congenital Muscular Dystrophy Fibroblast	MOLECULAR THERAPY – NUCLEIC ACIDS 3,e171 – e171,2014	COL6A1遺伝子の点変異により引き起こされる優性変異型ウルリッヒ病に対するsiRNAによる治療の可能性を解析した。c.850G>A変異を標的とした、数種のsiRNAをデザインした。株化細胞での検索により、変異遺伝子に特異的なジーンサイレンシングを引き起こす2種類のsiRNAを選択した。患者細胞へのこれらsiRNAの導入により、変異COL6A1遺伝子が特異的に抑制され、コラーゲンVIを患者細胞周囲に発現させることに成功した。これらに結果は優性変異型ウルリッヒ病に対する変異遺伝子特異的siRNAの有効性を示すものである。
20	Ota M, Sato N, Sakai K, Okazaki M, Maikusa N, Hattori K, Hori H, Teraishi T, Shimoji K, Yamada K, Kunugi H	Altered coupling of regional cerebral blood flow and brain temperature in schizophrenia compared with bipolar disorder and healthy subjects.	J Cereb Blood Flow Metab 2014 34,1868 – 1872,2014	双極性障害、統合失調症、健常者の三群で脳室内の温度を測定したところ、統合失調症でのみ脳室内温度と脳血流量との間の関連が破綻していた。
21	Ishii D, Matsuzawa D, Matsuda S, Tomizawa H, Sutoh C, Shimizu E	An isolated retrieval trial before extinction session does not prevent the return of fear	Behav Brain Res. 2015	本論文は、先行研究において恐怖記憶の再発を予防すると報告のあった課題の再現性が得られないことを示したものである。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
22	Niida A, Niida R, Matsuda H, Motomura M, Uechi A	Analysis of the presence or absence of atrophy of the subgenual and subcallosal cingulate cortices using voxel-based morphometry on MRI is useful to select prescriptions for patients with depressive symptoms	Int J Gen Med 7,513 – 524,2014	107人の大うつ病患者、74人の双極性障害、240人の健常者のT1強調の脳画像を1.5T MRIで採取し、VBMソフトウェアで脳梁膝下部前部帯状回および梁下野の萎縮度を測定した。脳梁膝下部前部帯状回の萎縮は大うつ病でみられ、梁下野の萎縮は双極性障害で観察された。治療面からみると、脳梁膝下部前部帯状回および梁下野に萎縮がみられた大うつ病では、精神安定剤と非定型抗精神病薬の両方が必要であった。
23	Kondo Masaki, Kiyomizu Kensuke, Goto Fumiyuki, Kitahara Tadashi, Imai Takao, Hashimoto Makoto, Shimogori Hiroaki, Ikezono Tetsuo, Nakayama Meiho, Watanabe Norio, Akechi Tatsuo	Analysis of vestibular-balance symptoms according to symptom duration: dimensionality of the Vertigo Symptom Scale-short form.	Health and quality of life outcomes 13(1),4 – 4,2015	めまいに関する妥当性、信頼性が確立された症状評価尺度はわが国には今までなかった。本研究では短縮版VSSの日本語版に関して159人の患者から回答を得ることで、これを確立した。
24	Manoj K. Eradath, Hiroshi Abe, Madoka Matsumoto, Kenji Matsumoto, Keiji Tanaka, Noritaka Ichinohe	Anatomical inputs to sulcal portions of areas 9m and 8Bm in the macaque monkey	Front. Neuroanat. 2015	本研究では、前帯状回背側溝の目的志向型行動選択などの神経活動の基礎となる解剖学的結合を明らかにするために、マカクザル前帯状回背側溝(area8Bm, 9m)に逆行性トレーサーを注入し、細胞体の分布を調べた。調査した全てのサルで標識細胞は、帯状回皮質に密に観察された。area9mにトレーサーを注入した場合には、前頭前皮質領域に細胞が密に観察され、area8Bmにトレーサーを注入した場合には運動前野に密に観察された。これらの領域からの投射により、前帯状回背側溝は目的志向型の行動選択の基礎となる情報を統合するのに最適な解剖学的位置づけとなっているのかもしれない。
25	Ikeno T, Kugiyama K, Ito H	Antipsychotic Medication and Risk of QTc Prolongation: Focus on Multiple Medication and Role of Cytochrome P450 Isoforms.	Open Journal of Psychiatry 4,381 – 389,2014	抗精神病薬はQTc延長との関連が知られている。本研究では、統合失調症患者の抗精神病薬治療を調査した大規模データベースを活用し、QTc延長に対する抗精神病薬の影響の特定を目的とした。ロジスティック回帰分析の結果、女性(オッズ比[OR]=1.83, 95%CI:1.28?2.56)、CYP3A4代謝薬(OR=1.56, 95%CI:1.05?2.30)がQTc延長のリスクと関連していた。
26	Hatta K, Otachi T, Fujita K, Morikawa F, Ito S, Tomiyama H, Abe T, Sudo Y, Takebayashi H, Yamashita T, Katayama S, Nakase R, Shirai Y, Usui C, Nakamura H, Ito H, Hirata T, Sawa Y, for the JAST study group.	Antipsychotic switching versus augmentation among early non-responders to risperidone or olanzapine in acute-phase schizophrenia.	Schizophrenia Research 158,213 – 222,2014	リスペリドンまたはオランザピンの治療で反応しなかった急性期統合失調症患者に対して、もうひとつの抗精神病薬に変更するか両剤を併用するかの無作為化比較試験を実施した。その結果、リスペリドンに反応しなかった患者群には両抗精神病薬の併用よりはオランザピンへの変更が、オランザピンに反応しなかった患者群にはリスペリドンへの変更よりは両抗精神病薬の併用が、それぞれわずかにアドバンテージがあることを示唆していた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
27	Kawanishi C, Aruga T, Ishizuka N, Yonemoto N, Otsuka K, Kamijo Y, Okubo Y, Ikeshita K, Sakai A, Miyaoka H, Hitomi Y, Iwakuma A, Kinoshita T, Akiyoshi J, Horikawa N, Hirotsune H, Eto N, Iwata N, Kohno M, Iwanami A, Mimura M, Asada T, Hirayasu Y, for the ACTION-J Group	Assertive case management versus enhanced usual care for people with mental health problems who had attempted suicide and were admitted to hospital emergency departments in Japan (ACTION-J): a multicentre, randomised controlled trial.	The Lancet Psychiatry 1(3),193 – 201,2014	本研究では、自殺未遂者に対する支援プログラム(ケース・マネージメント)を新たに開発し、救急医療部門と精神科がすでに連携関係にある17施設からなる全国規模の研究班(ACTION-Jグループ)を組織し、その効果を多施設共同無作為比較試験により検証した。その結果、ケース・マネージメントは、自殺未遂者の自殺再企図を6か月にわたって強力に抑止することが明らかとなった。この効果は、特に、女性、40歳未満、過去の自殺企図歴があった自殺未遂者により強く認められた。本研究の成果を日本の救急医療の現場に普及させることにより、自殺未遂者の自殺再企図を、そして自殺既遂を減らすことにつながるものと期待される。
28	Shibayama Osamu, Yoshiuchi Kazuhiro, Inagaki Masatoshi, Matsuoka Yutaka, Yoshikawa Eisho, Sugawara Yuriko, Akechi Tatsuo, Wada Noriaki, Imoto Shigeru, Murakami Koji, Ogawa Asao, Akabayashi Akira, Uchitomi Yosuke	Association between adjuvant regional radiotherapy and cognitive function in breast cancer patients treated with conservation therapy.	Cancer medicine 3(3),702 – 709,2014	部分的な放射線療法を受けた乳がん患者は治療後経ても認知機能低下を生じることが分かった。その関連には血漿中IL-6増加を介していることが示唆された。
29	Kitamura S, Enomoto M, Kamei Y, Inada N, Moriwaki A, Kamio Y, Mishima K	Association between delayed bedtime and sleep-related problems among community-dwelling 2-year-old children in Japan.	Journal of Physiological Anthropology 34,12 – ,2015	本研究では地域在住の2歳児を対象として、習慣的な遅寝と睡眠問題との関連を検証した。西東京市在住の2歳児の養育者に対し、質問紙による児童の睡眠状態の回答を求めた。425の対象児のうち、90児(21.2%)は22児以降に就床していた。遅寝の児童は、不規則な就床、起床時刻の遅れ、睡眠時間の短縮、睡眠開始/終了の困難が有意に多くみられた。この関連は遅寝児における睡眠不足の存在を示唆しているが、寝つくまでの時間は遅寝との関連が見られなかった。さらに、夜間と日中の睡眠時間を調整した後にも、遅寝は就床抵抗や起床時の問題と有意な関連を示した。結論として、2歳児においても、遅寝はさまざまな睡眠問題と関連し、生物時計の個人特性(朝型夜型)や日中の過度の昼寝による睡眠圧の低下の関与が示唆された。
30	Kaya Miyajima, Daisuke Fujisawa, Kimio Yoshimura, Masaya Ito, Satomi Nakajima, Joichiro Shirahase, Masaru Mimura, Mitsunori Miyashita	Association between Quality of End-of-Life Care and Possible Complicated Grief among Bereaved Family Members	Journal of Palliative Medicine 2014	本論文は、Quality of end-of-life careが、残された遺族の複雑性悲嘆症状にどのような影響を与えるのかを検討したものである。対象は、ランダムに抽出された日本人の一般人口であった。解析の結果、患者がどのような経過を辿るのかについての説明に対する不満や、ケアにかかる納得できない費用、故人が人生をやり遂げなかったらと知覚することが、複雑性悲嘆に関連していることが示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
31	Pu S, Nakagome K, Yamada T, Yokoyama K, Matsumura H, Mitani H, Adachi A, Kaneko K.	Association between social functioning and prefrontal hemodynamic responses in elderly adults.	Behav Brain Res 272,32 – 39,2014	健康高齢者を対象に、語流暢課題遂行中の前頭前皮質活動を近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)を用いて計測し、社会機能評価尺度の一つであるSASS(Social Adaptation self-evaluation scale)のスコアとの関連について検討したところ、SASSの合計得点と前頭前皮質の活動性との間に正の相関を認めた。非侵襲的脳機能計測法であるNIRSによる血液動態反応は、社会機能のバイオマーカーとしての可能性が示唆された。
32	Fujii T, Ota M, Hori H, Hattori K, Teraishi T, Sasayama D, Higuchi T, Kunugi H.	Association between the common functional FKBP5 variant (rs1360780) and brain structure in a non-clinical population.	J Psychiatr Res 58,96 – 101,2014	FKBP5 (FK506 binding protein)は、ストレス応答系においてグルココルチコイド受容体(GR)の核内移行を阻害し、ストレスホルモン(コルチゾール)分泌を調節するシャペロン分子である。そして、FKBP5遺伝子の一塩基多型rs1360780(C/T)のマイナーアリルTは、心的外傷後ストレス障害(PTSD)の危険アリルとされている。最近我々は、このTアリルが視床下部-下垂体-副腎系(HPA系)の過抑制と関係することを明らかにしている。本研究では、一般成人(健康者)を対象とし、構造MRIによってTアリルが脳構造に与える影響について調べた。その結果、アリルTをもつ者は、もたない者と比較して、前部帯状回の灰白質容積が小さく、また前部帯状回と後部帯状回における白質繊維の整合性が低かった。これらの領域の変化はPTSD患者においてもよくみられることから、Tアリルの存在がPTSD発症リスクを高める脳基盤となる可能性が示唆された。
33	Lee SI, Hida A, Kitamura S, Mishima K, Higuchi S	Association between the melanopsin gene polymorphism OPN4*1le394Thr and sleep/wake timing in Japanese university students	J Physiol Anthropol 33(1),9 – ,2014	大学生を対象として、光感受性色素メラノプシン遺伝子多型I394T(rs1079610)が平日もしくは休日の睡眠習慣(就寝時刻、覚醒時刻、睡眠時間)やクロノタイプ(朝型夜型指向性)と関連するか調べた。その結果、T-(CC)遺伝子型被験者はC+(CC, CT)遺伝子型被験者に比べて平日の就寝時刻と覚醒時刻がともに遅く、休日の就寝時刻も有意に遅れていた。一方、クロノタイプとの関連性が認められなかった。このことから、メラノプシン遺伝子多型I394T(rs1079610)は睡眠習慣と関連すると考えられる。
34	Okumura Y, Kasai T, Murohashi H	Attention that covers letters is necessary for the left-lateralization of an early print-tuned ERP in Japanese Hiragana	Neuropsychologia 69: 22-30, 2015	文字列の入力に応じて生じる自動的な音韻変換処理は、事象関連電位N170の左半球優位性に反映される。本研究は、ひらがな表記におけるN170の左半球優位性が文字列への注意を必要とすることを示し、文字と言語音が規則的に対応する表記においても、初期の音韻変換処理が必ずしも自動的ではないことを明らかにした。この知見は、音韻処理に障害を示す発達性読み書き障害の理解に貢献すると考えられる。
35	Morimura T, Numata Y, Nakamura S, Hirano E, Gotoh L, Goto Y, Urushitani M, Inoue K	Attenuation of endoplasmic reticulum stress in Pelizaeus-Merzbacher disease by an anti-malaria drug, chloroquine.	Exp Biol Med 239(4),489 – 501,2014	抗マラリア薬として知られているクロロキンをEIF2aリン酸化を抑制することにより小胞体ストレス反応を減弱することによりPelizaeus-Merzbacher病の治療薬となりうる事が示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
36	Yuko Okamoto, Ryo Kitada, Hiroki C. Tanabe, Masamichi J. Hayashi, Takanori Kochiyama, Toshio Munesue, Makoto Ishitobi, Daisuke N. Saito, Hisakazu T. Yanaka, Masao Omori, Yuji Wada, Hidehiko Okazawa, Akihiro T. Sasaki, Tomoyo Morita, Shoji Itakura, Hirotaka Kosaka, Norihiro Sadato.	Attenuation of the contingency detection effect in the extrastriate body area in Autism Spectrum Disorder.	Neuroscience Research 87,66 - 76,2014	<p><研究の背景> 自閉症スペクトラム障害(Autism spectrum disorder: ASD)は発達障害の一つで、その障害者は対人コミュニケーションを苦手とする。この障害を改善する方法として、他者の真似をし、真似されたことを理解する訓練が知られている。これまでの多くの研究は、「他者の真似をする」ときの脳の働きがASD者と健常者(定型発達者)でどのように異なるのかについて明らかにしてきた。しかしその一方で、「自分の真似をされている」ときの脳の働きが自閉症スペクトラム障害でどのように変容しているのかについては分かっていなかった。本研究では機能的磁気共鳴画像法(fMRI)を用いて、他者から真似をされたときの脳の働きをASD群と健常群で比較した。</p> <p><研究の内容> 目で見た情報を専ら処理する脳部位を視覚野と呼ぶ。視覚野の中には、観察した身体部位に対して強く反応する領域がある。この領域は Extrastriate Body Area (EBA、イービーイー)と呼ばれている。近年の研究でEBAは真似をされているときに活動が高まることが知られている。知的障害を有さないASD群19名(平均年齢25歳)と、年齢と知能指数を一致させた健常群22名が、本研究に参加した。参加者は自分で動作(図1)を行ったあと、他者の動作を観察した。他者の動作は自分の動作と同じ場合と異なる場合がある。つまり他者の動作と自分の動作が同じ場合は「真似をされて」おり、異なる場合は「真似をされていない」ことになる。機能的磁気共鳴画像法(fMRI)を用いて健常群の脳活動を調べてみると、真似をされたときのほうが真似をされていないときに比べて、EBAの活動が高くなった(図2左図の青色部分)。これとは対照的にASD群のEBAではこのような活動は観察されず、健常群とASD群の間に活動差があることが分かった(図2右図の緑色部分)。この結果はASD群のEBAが真似をされたときにうまく働いていないことを示している。</p>
37	Matsuo J, Kamio Y, Takahashi H, Ota M, Teraishi T, Hori H, Nagashima A, Kinoshita Y, Ishida I, Hiraishi M, Takei R, Higuchi T, Motohashi N, Kunugi H	Autistic-like traits in adult patients with mood disorders and schizophrenia	PLOS ONE ,2015	<p>290人の成人期発症精神障害患者を対象に、自閉症的特性(autistic-like trait: ALT)を強く有する患者がどのくらい存在し、それらは原疾患症状と関連するのかどうかを調べた。その結果、統合失調症や双極性障害には、寛解、非寛解に関わらず閾値以上のALTを有する人が半数以上存在していた。一方、うつ病では重症時には高いALTが見られたものの、寛解時には高いALTが観察されなかった。これらの結果は、これらの疾患横断的な病因における共通基盤を示唆するもので、児童同様、成人の精神疾患患者においても、背後にあるALTを検討することで、治療選択に役立てることができるかもしれない。</p>

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
38	Numakawa T, Nakajima S, Yamamoto N, Ooshima Y, Odaka H, Hashido K, Adachi N, Kunugi H	Basic fibroblast growth factor induces miR-134 upregulation in astrocyte for cell maturation	Biochem Biophys Res Commun 456(1): 465-470, 2015	種類が多様で、小さなnon-coding RNAであるmicroRNA(miR)は、その発現や機能と病気との関連が着目されており、脳の疾患のマーカーとしての役割にも注目が集まっている。そのため、神経細胞でのmiRの機能は最近盛んに解析され、神経機能との関係もいくらかわかってきているが、脳におけるもうひとつの主要細胞であるグリア細胞での機能はほとんど明らかではない。本論文では、アストログリア細胞の分化等に関わる栄養因子bFGFが、miR-134を発現上昇させることを発見した。さらに、このmiRには、アストログリアの成熟を促進する働きがあることを突き止めた。
39	Kubota K, Saito Y, Ohba C, Saito H, Fukuyama T, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M, Matsumoto N.	Brain magnetic resonance imaging findings and auditory brainstem response in a child with spastic paraplegia 2 due to a PLP1 splice site mutation.	Brain Dev. 37(1),158 - 162.2015	PLP1遺伝子異常による痙性対麻痺2型の患児で、頭部MRI異常と聴性脳幹反応に異常を認めた。
40	Kamio Y, Haraguchi H, Miyake A, Hiraiwa M	Brief report: Large individual variation in outcomes of autistic children receiving low-intensity behavioral interventions in community settings	Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health 2015 9(6),2015	自閉症児の早期支援についてのエビデンスは近年、増えつつあるが、我が国ではほとんど存在しない。早期療育技法の中で、北米を中心にエビデンスが報告されている応用行動分析に基づく療育を低密度ペース(中央値3.5時間/週)で受けている自閉症児(平均月齢46ヵ月)とその母親を対象に、長期的変化を療育開始時、開始後6ヵ月、1.5年後に包括的に評価し、探索的に検討した。対象児の多くは、地域の通常療育も同時に受けていた(中央値3.1時間/週)。結果は、自閉症児、その母親の双方にみられた変化には大きな個人差が認められた。子どもの自閉症症状の変化は、ABA、通常療育のいずれの週当たりの時間数と関連していなかった。療育前後で有意な変化がみられたのは、内在化障害領域であったが、それらは子どもが受けた療育のタイプ、時間、コストと無関係であった。高コストは子どもの言語社会知能の伸びの悪さと関連していた。自閉症幼児への療育サービスが乏しい地域においては、最適な予後をもたらす療育がどのようなものかについて、さらに個人差と療育内容の多様性を考慮に入れた症例対照研究の蓄積が必要である。
41	Odaka H, Numakawa T, Adachi N, Ooshima Y, Nakajima S, Katanuma Y, Inoue T, Kunugi H.	Cabergoline, dopamine D2 receptor agonist, prevents neuronal cell death under oxidative stress via reducing excitotoxicity.	PLoS One 9(6),e99271 - ,2014	本研究において、我々は、ドーパミンD2様受容体作動薬であるカベルゴリンが、酸化ストレスによる培養大脳皮質ニューロンの細胞死を用量依存的に抑制することを明らかにした。またカベルゴリンの投与が、酸化ストレス曝露による細胞外グルタミン酸の過剰蓄積を抑制し、細胞死シグナル(ERKおよびp38シグナル)の活性を減弱させることを見出した。さらに、カベルゴリン投与群におけるグルタミン酸トランスポーター(EAAC1およびGLT-1)の発現上昇を発見し、これら分子の発現上昇がカベルゴリンの神経保護作用に関与している可能性を示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
42	Saotome Takako, Klein Linda, Faux Steven	Cancer rehabilitation: a barometer for survival?	Supportive care in cancer : official journal of the Multinational Association of Supportive Care in Cancer ,2015	廃用症候群や神経症状の改善目的でシドニーの公立病院のリハビリテーション病棟に入院したがん患者に関する後方視的診療録調査を行った。リハビリテーションによる身体機能の改善がこれらの患者の生存期間の延長に寄与することが示唆された。
43	Nishimura YV, Shikanai M, Hoshino M, Ohshima T, Nabeshima Y, Mizutani K, Nagata K, Nakajima K, Kawauchi T	Cdk5 and its substrates, Dcx and p27kip1, regulate cytoplasmic dilation formation and nuclear elongation in migrating neurons	Development 141 (18),3540 – 3550,2014	神経細胞移動において、Cdk5およびその基質であるDcxとp27kip1が神経細胞の細胞質膨化の過程を制御している、という研究。
44	Shimodera Shinji, Watanabe Norio, Furukawa Toshi A, Katsuki Fujika, Fujita Hirokazu, Sasaki Megumi, Perlis Michael L	Change in quality of life after brief behavioral therapy for insomnia in concurrent depression: analysis of the effects of a randomized controlled trial.	Journal of clinical sleep medicine : JCSM : official publication of the American Academy of Sleep Medicine 10 (4),433 – 439,2014	不眠の認知行動療法は、その不眠に対する有効性は示されていたが、無作為割り付け対照試験によりQOLアウトカムに言及した研究は、世界でもほとんどない。本研究は、うつ病に伴う不眠に対して認知行動療法がQOLアウトカムにどのように資するかを世界で初めて探索した。その結果、本治療によりQOLアウトカムの全側面ではないが一部側面は改善すること、QOLアウトカムは不安・うつアウトカムとほぼ同時に良くなることを示した。
45	Ryoko Okazaki, Tetsuya Takahashi, , Kanji Ueno, Koichi Takahashi,Makoto Ishitobi, Masato Higashima, Yuji Wada.	Changes in EEG complexity with electroconvulsive therapy in a patient with autism spectrum disorders: a multiscale entropy approach	Frontiers in Human neuroscience 2015	ASDでは、異常な神経ネットワークがその病態の一つとして想定されている。本研究では、重度の強迫性障害を呈したASD患者における電気痙攣療法前後の脳機能の変化を、MSEという新たな神経ネットワーク解析手法を用いて検討を行った。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
46	Takahashi J, Yasumura A, Nakagawa E, Inagaki M	Changes in negative and positive EEG shifts during slow cortical potential training in children with attention-deficit/hyperactivity disorder: A preliminary investigation	NeuroReport 25(8),618 - 624,2014	ADHD児10名(7例が薬物療法中)に対して、ニューロフィードバック(NF)訓練を実施した。NF訓練は約3ヶ月(20セッション、1セッションは約10分)実施した。「negative条件(脳活動の集中)」と「positive条件(脳活動の沈静化)」が設定された。結果から、negative条件では11と12セッションで陰性方向の振幅が上昇した。一方、positive条件では9と13セッションで陽性方向の振幅が上昇した。本研究の結果から、NF訓練の効果は、両条件ともに10セッション前後で見られることが明らかとなった。
47	Ota M, Noda T, Sato N, Hattori K, Teraishi T, Hori H, Nagashima A, Shimoji K, Higuchi T, Kunugi H.	Characteristic distributions of regional cerebral blood flow changes in major depressive disorder patients: a pseudo-continuous arterial spin labeling (pCASL) study.	J Affect Disord 165,59 - 63,2014	大脳の脳血流量を非襲侵的に測定することができるpseudo-CASL法を用いて大うつ病性障害の患者の血流パターンを検討した結果、前部帯状回領域の血流低下が明らかとなった。
48	Watakabe A, Ohsawa S, Ichinohe N, Rockland KS, Yamamori T.	Characterization of claustral neurons by comparative gene expression profiling and dye-injection analyses.	Front Syst Neurosci 8 (98),10.3389/fnsys.2014.00098 - ,2014	意識に関係するクラウストラムの基本的な形態を記述し、新しい世界を開いた論文
49	Suzuki S, Yonekawa T, Kuwana M, Hayashi YK, Okazaki Y, Kawaguchi Y, Suzuki N, Nishino I	Clinical and histological findings associated with autoantibodies detected by RNA immunoprecipitation in inflammatory myopathies	JOURNAL OF NEUROIMMUNOLOGY 274(1-2),202 - 208,2014	「筋炎の統合的診断プロジェクト」において、2010年10月から2013年3月までにRNA免疫沈降法で自己抗体検索を行った207例の血液サンプルのうち、99例(48%)が抗体陽性であった。99例から稀な抗体が陽性であった4例を除いた95例を抗体別に5群に分けると、Anti-SRP 41例(20%)、Anti-ARS 23例(11%)、Anti-Ku 9例(9%)、Anti-U1RNP 10例(10%)、Anti-SSA/SSB 12例(12%)となった。各群と自己抗体陰性群108例との間で、臨床及び病理学的所見の頻度を統計学的に比較検討した。Anti-SRP群では、発症年齢が若く、四肢筋力低下や頸部筋力低下、筋萎縮が好発で、CK上昇や炎症細胞浸潤を伴わない筋線維壊死をみる事が多かった。Anti-ARS群は亜急性に発症し、筋外症状が好発であり、CRP上昇をみる事が多かった。Anti-Ku及びAnti-U1RNP群はリウマチ性疾患を合併している事が多かった。炎症性筋疾患における自己抗体の測定意義は、神経内科領域ではリウマチ科や皮膚科ほど議論されていないばかりか、患者の臨床像は筋病理や自己抗体とは分けて考えられてきた。今回、我々はRNA免疫沈降法によって自己抗体を検索し、陽性となった抗体別に臨床及び病理学的特徴を明らかにした。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
50	Shimane T, Matsumoto T, Wada K	Clinical behavior of Japanese community pharmacists for preventing prescription drug overdose	Psychiatry and Clinical Neurosciences 69,220 – 227,2015	<p>処方薬の過量服薬防止に向けた薬剤師の臨床行動</p> <p>【目的】日本では、ベンゾジアゼピン系薬剤を含む処方薬乱用による健康問題が拡大している。本研究では、過量服薬患者に対する薬剤師の臨床行動を調べ、薬剤師による処方薬乱用防止の可能性を検討する。</p> <p>【方法】埼玉県薬剤師会の会員のうち、保険調剤を行う全薬剤師(n=1867)に対し郵送調査(無記名)を実施した。過量服薬患者との対応経験を尋ね、対応経験がある場合は、「患者との服薬指導」、「処方医への情報提供」といった薬剤師の臨床行動に対して自己評価を依頼した。臨床行動の「良好/不良」をアウトカムとし、多重ロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>【結果】1416名より回答を得た(回収率76%)。366名(回答者の26%)は、過去1年以内に過量服薬患者との対応経験を有していた。これらの薬剤師の55.2%は、処方医への情報提供に対する臨床行動を「良好」と自己評価していた。多変量解析の結果、「処方医とのコミュニケーションに自信がない(調整オッズ比2.7)」、「処方医とのトラブルを避けたい(調整オッズ比1.7)」という意識を持つ薬剤師は、臨床行動を「不良」と評価するリスクが高いことが示された。</p> <p>【結論】薬剤師は、調剤業務を通じて処方薬乱用防止に資する可能性がある。しかし、処方医とのコミュニケーションに自信がない薬剤師や、処方医とのトラブルを恐れる薬剤師は、十分な情報提供ができていないことが明らかになった。処方薬乱用を予防していく上で、処方医は薬剤師による情報提供の意義を理解することが求められる。</p>
51	Matsumoto T, Tachimori H, Tanibuchi Y, Takano A, Wada K	Clinical features of patients with designer drugs-related disorder in Japan: A comparison with patients with methamphetamine- and hypnotic/anxiolytic-related disorders	Psychiatry Clin Neurosci 68 (5),374 – 382,2014	<p>近年わが国では脱法ドラッグ乱用が深刻な社会問題となっている。本研究の目的は、脱法ドラッグ関連障害 (designers drugs-related disorder; DDRD) 患者の臨床的特徴を、覚せい剤関連障害 (methamphetamine-related disorder; MARD) 患者および睡眠薬・抗不安薬関連障害 (hypnotics/anxiolytics-related disorder; HARD) 患者との比較を通じて明らかにすることである。方法は、2012年「全国精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」のデータベースから、DDRD患者126例、MARD患者138例、HARD患者87例の情報を抽出し、DDRD患者の臨床的変数を、MARD患者とHARD患者と比較するというものであった。その結果、DDRD患者はMARD患者およびHARD患者に比べて若年かつ男性に多く、生活背景についてはHARD患者との共通していた一方で、薬物使用の理由はむしろMARD患者との共通していた。また、DDRD患者は、MARD患者よりもICD-10 F1診断における精神病性障害と有害な使用に該当する者が多く、脱法ドラッグの強力な精神病惹起危険性および有害性が推測された。</p>

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
52	Hori H, Yamamoto N, Teraishi T, Ota M, Fujii T, Sasayama D, Matsuo J, Kinoshita Y, Hattori K, Nagashima A, Ishida I, Koga N, Higuchi T, Kunugi H. M.D., Ph.D.; Takashi Fujii, Ph.D.; Daimei Sasayama, M.D., Ph.D.; Junko Matsuo; Yukiko Kinoshita; Kotaro Hattori, M.D., Ph.D.; Anna Nagashima; Ikki Ishida; Norie Koga; Teruhiko Higuchi, M.D., Ph.D.; Hiroshi Kunugi, M.D., Ph.D.	Cognitive effects of the ANK3 risk variants in patients with bipolar disorder and healthy individuals	Journal of Affective Disorders 158,90 – 96,2014	本研究では、ゲノムワイド関連解析において双極性障害と関連することが示されたANK3の一塩基多型rs10994336とrs10761482が、双極性障害の中間表現型である認知機能にどのような影響を与えているのかを調べた。Rs10761482のリスクアレルを保有している双極性障害患者では、保有していない患者に比べ、言語理解、論理的記憶、処理速度の成績が有意に低く、リスクアレルを保有している健常者では、保有していない健常者に比べ、実行機能と視覚性記憶の成績が有意に低いという結果が得られた。これらの結果は、ANK3のリスク多型は認知機能に影響を与えることで双極性障害と関連するという可能性を示唆する。
53	Yasumura A, Yamamoto H, Yasumura Y, Moriguchi Y, Hiraki K, Nakagawa E, Inagaki M	Cognitive shifting in children with attention-deficit hyperactivity disorder: A near infrared spectroscopy study	Journal of Psychiatry 18 (196),2014	注意欠陥・多動性障害(ADHD)の中核症状として、主に前頭前野に関わる実行機能の障害が示唆されている。本研究では、実行機能のうち注意の柔軟な転換を必要とする認知的シフティング能力が求められるDimension-Change Card Sort(DCCS)課題を用いて7-14歳のADHD児に行動学および生理学指標の両面からの検討を加えた。その結果、ADHD児は定型発達児と比較して、DCCS課題において誤答数が多く、前頭前野における酸素化ヘモグロビンの賦活が乏しいことが分かった。これらの結果は、発達障害におけるADHDの鑑別診断のために役立ち、認知的、脳機能的な障害の理解に貢献すると示唆される。
54	Saito Y, Baba S, Takahashi A, Sone D, Akashi N, Koichihara R, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Nakagawa E, Sugai K, Sasaki M, Otsuki T.	Complex regional pain syndrome in a 15-year-old girl successfully treated with continuous epidural anesthesia.	Brain Dev. 37(1),175 – 178,2015	持続硬膜外麻酔が著効した複合性局所疼痛症候群(CRPS)を呈した15歳女児を報告した。
55	Ito K, Shimano Y, Imabayashi E, Nakata Y, Omachi Y, Sato N, Arima K, Matsuda H.	Concordance between 99m Tc-ECD SPECT and 18 F-FDG PET interpretations in patients with cognitive disorders diagnosed according to NIA-AA criteria.	Int J Geriatr Psychiatry 29 (10),1079 – 1086,2014	NIA-AAの研究目的の診断基準で判定された認知機能低下患者においてFDG-PETと99mTc-ECDによる脳血流SPECTの診断能と読影者間的一致率を比較した。40人のアミロイドPET陽性のアルツハイマー病と軽度認知障害患者と15人の非アルツハイマー病患者における両方の画像を3人の放射線科医が独立で判定した。後頭葉と後部帯状回～楔前部以外は両方の画像読影結果は一致し、3人の診断能はPETとSPECTで差はみられず60～70%であった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
56	Kajino S, Ishihara K, Goto K, Ishigaki K, Noguchi S, Nonaka I, Osawa M, Nishino I, Hayashi YK	Congenital fiber type disproportion myopathy caused by LMNA mutations	JOURNAL OF THE NEUROLOGICAL SCIENCES 340 (1-2),94 - 98,2014	LMNA遺伝子変異による筋線維タイプ不均等を呈する一群を報告した。筋病理学的に筋線維タイプ不均等が観察された場合はLMNA 遺伝子変異の可能性を考慮する必要がある。
57	Nakamura S, Saito Y, Ishiyama A, Sugai K, Iso T, Inagaki M, Sasaki M.	Correlation of augmented startle reflex with brainstem electrophysiological responses in Tay-Sachs disease.	Brain Dev. 37(1),101 - 106,2015	稀な先天代謝異常であるTay-Sachs病では強い驚愕反射と電気生理学的脳幹反射異常の間に関連性があることを見出した。
58	Kim J, Nakamura T, Kikuchi H, Yoshiuchi K, Yamamoto Y.	Co-Variation of depressive mood and spontaneous physical activity evaluated by ecological momentary assessment in major depressive disorder	Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc. 2014 ,6635 - 6638,2014	抑うつ気分の客観的な評価はうつ病の診断や治療に有用であると考えられる。我々は、うつ病患者でecological momentary assessmentによる抑うつ気分の記録とアクチグラフによる身体活動の計測を同時に行い、抑うつ気分の悪化が身体活動の間欠性の増加と関連していることを明らかにした。この結果はうつ病患者において抑うつ気分と身体活動動態に関連があることを示しており、さらに抑うつ気分の連続モニタリングの可能性を示唆するものである。
59	Ito M, Hofmann SG	Culture and affect: the factor structure of the affective style questionnaire and its relation with depression and anxiety among Japanese.	BMC Res Note. 2014	本論文は、不安や抑うつなどの感情障害の発生と維持に寄与すると想定されるAffective Styleを測定する尺度について、日本人大学生を対象にしてその因子構造を検討した。その結果、先行研究とは一部異なり、Adjusting, Tolerating, Concealingの他に、Holdingという因子が示唆された。それぞれが不安や抑うつに与える影響を検討したところ、抑うつにはAdjustingとHoldingが、不安にはAdjustingが抑制的に影響することが示された。
60	Hori K, Nagai T, Shan W, Sakamoto A, Taya S, Hashimoto R, Hayashi T, Abe M, Yamazaki M, Nakao K, Nishioka T, Sakimura K, Yamada K, Kaibuchi K, Hoshino M	Cytoskeletal regulation by AUTS2 in Neuronal migration and neuritogenesis	Cell Rep 9(6),2166 - 2179,2014	これまで機能未知であった自閉症感受性遺伝子Auts2 が、神経細胞内でRac1やCdc42など低分子量Gタンパクの上流因子として働き、大脳皮質の神経細胞移動や突起形成に関与することを明らかにした。当遺伝子の異常により正常な大脳皮質形成が阻害されることが精神疾患の発症に繋がるのではないかと示唆が得られ、今後、精神疾患のさらなる診断・治療への貢献が期待される。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
61	Dong M, Noguchi S, Endo Y, Hayashi YK, Yoshida S, Nonaka I, Nishino I	DAG1 mutations associated with asymptomatic hyperCKemia and hypoglycosylation of α -dystroglycan	NEUROLOGY 84(3),273 - 279,2015	ジストログリカノパチーが疑われる20例に対して全エクソーム解析を行い、高CK血症1例にDAG1遺伝子の複合ヘテロ接合変異を見いだした。DAG1欠損細胞に変異遺伝子を導入したところ、細胞の表現型の回復が見られなかったため、これらの変異が病因性を持つことが証明された。この遺伝子欠損細胞を用いる遺伝子変異証明実験は、様々な遺伝子変異に広く利用できる可能性が考えられた。
62	Endo Y, Furuta A, Nishino I	Danon disease: a phenotypic expression of LAMP-2 deficiency	ACTA NEUROPATHOLOGICA 129(3),391 - 398,2015	Danon病は肥大型心筋症、筋力低下、知的障害を3徴とするX連鎖性遺伝病である。LAMP2遺伝子の機能喪失型変異により、LAMP2タンパクが欠損し、マクロオートファジーが障害されることが原因である。また、シャペロン介在性オートファジーやRNA, DNAを標的としたオートファジーにも影響を及ぼしていると考えられている。本稿では、Danon病の臨床学的特徴、病理組織学的特徴、分子生物学的メカニズム、疾患モデル動物の表現型などを概説し、治療法応用が期待される近年の研究を紹介した。
63	Yamauchi Takashi, Inagaki Masatoshi, Yonemoto Naohiro, Iwasaki Motoki, Inoue Manami, Akechi Tatsuo, Iso Hiroyasu, Tsugane Shoichiro,	Death by suicide and other externally caused injuries after stroke in Japan (1990-2010): the Japan Public Health Center-based prospective study.	Psychosomatic medicine 76(6),452 - 459,2014	前向き地域住民コホートデータを用い、脳卒中がその後の自殺および他の外因死に及ぼすリスクについて検討した。わが国の9保健所管内に居住する40～69歳の男女116,669人を2010年まで追跡した。脳卒中になっていないグループに対する、脳卒中から5年以内のグループにおける自殺および他の外因死のリスクはともに約10倍であった。また、自殺・他の外因死ともに、40～64歳においてのみ脳卒中罹患者の相対リスクが有意に高かった。本研究の結果は、特に脳卒中後5年以内においては、(1)脳卒中後のうつ病・抑うつ状態をきちんと把握すること、(2)脳卒中後のリハビリテーションにより身体的および認知的な障害の程度を小さくすることが、自殺および他の外因死の予防を考えるうえで重要であることを示唆するものと考えられた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
64	Yamauchi Takashi, Inagaki Masatoshi, Yonemoto Naohiro, Iwasaki Motoki, Inoue Manami, Akechi Tatsuo, Iso Hiroyasu, Tsugane Shoichiro,	Death by suicide and other externally caused injuries following a cancer diagnosis: the Japan Public Health Center-based Prospective Study.	Psycho-oncology 23(9),1034 - 1041,2014	<p>【背景】 先行研究ではがんの診断後に自殺のリスクが高まる事が指摘されているが、がん診断後の自殺および他の外因死の双方のリスクを診断からの期間別に明らかにするための前向き研究は行われていない。本研究では、わが国における前向き地域住民コホートをを用い、がん診断後の自殺および他の外因死のリスクを診断からの期間別に検討した。</p> <p>【方法】 「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」(主任研究者:津金昌一郎 国立がん研究センターがん予防・検診研究センター長)のデータを用い分析を実施した。分析対象者はコホート対象地域に居住し、ベースライン調査に回答してがんの既往が確認されなかった40～69歳の住民101,914人であった。追跡期間は1990年または1993年1月から2010年12月までとした。ポアソン回帰モデルにより、自殺、他の外因死の各々について、がん診断なし群に対するがん診断群の相対リスクおよびその95%信頼区間を算出した。また、交絡の影響を検討するため、がん診断後の自殺および他の外因死事例を用いたケース・クロスオーバー分析を行った。</p> <p>【結果】 追跡期間中に新たにがん罹患した者において34例の自殺と47例の外因死が、がん未罹患患者では522例の自殺と693例の外因死が確認された。ポアソン回帰モデルの結果、がん未罹患患者に対する、がん診断から1年以内の者における自殺および他の外因死の相対リスクはともに約20倍であるとともに、診断から1年以上になると顕著に低下した。ケース・クロスオーバー分析の結果もポアソン回帰モデルの結果と整合的であった。</p> <p>【考察】 がん診断から1年以内における自殺および他の外因死のリスクが高いことの背景には、がんの診断直後の心理的ストレスとともに、がん罹患およびその治療による認知・身体的機能や社会的機能の低下があると考えられた。特にがん診断後1年以内においては自殺を含めた様々な外因死のリスクに留意する必要があることが示唆された。</p>
65	Umeda, T., Watanabe, H., Sato, MA., Kawato M., Isa T., Nishimura, Y.	Decoding of the spike timing of primary afferents during voluntary arm movements in monkeys	Front. Neurosci. 8,97 - ,2014	<p>脊髄損傷や脳梗塞患者の多くは、四肢の運動麻痺だけでなく、体性感覚(身体の位置や何を触ったか)麻痺を併発することがしばしば観られる。本研究は、麻痺した体性感覚を再建するための刺激パターンを生成するアルゴリズムの確立を目的として、サルの上肢随意運動により生じる末梢の感覚ニューロンの活動を記録し、スパース線形回帰分析を用いて腕の運動情報から末梢神経群の活動パターンを推定することに成功した。今回作製した分析モデルは、体性感覚野に対する刺激パターンを生成するインターフェースをデザインするにあたって有用である。</p>

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
66	Miyatake S, Koshimizu E, Hayashi YK, Miya K, Shiina M, Nakashima M, Tsurusaki Y, Miyake N, Saitsu H, Ogata K, Nishino I, Matsumoto N	Deep sequencing detects very-low-grade somatic mosaicism in the unaffected mother of siblings with nemaline myopathy	NEUROMUSCULAR DISORDERS 24(7),642 – 647,2014	ACTA1遺伝子変異によるネマリンミオパチー患者の非罹患の親において、病因変異の体細胞モザイシズムが認められた。次世代シーケンサーの新たな有用性が示された。
67	Jung M, Kosaka H, Saito D N, Ishitobi M, Morita T, Inohara K, Asano M, Arai S, Munesue T, Tomoda, A, Wada Y, Sadato N, Okazawa H, Iidaka T	Default mode network in young male adults with autism spectrum disorder: relationship with autism spectrum traits	Molecular Autism 2014, 5:35 ,2014	自閉症スペクトラム障害 (ASD) をもつ青年期男性の方々が、定型発達群の青年期男性 (定型発達群) と比べて安静状態でのデフォルトモードネットワーク (default mode network; DMN) と呼ばれる脳領域での脳活動の機能的連結が弱いことを、MRIを用いた研究にて明らかにした。また、自閉症傾向とDMNの機能的連結との間の相関が、ASD群だけでなく定型発達群においても認められ、DMNにおける機能的連結の強さが、ASD診断にかかわらず自閉症スペクトラム傾向のバイオマーカーになる可能性が示唆された。
68	Ohnishi T, Murata T, Watanabe A, Hida A, Ohba H, Iwayama Y, Mishima K, Gondo Y, Yoshikawa T.	Defective Craniofacial Development and Brain Function in a Mouse Model for Depletion of Intracellular Inositol Synthesis	J Biol Chem 289(15),10785 – 10796,2014	イノシトールモノフォスファターゼ遺伝子Imp1に変異を持つ細胞内イノシトール枯渇マウスを用いた分子生物学および行動薬理学試験により、躁うつ病(双極性障害)の治療に用いられるリチウム(気分安定薬)の作用の少なくとも一部がイノシトールモノフォスファターゼの働きを抑制することにより発揮されていることを明らかにした。
69	Suzuki Y, Fukasawa M, Nakajima S, Narisawa T, Keiko A, Kim Y	Developing a Consensus-based Definition of “Kokoro-no Care” or Mental Health Services and Psychosocial Support: Drawing from Experiences of Mental Health Professionals Who Responded to the Great East Japan Earthquake. 【on line】	Version 1. PLoS Curr. 7,2015	東日本大震災後、こころのケアチームとして支援活動に従事した精神保健医療専門家を対象として、「こころのケア」を定義について、Delphi法を用いて適切性と自由意見を求めた。2回の意見集約において「こころのケア」を精神保健サービスおよび心理社会的支援として定義することに合意が得られた。併せて、東日本大震災時の支援に基づいて、これら二つの連続性や活動上の注意、代替となる分類の提案、ケアの要素は専門家の関与によるか否かによるものではない、「心理」という言葉の使用に関する曖昧さ等が意見として挙げられた。
70	Fujimori M., Shirai Y., Asai M., Katsumata N., Kubota K., Uchitomi Y.	Development and preliminary evaluation of communication skills training program for oncologists based on patient preferences for communicating bad news.	Palliative & Supportive Care 12 (5),379 – 386,2014	本研究は、我が国のがん患者の悪い知らせを伝えられる際のコミュニケーションに対する意向に即したコミュニケーション技術研修プログラムの開発過程を示し、参加者の医師のコミュニケーション行動、コミュニケーションに対する自己効力感の前後比較からその有用性を示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
71	Noto, D., H. Sakuma, K. Takahashi, R. Saika, R. Saga, M. Yamada, T. Yamamura, and S. Miyake	Development of a culture system to induce microglia-like cells from hematopoietic cells.	Neuropathol Appl Neurobiol 40,697 - 713,2014	我々は、in vitroでアストロサイトと共培養することで、マウス末梢血単球からTREM2を発現するミクログリア様細胞の分化誘導に成功した。またヒト末梢血単球からも同様にミクログリア様細胞が誘導できることを見出した。さらに、このミクログリア様細胞の誘導にはIL-34が重要な役割を果たしていることを見出した。我々の開発したミクログリア様細胞の培養系は、神経疾患病態におけるミクログリアの役割を研究する上で、非常に有用と考えられた。
72	Yamaguchi S, Koike S, Watanabe K-I Ando S	Development of a Japanese version of the Reported and Intended Behaviour Scale: Reliability and validity	Psychiatry and Clinical Neurosciences 68(6),445 - 455,2014	本研究は、英国で開発されたReported and Intended Behaviour Scale (RIBS)の日本における妥当性と信頼性を検証した。調査の結果、高い内的整合性($\alpha = 0.83$)が報告された。RIBS-Jの第2下位尺度とMental Health Knowledge Schedule($r = 0.33$, $P < 0.001$)、そして統合失調症に対する社会的距離尺度($r = -0.60$, $P < 0.001$)との間に有意な相関が認められた。モデル適合度の結果も良好であった($\chi^2 = 41.001$, $d.f. = 19$, $P = 0.002$, $GFI = 0.956$, $AGFI = 0.916$, $CFI = 0.955$, $RMSEA = 0.072$)。再検査信頼性(ρc)は、0.71であった。RIBS-Jは、精神障害者に対する行動を測定する尺度として信頼できる尺度である。
73	Kikuchi H, Yoshiuchi K, Inada S, Ando T, Yamamoto Y	Development of an ecological momentary assessment scale for appetite	BioPsychoSocial Medicine 9,2 - ,2015	食行動に関連する患者報告型アウトカムである食欲について、ecological momentary assessment用尺度を開発した。携帯型コンピュータを用いて健康な被験者に食欲・心理的因子・飲食物の記録を1週間行ってもらったデータに基づき、マルチレベル因子分析を行い、5項目からなる被験者内2因子(空腹満腹感、渴望度)、被験者間1因子の尺度が得られた。被験者内比較における信頼性や妥当性も確認された。また、空腹満腹感と渴望度は心理的因子と異なる関連を示すことがわかった。今後食行動の日常生活下調査を行うにあたり有用な尺度となるものと考えられる。
74	Fujii C, Fukuda Y, Ando K, Kikuchi A, Okada T:	Development of forensic mental health services in Japan	nt J Ment Health Syst 8(21),2014	2005年より施行された医療観察法につき、本法制定までの歴史的背景と本法に基づく制度の概要を説明したうえで、諸外国の精度との比較、2012年3月までの運用状況につき分析した。現在までのところ、日本の司法精神医療は概ね円滑な運用がなされているが、入院の長期化や資源配置の不均衡などが今後の課題である。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
75	Wada E, Yoshida M, Kojima Y, Nonaka I, Ohashi K, Nagata Y, Shiozuka M, Date M, Higashi T, Nishino I, Matsuda R	Dietary Phosphorus Overload Aggravates the Phenotype or the Dystrophin-Deficient mdx Mouse	THE AMERICAN JOURNAL OF HUMAN GENETICS 184(11),3094 - 3104,2014	近年、リンやリン酸塩の食事摂取量が増加しており、リン酸塩の過剰摂取がいくつかの疾患の病状を悪化させることが報告されている。今回、デュシェンヌ型筋ジストロフィーの動物モデルであるmdxマウスにおいて、リン摂取量の変化が病状にどのような影響を与えるのか調査した。実験では、食餌100gあたり0.7, 1.0, 2.0gのリンが含まれたものを、90日間にわたってmdxマウスとコントロールマウスに与え続けた。その結果、リンを過剰摂取させると、異所性石灰化の増加、筋力低下、自発運動減少をきたし、筋ジストロフィー症状が悪化することが判明した。またリン摂取を制限すると、運動後の筋壊死が抑えられるなど筋ジストロフィー病態の改善が見られた。つまり、低リン食には筋ジストロフィー病態に対する治療効果が期待できるという結論が得られた。
76	Nakamura, M., T. Matsuoka, N. Chihara, S. Miyake, W. Sato, M. Araki, T. Okamoto, Y. Lin, M. Ogawa, M. Murata, T. Aranami, and T. Yamamura	Differential effects of fingolimod on B-cell populations in multiple sclerosis.	Multiple Sclerosis J 10(10),1371 - 1380,2014	多発性硬化症の治療薬フィンゴリモドは二次リンパ組織からリンパ球が移出するのを抑制する。これまでT細胞に対する影響が調べられているが、今回はじめてB細胞に対する影響を解析した。その結果、フィンゴリモド治療を受けた患者では、Ki67陽性で活性化したB細胞数が激減することがわかった。しかし、CD138陽性プラズマブラストの減少の程度は比較的小さく、患者ごとにフィンゴリモドの治療効果が異なること(特にNMOは悪化させる)に対応すると考えられた。
77	Hirai M, Gunji A, Inoue Y, Kita Y, Hayashi T, Nishimaki K, Nakamura M, Kakigi R, Inagaki M	Differential electrophysiological responses to biological motion in children and adults with and without autism spectrum disorders	Research in Autism Spectrum Disorders 8(12), 1623-1634,2014	光点運動のみから他者行為を知覚可能なバイオリジカルモーション(以下、BM)について、自閉症スペクトラム(ASD)児では処理の特異性が報告されているものの、その処理の時間特性については不明であった。本研究では、8-22歳の12名のASD児ならびに成人、性別・年齢統制群を対象にBMと統制刺激に対する事象関連電位を計測した。結果、統制群において、光点位置をランダム化したスクランブルモーション(SM)よりもBMで活動が大きかったものの、ASD群においては、BMとSMに対する活動は有意差が無かった。これはASD群における局所的な運動への鋭敏性を示唆している。
78	Hathout Y, Marathi RL, Rayavarapu S, Zhang A, Brown KJ, Seol H, Gordish-Dressman H, Cirak S, Bello L, Nagaraju K, Partridge T, Hoffman EP, Takeda S, Mah JK, Henricson E, McDonald C	Discovery of serum protein biomarkers in the mdx mouse model and cross-species comparison to Duchenne muscular dystrophy patients.	Hum Mol Genet. 23(24),6458 - 6469,2014	DMDにおける血清タンパク質バイオマーカーの同定は病態、病態の進行、治療の程度を推し量るうえで重要であると考えられている。本研究ではDMDモデルマウスの2種類のmdxマウスと正常マウスおよび健康人とDMD患者の血清を用いて血清のタンパク質を網羅的に探索を行った。その結果、マウスとヒトにおいて20もの血清中のタンパク質レベルの発現の変化はほぼ同じであったことから、これらタンパク質は病態や病態の進行を反映するバイオマーカーとなり得る可能性が示された。今後これら分子の筋活動や病態との関わりや、natural historyを観察しつつ、今後行われる臨床試験において治療効果を反映するか否かを検証していく必要がある。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
79	Araki W, Minegishi S, Motoki K, Kume H, Hohjoh H, Araki YM, Tamaoka A	Disease-associated mutations of TDP-43 promote turnover of the protein through the proteasomal pathway.	Mol Neurobiol 50(3),1049 – 1058,2014	細胞モデルを用いて、TDP-43の疾患関連変異はプロテアソーム経路を介して、そのタンパク代謝回転を促進することを示した。
80	Yoshimura Natsue, Jimura Koji, DaSalla Charles Sayo, Shin Duk, Kambara Hiroyuki, Hanakawa Takashi, Koike Yasuharu	Dissociable neural representations of wrist motor coordinate frames in human motor cortices.	NeuroImage 97,53 – 61,2014	ヒトの手首運動における運動座標系の脳内表象を、fMRI画像のボクセルデータを用いた機械学習法により調べた。一次運動野には関節の屈曲・伸展を判別する情報が多く表現され、運動前野や補足運動野にはデカルト座標系における運動方向を判別する情報が多く表現されていることが確認された。これらの結果はサルを用いた過去の生理学的研究結果と一致するものであることから、本研究で示したヒトを用いた非侵襲的アプローチの有効性が示唆された。
81	Hara K, Adachi N, Akanuma N, Ito M, Okazaki M, Matsubara R, Adachi T, Ishii R, Kanemoto K, Matsuura M, Hara E, Kato M, Onuma T.	Dissociative experiences in epilepsy: Effects of epilepsy-related factors on pathological dissociation.	Epilepsy Behav. 44,185 – 191,2015	てんかん患者の心因性非てんかん発作(PNESs)は解離性障害として分類できる。てんかん患者のPNESsの罹患率は健常者の解離体験よりはるかに高い。てんかん関連の要素が病的解離に関連するかどうかに関して明確にするために、われわれは225人のてんかん患者と334人のマッチングされた健常者とのコントロール研究を行った。すべての参加者はDissociative Experiences Scale(DES)の日本語版を施行した。てんかん群と対照群の間にはDESスコア(DES-S)における有意差がなかった。てんかん群は対照群より有意に高いDES taxon(DES-T; DES-Sの部分集合で病理学的な解離のインデックス)を示した。225人のてんかん患者のうち31人(13.8%)にはPNESsがあった。DES-SとDES-Tとの強い関係のためPNESsを解離の症状と見なすことができた。多重回帰分析では短いてんかん罹病機関、多い発作頻度または短い教育歴のある患者は病理学的な解離を生じる傾向があった。これらの結果はてんかん患者がある臨床学的因子を持っているときより病的解離を経験する傾向があることを示した。
82	Naomi Matsuura, Makoto Ishitobi, Sumiyoshi Arai, Kaori Kawamura, Mizuki Asano, Keisuke Inohara, Tadamasu Narimoto,Yuji Wada, Michio Hiratani, Hirotaka Kosak	Distinguishing between autism spectrum disorder and attention deficit hyperactivity disorder by using behavioral checklists, cognitive assessments, and neuropsychological test battery.	Asian Journal of Psychiatry. 12,50 – 57,2014	ASDとADHDの鑑別を行動評価尺度、知能検査、前頭葉機能評価バッテリーを用いて行った研究である。両障害は、共通の症状を呈するため時に鑑別が困難となるが、様々な評価指標を組み合わせることで一定の鑑別が可能になりうることを示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
83	Okazaki M, Adachi N, Akanuma N, Hara K, Ito M, Kato M, Onuma T.	Do antipsychotic drugs increase seizure frequency in epilepsy patients?	Eur Neuropsychopharmacol. 24 (11),1738 – 1744,2014	抗てんかん薬で既に治療されたてんかん患者で抗精神病薬(APD)の追加が発作頻度を増加させるかどうかを調査するためにわれわれは精神症状のためのAPD治療を受けている150人のてんかん患者とてんかん初発年齢、ベースライン評価およびてんかん発作型でマッチングされたAPD治療を受けていない309人のてんかん患者で1年の発作コントロール転帰をと比較した。発作頻度はベースライン(APD開始直前)および1カ月、3カ月、6カ月、12カ月に記録され、それぞれのフォローアップの4ポイントの発作転帰はベースラインと比較された。2つのグループ全体およびてんかんのタイプ(特発性全般てんかんと部分てんかん)で発作転帰が比較された。APDグループではまたAPDのタイプ(第1世代、第2世代およびその組み合わせ)と精神状態のタイプ(精神病および非精神病)で発作転帰は分析された。発作転帰は4つすべてのフォローアップ4ポイントでコントロールグループよりAPDグループで有意に良好であった。てんかんタイプでは、発作転帰における改善は部分てんかん患者でのみ観察された。APDグループでは、APDのタイプまたは精神状態で発作転帰に有意差がなかった。抗てんかん薬で既に治療されているてんかん患者が抗精神病薬を用いて精神症状の治療をすることは発作コントロールの転帰において安全だと考えられた。
84	Takeuchi Masashi, Furuta Hisakazu, Sumiyoshi Tomiki, Suzuki Michio, Ochiai Yoko, Hosokawa Munehito, Matsui Mie, Kurachi Masayoshi	Does sleep improve memory organization?	Frontiers in Behavioral Neuroscience 8,65 – 65,2014	記憶の組織化とは意味的まとまりを用いた記憶の方略を指し、単語リスト課題などにより測定される。本研究では記憶の組織化に対する睡眠の効果を健常者を対象に初めて検討した。結果として、睡眠により記憶の組織化の指標が向上することが、非睡眠を取らなかった場合との比較により見出された。
85	Endo Y, Noguchi S, Hara Y, Hayashi YK, Motomura K, Miyatake S, Murakami N, Tanaka S, Yamashita S, Kizu R, Bamba M, Goto YI, Matsumoto N, Nonaka I, Nishino I	Dominant mutations in ORAI1 cause tubular aggregate myopathy with hypocalcemia via constitutive activation of store-operated Ca ²⁺ channels	HUMAN MOLECULAR GENETICS 24 (3),637 – 648,2015	細管集合体ミオパシー(Tubular aggregate myopathy, TAM)は、細管集合体を病理学的特徴とする遺伝性ミオパシーであるが、その遺伝学的背景はこれまでほとんど解明されていなかった。本研究では、常染色体優性遺伝形式を呈するTAM 3家系の遺伝子解析により、ORAI1遺伝子の機能獲得型変異がTAMを引き起こすことをつきとめた。ORAI1変異によりStore-operated Ca ²⁺ entry (SOCE)チャネルが障害され、細胞外から細胞内にカルシウムイオンが過剰に流入することが疾患の原因であることを証明した。
86	Sugiyama Azusa, Nagase Hiroshi, Oka Jun-Ichiro, Yamada Mitsuhiko, Saitoh Akiyoshi	DOR(2)-selective but not DOR(1)-selective antagonist abolishes anxiolytic-like effects of the δ opioid receptor agonist KNT-127.	Neuropharmacology 79,314 – 320,2014	最近我々は δ オピオイド受容体(DOR)作動薬KNT-127がラットにおいて抗不安様作用を示すことを明らかにした。今回KNT-127の抗不安様作用発現におけるDORサブタイプの関与に関して検討を行った。ラット高架式十字迷路試験におけるKNT-127の抗不安様作用は、DOR2拮抗薬NTB前処置により有意に抑制された。DOR1拮抗薬BNTXはKNT-127の示す抗不安様作用へ影響を与えなかった。一方で、ラットホルマリン試験におけるKNT-127の鎮痛作用はDOR1拮抗薬BNTX前処置により有意に抑制された。DOR2拮抗薬NTBはKNT-127の示す鎮痛作用に影響を与えなかった。以上より、不安においてこれらDORサブタイプは異なる作用を示すことが明らかとなった。将来的にDOR2選択的な作動薬がより良い抗不安薬候補となるかもしれない。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
87	Ogawa R, Ma Y, Yamaguchi M, Ito T, Watanabe Y, Ohtani T, Murakami S, Uchida S, De Gaspari P, Uezumi A, Nakamura M, Miyagoe-Suzuki Y, Tsujikawa K, Hashimoto N, Braun T, Tanaka T, Takeda S, Yamamoto H, Fukada S	Doublecortin marks a new population of transiently amplifying muscle progenitor cells and is required for myofiber maturation during skeletal muscle regeneration.	Development 142(1),51 – 61,2015	骨格筋再生に必須の筋衛星細胞には少なくともPax7陽性MyoD陰性、Pax7陽性MyoD陽性、MyoD陽性myogenin陽性の3分画があり、Pax7陽性MyoD陰性の分画はもっとも幹細胞の性質を有した未分化な細胞と考えられてきた。本研究では(1)ダブルコルチンを発現するPax7陽性MyoD陰性の筋衛星細胞分画は再生の後期に増え、骨格筋線維の成熟に寄与すること、(2)ダブルコルチンは細胞の移動に重要な働きをすることを明らかにした。
88	Nitahara-Kasahara Yuko, Hayashita-Kinoh Hiromi, Chiyo Tomoko, Nishiyama Akiyo, Okada Hironori, Takeda Shin'ichi, Okada Takashi	Dystrophic mdx mice develop severe cardiac and respiratory dysfunction following genetic ablation of the anti-inflammatory cytokine IL-10.	Human molecular genetics 23 (15),3990 – 4000,2014	DMDに対するステロイド療法が着目されているが、従来、炎症と病態との関係の解析は充分ではなかった。抗炎症性サイトカインIL-10を欠損したmdxマウスの作出と病態解析を行い、炎症素因による重症化を証明した。今後、抗炎症療法開発や免疫寛容誘導遺伝子治療への応用が期待される。
89	Sakai C, Yamaguchi S, Sasaki M, Miyamoto Y, Matsushima Y, Goto Y	ECHS1 mutations cause combined respiratory chain deficiency resulting in Leigh syndrome.	Hum Mut 36: 232-239, 2015	リー脳症の患者で新たな病因として脂肪酸代謝酵素の一つである、ECHS1変異例を見だし報告した。脂肪酸代謝異常と呼吸鎖酵素活性低下の新たな関係を示す例として注目される。
90	Fujimori M, Shirai Y, Asai M, Kubota K, Katsumata N, Uchitomi Y.	Effect of communication skills training program for oncologists based on patient preferences for communication when receiving bad news: a randomized controlled trial.	Journal of Clinical Oncology 32 (20),2166 – 2172,2014	医療において、患者-医師間のコミュニケーションは重要な要素であるため、がん専門医を対象としたコミュニケーション学習プログラム(GST)を開発し、その有効性を検討した。がん専門医30名を無作為に介入群と何もしない統制群に分け、介入前後に模擬患者との面談のコミュニケーション行動の評価、医師のコミュニケーションに対する自信、担当する外来患者の診察後の抑うつ状態を評価した。その結果、統制群と比べて介入群の悪い知らせの伝え方と共感に関連するコミュニケーション行動と自信が介入後に有意に増加すること、担当する患者の抑うつ状態が有意に低いことが示された。
91	Ota M, Wakabayashi C, Matsuo J, Kinoshita Y, Hori H, Hattori K, Sasayama D, Teraishi T, Obu S, Ozawa H, Kunugi H.	Effect of L-theanine on sensorimotor gating in healthy human subjects.	Psychiatry Clin Neurosci 68 (5),337 – 343,2014	健常被験者に対してL-テアニンを投与したところ、PPIの改善をみた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
92	Sakayori T, Tateno A, Arakawa R, Ikeda Y, Suzuki H, Okubo Y	Effect of mazindol on extracellular dopamine concentration in human brain measured by PET.	Psychopharmacology (Berl) 231 (11),2321 – 2325,2014	PETおよび ¹¹ C]racloprideを用いてマジンドールのシナプス間隙ドーパミン増加作用を測定し、0.5mgで1.74%、1.5mgで8.14%であった。これは他の依存性物質と同様の値であり、マジンドールが依存性を示す可能性が示唆された。
93	Fujii T, Hori H, Ota M, Hattori K, Teraishi T, Sasayama D, Yamamoto N, Higuchi T, Kunugi H	Effect of the common functional FKBP5 variant (rs1360780) on the hypothalamic-pituitary-adrenal axis and peripheral blood gene expression.	Psychoneuroendocrinology 42,89 – 97,2014	FKBP5 (FK506 binding protein5)は、ストレスホルモン(コルチゾール)分泌を調節するシャペロン分子であり、その遺伝子FKBP5の一塩基多型 rs1360780 (C/T)のマイナーアリルTは、心的外傷後ストレス障害(PTSD)のリスクを高めるとされる。本研究は、一般成人(健常者)を対象として、この遺伝子多型と視床下部-下垂体-副腎系(HPA系)によるストレス応答との関連をデキサメタゾン/CRH負荷テストを用いて検討した。その結果、この遺伝子多型は、年齢依存的にストレス応答に影響することを見出した。すなわち、高齢群(>50歳)と若年群(≤50歳)とに分けると、高齢群では、アリルTをもつ者は、もたない者と比較して、HPA系のコルチゾール反応が低下していた。さらに、末梢血中のグルココルチコイド受容体(GR)の遺伝子発現(mRNA)が上昇しており、FKBP5の発現は低下していた。若年群では、このような関連は認められなかった。以上から、FKBP5の遺伝子多型rs1360780のTアリルは、年齢依存的にGRやFKBP5の発現、HPA系のコルチゾール反応に影響を与え、それによってPTSD発症リスクを高める可能性が示唆される。
94	Saito Y, Matsuda Y, Sugai K, Nakagawa E, Ishiyama A, Saito T, Komaki H, Sasaki M, Miyata A	Effects of clonazepam on self-induced photoparoxysmal responses.	Brain Dev. 36(4),337 – 341,2014	自己誘発性光過敏反応を呈した患者にクロナゼパムが有効性であった。
95	Namima T, Yasuda M, Banno T, Okazawa G, Komatsu H	Effects of luminance contrast on the color selectivity of neurons in the macaque area v4 and inferior temporal cortex	Journal of Neuroscience, 2014	マカケザルの大脳皮質にある色情報処理経路において、色の情報表現が背景との明るさの違い(輝度コントラスト)によって変化することを明らかにし、明るさの影響を受けて変化する色の見えのメカニズムを理解するための重要な知見を得た。
96	Matsuda S, Matsuzawa D, Ishii D, Tomizawa H, Shimizu E	Effects of memory age and interval of fear extinction sessions on contextual fear extinction.	Neurosci Letter 578,139 – 142,2014	恐怖消去トレーニングは曝露療法の動物理論モデルとして考えられている。本論文は、恐怖消去トレーニングをするタイミングによって恐怖消去トレーニングの効果が異なることを示したものである。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
97	Naomi Matsuura, Makoto Ishitobi, Sumiyoshi Arai, Kaori Kawamura, Mizuki Asano, Keisuke Inohara, Tohru Fujioka, Tadamasa Narimoto, Yuji Wada, Michio Hiratani, Hiroataka Kosaka	Effects of methylphenidate in children with attention deficit hyperactivity disorder:a near-infrared spectroscopy study with CANTAB®	Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health ,2014	注意欠如多動性障害(Attention Deficit Hyperactivity Disorder, ADHD)では、実行機能のひとつであるワーキングメモリの障害が存在し、中核症状への密接な関与が示唆されている。しかし、メチルフェニデート徐放剤(osmotic release oral system methylphenidate, OROS-MPH)のADHD児に対する治療効果をワーキングメモリの観点から評価した研究は少ない。本研究では、ADHD児のワーキングメモリの障害を前頭葉機能評価バッテリーであるCambridge neuropsychological test automated battery (CANTAB)を用いて評価し、CANTAB課題遂行中の前頭葉血流変化を近赤外線スペクトロスコピィ(near infrared spectroscopy, NIRS)を用いて同時測定することにより、OROS-MPHによる治療効果を検討することを目的とした。本研究では特に、視空間WMを用い、その結果、課題成績がMPH on offで変化しないものの、課題の難易度に応じて、賦活パターンが変化することを明らかにした。このことは、課題成績に反映されないMPHの効果は、NIRSで示される信号強度の変化として認められる可能性を示すと考えられる。
98	Ishii M, Okumura Y, Sugiyama Y, Hasegawa H, Noda T, Hirayasu Y, Ito H	Efficacy of shared decision making on treatment satisfaction for patients with first-admission schizophrenia: study protocol for a randomised controlled trial	BMC Psychiatry 14,111 – 118,2014	Shared decision makingは患者中心医療における患者アウトカム改善に対する約束された介入である。本研究では、無作為化試験に関する研究計画を発表した。対象は、沼津中央病院に初回入院した16歳から65歳の統合失調症患者58名である。無作為化の後、decision making interventionの満足度を比較する予定である。
99	M. Araki, T. Matsuoka, K. Miyamoto, S. Kusunoki, T. Okamoto, M. Murata, S. Miyake, T. Aranami and T. Yamamura	Efficacy of the anti-IL-6 receptor antibody tocilizumab in neuromyelitis optica: A pilot study	Neurology 82(15),1302 – 1306,2014	7人の抗アクアポリン4抗体陽性視神経脊髄炎の患者にトシリズマブを投与し、再発抑制効果と痛みや疲労の軽減効果を認めた。
100	Masaki Y, Inde T, Nagata T, Tanihata J, Kanamori T, Seio K, Takeda S, Sekine M	Enhancement of exon skipping in mdx52 mice by 2'-O-methyl-2-thioribothymidine incorporation into phosphorothioate oligonucleotides.	Med Chem Commun 6: 630-633,2014	mdx52マウスの骨格筋を対象に、新規に合成した2'-Oメチル・チオリボミン・アンチセンス核酸は、既存の2'-Oメチル・アンチセンス核酸と比べて、有意に高い効率でエクソン51スキップを誘導出来る事を示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
101	Kaga M, Inagaki M, Ohta R	Epidemiological study of Landau-Kleffner syndrome(LKS) in Japan	Brain&Development 36(4), 284 - 286, 2014	Landau-Kleffner症候群(LKS)の疫学について初めて報告した。発症した場合、必ず病院小児科を受診する疾患と考えられるため小児科を有する全国3004病院の小児科長に診断基準を提示し、調査前1年間のLKSの新患数と再来数、年齢性別等を尋ねた。52%の回答率を得、LKS新患は6名、再来数は32名であった。期間中の総務省口動態統計と比較し5~14歳までのLKS発生頻度は約100万人に1人、5~19歳の有病率は30~40万人に1人と推定した。
102	Ikeda M, Kaneita Y, Uchiyama M, Mishima K, Uchimura N, Nakaji S, Akashiba T, Itani O, Aono H, Ohida T	Epidemiological study of the associations between sleep complaints and metabolic syndrome in Japan	Sleep and Biological Rhythms 12(4), 269 - 278, 2014	ナショナルサーベイで採取した成人3,936名(男性1,592名、女性2,344名)の睡眠状況と生活習慣病関連データの解析から、不眠が生活習慣病の関連要因であることが明らかになった(OR 1.23, 95%CI: 1.03-1.48, P = 0.02)。内訳では、不眠は高血圧(OR 1.28, 95%CI: 1.08-1.52, P < 0.01)、腹部肥満(OR 1.90, 95% CI: 1.60-2.26, P < 0.01)、及びand 脂質異常症(OR 1.50, 95%CI: 1.27-1.77, P < 0.01)に関連していた。
103	Numata Y, Gotoh L, Iwaki A, Kurosawa K, Takanashi JI, Deguchi K, Yamamoto T, Osaka H, Inoue K	Epidemiological, clinical, and genetic landscapes of hypomyelinating leukodystrophies.	J Neurol. 261(4), 752-758, 2014	本邦における初めての先天性大脳白質形成不全症の全国疫学調査を実施し、その結果を報告した。
104	Goto M, Saito Y, Honda R, Saito T, Sugai K, Matsuda Y, Miyatake C, Takeshita E, Ishiyama A, Komaki H, Nakagawa E, Sasaki M, Uto C, Kikuchi K, Motoki T, Saitoh S.	Episodic tremors representing cortical myoclonus are characteristic in Angelman syndrome due to UBE3A mutations.	Brain Dev. 37(2): 216-22, 2015	UBE3A遺伝子変異を有するアンジェルマン症候群の患者4人において、24時間脳波検査やJerk-locked averaging法を用いて本症候群に特徴的な振戦様運動について検討した。これは前頭中心優位に7-8Hzの律動波を伴う皮質性ミオクローヌスであることを明らかにした。
105	Ito K, Nakata Y, Matsuda H, Sugai K, Watanabe M, Kamiya K, Kimura Y, Shigemoto Y, Okazaki M, Sasaki M, Sato N	Evaluation of FDG-PET and ECD-SPECT in patients with subcortical band heterotopia.	Brain Dev 36(7), 578 - 584, 2014	皮質下の帯状異所性灰白質(subcortical band heterotopia; SBH)のFDG-PETと99mTc-ECD脳血流SPECT所見を明らかにすることを目的とする。SBHの12例(FDG-PET施行8例、脳血流SPECT施行12例)を対象とした。FDG-PETでは8例中5例で脳表の大脳皮質よりも高い代謝がSBHでみられた。脳血流SPECTでは、12例中8例でSBHに有意に高い血流がみられ、異常脳波部位と一致した。FDG-PETおよび脳血流SPECTはSBHの機能異常を検出するのに有用である。
106	Hayashi T	Evolutionarily conserved palmitoylation-dependent regulation of ionotropic glutamate receptors in vertebrates	Neurotransmitter 2014(1), e388 - , 2014	脊椎動物全般の脳において主要な興奮性神経伝達を担う、各種イオンチャンネル型グルタミン酸受容体のパルミトイル化翻訳後修飾部位に関して、進化上の保存性を明らかにし、これを報告した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
107	Miyatake S, Osaka H, Shiina M, Sasaki M, Takanashi JI, Haginoya K, Wada T, Morimoto M, Ando N, Ikuta Y, Nakashima M, Tsurusaki Y, Miyake N, Ogata K, Matsumoto N, Saitsu H.	Expanding the phenotypic spectrum of TUBB4A-associated hypomyelinating leukoencephalopathies.	Neurology 82(24),2230 – 2237,2014	基底核および小脳萎縮を伴う髄鞘形成不全症であるH-ABC及び分類不明の先天性大脳白質形成不全症の症例で疾患を惹起するTUBB4A遺伝子の変異を同定した。H-ABCで同定された変異と分類不明例で同定された変異は、 $\alpha \cdot \beta$ tubulinのヘテロダイマー立体構造モデル解析から、機能的に異なる位置のアミノ酸の変異で、これが表現型の差違に関連していると考えられた。
108	Sukigara S, Dai H, Nabatame S, Otsuki T, Hanai S, Honda R, Saito T, Nakagawa E, Kaido T, Sato N, Kaneko Y, Takahashi A, Sugai K, Saito Y, Sasaki M, Goto YI, Koizumi S, Itoh M.	Expression of Astrocyte-Related Receptors in Cortical Dysplasia With Intractable Epilepsy.	J Neuropathol Exp Neurol. 73 (3),798 – 806,2014	難治てんかんの外科手術標本を用い、皮質異形成におけるアストロサイト受容体がコントロールとは異なる分布を示す事を明らかにし、てんかんの病態にけるグリア細胞の関与を裏付ける糸口を見いだした。
109	Yonekawa T, Oya Y, Higuchi Y, Hashiguchi A, Takashima H, Sugai K, Sasaki M.	Extremely Severe Complicated Spastic Paraplegia 3A with Neonatal Onset.	Pediatr Neurol. 51(5),726 – 729,2014	非常に重症な複合型痙性対麻痺(SPG3A)の1例を報告した。本例は新生児期より四肢の痙性が強く、自発運動がほとんど見られず、常時臥床状態が続いている。
110	Iseki K, Fukuyama H, Oishi N, Tomimoto H, Otsuka Y, Nankaku M, Benninger D, Hallett M, Hanakawa T	Freezing of gait and white matter changes: a tract-based spatial statistics study	J Clin Mov Disord 2(1),2015	拡散強調MRIを用いて虚血性脳障害患者の歩行障害の責任病態を解明
111	Fukushima A, Yagi R, Kawai N, Honda M, Nishina E, et al.	Frequencies of Inaudible High-Frequency sounds Differentially Affect Brain Activity. Positive and Negative Hypersonic Effects	Plos one 9(4),e95464 – ,2014	可聴域に隣接した16-32kHzの周波数帯域の超高周波成分が可聴音と共存すると深部脳活性が低下するのに対して、48kHz以上の超高周波成分の共存は深部脳活性を増加させることを見いだした。
112	Ishii R, Canuet L, Ishihara T, Aoki Y, Ikeda S, Hata M, Katsimichas T, Gunji A, Takahashi H, Nakahachi T, Iwase M, Takeda M.	Frontal midline theta rhythm and gamma power changes during focused attention on mental calculation: an MEG beamformer analysis.	Front Hum Neurosci 8,406 – ,2014	前頭正中部シータ律動(Fm θ)は、ヒトの注意集中機能と関連が強く示唆されている脳波成分である。本件研究では、脳磁図空間フィルター法を用いて、暗算課題時のFm θ の発生源と関連する皮質活動について検討した。既往の脳波・脳磁図研究同様、暗算課題に伴うFm θ の発生源は背側前帯状皮質と隣接する内側前頭前皮質に認められた。さらに、暗算課題遂行中は、基礎的数値処理や空間的注意に関連する右頭頂領域のガンマ律動の事象関連同期や、神経活動の抑制に関わる右外側前頭前皮質のガンマ律動の事象関連脱同期とも関連した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
113	Ohtsuka Y, Kanagawa M, Yu CC, Ito C, Chiyo T, Kobayashi K, Okada T, Takeda S, Toda T	Fukutin is prerequisite to ameliorate muscular dystrophic phenotype by myofiber-selective LARGE expression.	Sci Rep. 5,8316 – 8316,2015	α -ジストログリカン(α -DG)の糖鎖異常を伴う福山型先天性筋ジストロフィーの治療法は確立していない。そこで、 α -DG糖鎖合成に関わるLARGE遺伝子をAAVベクターにて発症マウスに導入し病態改善を認めた。この際LARGEによる α -DG糖鎖修飾にはfukutinが必要であった。今後のベクター関連技術や免疫応答制御療法の進歩により遺伝子治療の実用化が期待される。
114	Narishige R, Kawashima Y, Otaka Y, Saitoh T, Okubo Y	Gender differences in suicide attempters: a retrospective study of precipitating factors for suicide attempts at a critical emergency unit in Japan.	BMC Psychiatry 14:144, 2014.	本研究では、日本における自殺の誘発因子の性差を検討した。方法は、2010年から2012年に日本医科大学付属病院高度救命救急センターを受診した自殺未遂者193名(男性88名, 女性105名)を対象とし、後方視的なカルテ調査により、自殺企図要因、企図手段、精神科診断に関するデータを収集して行った。男女比較を行った結果、自殺企図要因では、男性で健康問題、経済的問題(借金)、職場問題の割合が高く、女性では家族問題や孤独感の割合が高かった。精神科診断は、男性で大うつ病性障害および双極性障害の割合が高く、女性ではパーソナリティ障害および気分変調性障害の割合が高かった。企図手段にも性差が認められた。
115	Fukuoka M., Yoshida M., Eda A., Takahashi M., Hohjoh H.	Gene silencing mediated by endogenous microRNAs under heat stress conditions in mammalian cells.	PLoS ONE 9,e103130 – e103130,2014	熱ストレス下における内在性miRNAの機能に関する研究
116	Nakamura K, Fujii W, Tsuboi M, Tanihata J, Teramoto N, Takeuchi S, Naito K, Yamanouchi K, Nishihara M	Generation of muscular dystrophy model rats with a CRISPR/Cas system.	Sci Rep. 4,5635 – 5635,2014	デュシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) の治療法開発のために、これまでマウス、イヌがDMDモデル動物として用いられてきた。今回、ジストロフィン遺伝子exon3と16を標的としたCRISPR/Casシステムを用いて初めてラットでDMDモデル動物を作出することに成功した。同マウス骨格筋は筋力の低下が認められただけでなく、心筋でも変性・壊死が多く認められ、マウスモデルよりもよりヒトの病態に近いモデル動物であると考えられる。この筋ジストロフィーラットを用いることでDMDの治療法開発が進むことが期待される。
117	Iwai T, Jin K, Ohnuki T, Sasaki-Hamada S, Nakamura M, Saitoh A, Sugiyama A, Ikeda M, Tanabe M, Oka J	Glucagon-like peptide-2-induced memory improvement and anxiolytic effects in mice. Neuropeptides.	Neuropeptides.2015 Feb;49:7-14,2015	LPS処置マウスにおいて認められる記憶障害に対してGLP-2は有効性を示した。またGLP-2慢性処置によって、弱い抗不安様行動が認められた。さらにACTH処置マウスへGLP-2を処置することにより扁桃体内の5-HTが上昇した。一方で5-HIAAやトリプトファン水酸化酵素2値に変化は認められなかった。よってGLP-2がLPS処置マウスにおいて記憶機能の保護及び機能亢進を示し、5-HT神経の変化によって抗不安様作用を示すことが明らかとなった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
118	Kamimura H, Ito H	Glycemic control in a 79-year-old female with mild cognitive impairment using a medication reminder device: a case report.	International Psychogeriatrics 26 (6) : 1045-1048, 2014.	軽度認知障害のある在宅患者の服薬アドヒアランスを高める機器の使用に関する事例報告である。機器の使用により、HbA1cの値が改善するとともに、服薬管理をしていた家族の負担が軽減されていた。
119	Mori-Yoshimura M, Oya Y, Yajima H, Yonemoto N, Kobayashi Y, Hayashi YK, Noguchi S, Nishino I, Murata M	GNE myopathy: A prospective natural history study of disease progression	NEUROMUSCULAR DISORDERS 24 (5),380 - 386,2014	国内外でGNEミオパチー(縁どり空胞を伴う遠位型ミオパチー)患者を対象とした臨床治験の準備が進んでいる。きたる臨床試験で用いる評価尺度を選別するために、GNEミオパチー患者24名を対象に、後方視的な自然歴調査を行った。その結果、6分間歩行テスト、徒手筋力テスト、粗大運動能力尺度、握力テスト、%予想努力性肺活量が治験の臨床評価尺度として有用で、病気の進行度をよく反映していることが判明した。またこの研究は、GNEミオパチーの後方視的自然歴調査としては初めての報告であり、GNEミオパチーは基本的に進行性の疾患であるが、心機能は侵されないことが明らかになった。
120	Huizing M, Carrillo-Carrasco N, Malicdan MC, Noguchi S, Gahl WA, Mitrani-Rosenbaum S, Argov Z, Nishino I	GNE myopathy: New name and new mutation nomenclature	NEUROMUSCULAR DISORDERS 24 (5),387 - 389,2014	埜中ミオパチー、縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチー、inclusion body myopathy2, hereditary inclusion body myopathyは、すべてGNE遺伝子変異によって発症する同一の遺伝性ミオパチーである。臨床、研究分野での混乱をさけるために、これらの疾患名をGNEミオパチーに統一し、今後は国際的に唯一使用される疾患名となることが望ましい。また、GNE遺伝子由来の8つのmRNAスプライスバリエーションのうち、hGNE1とhGNE2の2つが遺伝子変異のアノテーションに使用されてきた。hGNE2(753アミノ酸)は最長のmRNAであるが、その発見はhGNE1(722アミノ酸)よりも新しく、従ってこれまでの変異報告や基礎研究ではhGNE1が使用されることがほとんどであった。今後はhGNE2を使用する方向で統一することが望ましい。
121	Oie Shohei, Matsuzaki Kazuya, Yokoyama Wataru, Tokunaga Shinji, Waku Tsuyoshi, Han Song-lee, Iwasaki Naoya, Mikogai Aya, Yasuzawa-Tanaka Kayoko, Kishimoto Hiroyuki, Hiyoshi Hiromi, Nakajima Yuka, Araki Toshiyuki, Kimura Keiji, Yanagisawa Junn, Murayama Akiko	Hepatic rRNA Transcription Regulates High-Fat-Diet-Induced Obesity.	Cell reports 7(3),807 - 820,2014	リボソームRNAの転写を調節する因子であるNucleomethylin(NML)の機能により、肥満状態のマウス肝ではリボソームRNAの転写が抑制されている。肥満とリボソームRNA転写の関係の解析を行う目的で、NMLのノックアウトマウスを作成したところ、NML-KOマウス肝ではリボソームRNAの転写の亢進、ATPの低下と脂質産生・蓄積の抑制などが観察された。また、NML-KOマウスに高脂肪食を負荷してもリボソームRNAの転写抑制は生じず、体重増加・脂質蓄積が起こりにくかった。このような結果から、リボソームRNAの転写活性化はエネルギー消費を促進する作用があること、リボソームRNA転写抑制が高脂肪食摂取によるエネルギー貯蔵に必要であることが示された。
122	Negishi Y, Hattori A, Takeshita E, Sakai C, Ando N, Ito T, Goto Y, Saitoh S	Homoplasmy of a mitochondrial 3697G>A mutation causes Leigh syndrome.	J Hum Genet 59: 405-407, 2014	ミトコンドリアDNAのND1領域に存在するm.3697G>A変異をホモプラスミーでもつ家系を報告した。これまで同変異はMELASとレーベル病で報告されているが、変異率が高い場合はリー脳症になることが示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
123	Nishi D, Shirakawa MN, Ota E, Hanada N, Mori R.	Hypnosis for induction of labour (Review)	.Cochrane Database of Systematic Reviews Issue 8,2014	妊婦の陣痛促進に催眠・リラクゼーションが有効かどうかメタ解析で検討することを試みたが、選択基準に該当するランダム化比較試験はなかった。
124	Saito Y, Aoki Y, Takeshita E, Saito T, Sugai K, Komaki H, Nakagawa E, Ishiyama A, Takanoha S, Wada S, Sasaki M.	Hypophosphatemia is a common complication in severely disabled individuals with neurological disorders and is caused by infection, refeeding and Fanconi syndrome.	Brain Dev. 36(10),878 - 883,2014	重症心身障害児(者)が感染症に罹患したりしたときや、しばらく絶食後に再度栄養が入ったときに低リン血症がしばしば見られることを報告した。
125	Kawase K, Nishino I, Sugimoto M, Kouwaki M, Koyama N, Yokochi K	Hypoxic ischemic encephalopathy in a case of intranuclear rod myopathy without any prenatal sentinel event	BRAIN & DEVELOPMENT 37 (2),265 - 269,2015	低酸素性虚血性脳症を合併した核内ロッドマイオパチーの一例を報告した。筋生検により核内ロッドが見られ、ACTA1に変異(c.449C>T)が認められた。MRIにより生後9日の時点で低酸素性虚血性脳症(HIE)が認められた。出産前には、脳損傷によって引き起こされるような異常が認められなかったことから、HIEは出生時の呼吸不全によって引き起こされたものと考えられた。この症例は、出生前での神経筋疾患早期発見、綿密な出産管理、呼吸管理の重要性を示唆している。
126	Uezumi A, Fukada S, Yamamoto N, Ikemoto-Uezumi M, Nakatani M, Morita M, Yamaguchi A, Yamada H, Nishino I, Hamada Y, Tsuchida K	Identification and characterization of PDGFR α (+) mesenchymal progenitors in human skeletal muscle	CELL DEATH AND DISEASE 5,e1186 - e1186,2014	脂肪、線維結合組織の形成は筋の病的状態や機能障害の指標となる。人の骨格筋において、脂肪や線維形成に寄与する非筋原性の間葉前駆細胞を同定し、その評価を行った。特異的マーカーとしてPDGFR α を用いることで、人の骨格筋間質から間葉前駆細胞を同定し、単離することができた。PDGFR α 陽性細胞は、CD56陽性の筋原性細胞とは全く異なる細胞であり、脂肪原性、線維原性のpotentialが高かった。PDGFR α が活性化すると、PI3K-AktやMEK2-MAPK signaling pathwayを介してPDGFR α 陽性細胞の増殖が促進された。また、遺伝性・非遺伝性筋疾患患者の筋において著明なPDGFR α 陽性細胞の蓄積を認めた。この結果は、PDGFR α 陽性間葉前駆細胞が人における筋疾患の病態と関連していることを示唆しており、筋疾患治療の発展につながる可能性がある。
127	Naoto Kamide, Takashi Asakawa, Nobuhiko Shibasaki, Yoshio Kasahara, Yoshiki Tamada, Kosuke Kitano, Yutaka Kikuchi, Keisuke Yorimoto, Yoko Kobayashi, Testuo Komori	Identification of the type of exercise therapy that affects functioning in patients with early-stage amyotrophic lateral sclerosis: A multicenter, collaborative study	Neurology and Clinical Neuroscience ,2014	ADL障害が軽度な筋萎縮性側索硬化症患者に対して有効な運動療法の検証～多施設共同研究による検証～
128	Numakawa T, Matsumoto T, Ooshima Y, Chiba S, Furuta M, Izumi A, Ninomiya-Baba M, Odaka H, Hashido K, Adachi N, Kunugi H.	Impairments in Brain-derived Neurotrophic Factor-induced Glutamate Release in Cultured Cortical Neurons Derived from Rats with Intrauterine Growth Retardation: Possible Involvement of Suppression of TrkB/Phospholipase C- γ Activation.	Neurochem. Res. 39(4),785 - 792,2014	ラット子宮内発達障害モデルにおける、大脳皮質ニューロンのBDNF/TrkBシグナル減弱

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
129	Ito H, Shiwaku H, Yoshida C, Homma H, Luo H, Chen X, Fujita K, Musante L, Fischer U, Frints S G M, Romano C, Ikeuchi Y, Shimamura T, Imoto S, Miyano S, Muramatsu S-I, Kawauchi T, Hoshino M, Sudol M, Arumughan A, Wanker E E, Rich T, Schwartz C, Matsuzaki F, Bonni A, Kalscheuer V M, Okazawa H	In utero gene therapy rescues microcephaly caused by Pqbp1-hypofunction in neural stem progenitor cells.	Molecular psychiatry ,2014	Pqbp1機能低下による疾患について、子宮内エレクトロポレーションによる神経前駆細胞に対する遺伝子導入によって、その病態を改善するということをマウスで示した研究
130	Kim W, Tateno A, Arakawa R, Sakayori T, Ikeda Y, Suzuki H, Okubo Y	In vivo activity of modafinil on dopamine transporter measured with positron emission tomography and [18F]FE-PE2I.	Int J Neuropsychopharmacol 17 (5),697 - 703,2014	PETおよび[18F]FE-PE2Iを用いてモダフィニルのドーパミントランスポーター占有率を測定し、200mgで51.4%、300mgで56.9%であった。これはメチルフェニデートと同様の値であり、モダフィニルが依存性を示す可能性が示唆された。
131	Goto M, Abe O, Aoki S, Hayashi N, Miyati T, Takao H, Matsuda H, Yamashita F, Iwatsubo T, Mori H, Kunimatsu A, Ino K, Yano K, Ohtomo K	Influence of Parameter Settings in Voxel-based Morphometry 8. Using DARTEL and Region-of-interest on Reproducibility in Gray Matter Volumetry.	Methods Inf Med 54 (2),171 - 178,2015	DARTELを用いたVBM8のパラメータ設定のROI解析による灰白質体積測定の再現性への影響を検討した。再現性はBias regularization (Bias R), FWHM, 雑音除去フィルターの設定により影響を受けた。しかし、MRF加重、サンプリング距離、非線形変換規定には影響を受けなかった。Bias R1の設定は前頭葉および海馬における良好な再現性に影響した。多施設共同研究ではVBM8での適切な設定が重要である。
132	Ito H, Hattori H, Kazui H, Taguchi M, Ikeda M	Integrating psychiatric services into comprehensive dementia care in the community.	Open J Psychiatry 5 (2) : 129-136, 2015.	全国で、精神科医療が関与して開発・運用されている認知症地域連携バスを収集し、その内容を分析した。8つの地域連携バスが収集され、多様なサービスの情報を集約するために開発されていた。中には、本人の希望、処方内容、情報共有に関して工夫をしている地域連携バスが存在していた。
133	Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim Y, Watanuki S	Interaction between valence of empathy and familiarity: is it difficult to empathize with the positive events of a stranger?	J Physiol Anthropol 34 (13),2015	本研究では、脳全体の活動の大きさを反映するGlobal field power (GFP) という脳波の指標を用いて、親しい友人と初対面の他人にポジティブもしくはネガティブなイベントが起きた際の共感について検討した。その結果、ネガティブな共感時には友人と他人の両方でGFP増加が認められたが、ポジティブな共感時は友人に対してのみGFP増加が認められ、共感の情動価と共感相手との親密性に交互作用が認められることが明らかになった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
134	Motomura Y, Takeshita A, Egashira Y, Nishimura T, Kim Y, Watanuki S	Inter-individual relationships in empathic traits and feedback-related fronto-central brain activity: an event-related potential study	J Physiol Anthropol 34(14),2015	共感性には個人差があり、エラーに関連した前帯状皮質由来の事象関連電位であるError related negativity(ERN)の振幅が共感性の個人差と関連があることが明らかにされている。そこで本研究ではERNに類似した前頭部由来の電位であるFeedback related negativity(FRN)と共感性との関連を検討した。その結果、ギャンプリング課題時に惹起されたFRN振幅は共感特性と有意な相関を示したが、ERNとは逆向きの相関を示すことが明らかになった。
135	Puentes S, T. Kaidob, T. Hanakawac, N. Ichinohed, T. Otsuki	Internal capsule stroke in the common marmoset	Neuroscience 284,400 - 411,2015	小型霊長類である小型マーモセットにおいて、脳卒中モデルを開発した。前脈絡動脈結索によって、片側性の運動失調を呈するモデルを確立した。
136	Inagaki Masatoshi, Kawashima Yoshitaka, Kawanishi Chiaki, Yonemoto Naohiro, Sugimoto Tatsuya, Furuno Taku, Ikeshita Katsumi, Eto Nobuaki, Tachikawa Hirokazu, Shiraishi Yohko, Yamada Mitsuhiko	Interventions to prevent repeat suicidal behavior in patients admitted to an emergency department for a suicide attempt: A meta-analysis.	Journal of affective disorders 175C,66 - 78,2014	我々は、救急医療機関を受診した自殺未遂者の自殺再企図防止を目的とした介入の効果を明らかにするために、これまでに行われたランダム化比較試験の系統的レビューとメタ解析を行った。電子データベース(MEDLINE、PsychoINFO、CINAHL、EMBASE)とハンドサーチングにより論文を抽出し、最終的に29件の適格論文を抽出した(24件のトライアル)。メタ解析の結果、Active contact and follow-upタイプの介入(9件)は、12ヶ月以内の自殺再企図を抑制する効果があることが明らかとなった(n=5319; pooled RR=0.83; 95%CI=0.71-0.97)。しかし、長期間の自殺再企図を抑制する効果は認められなかった。
137	Kuroiwa-Numasawa Y, Okada Y, Shibata S, Kishi N, Akamatsu W, Shoji M, Nakanishi A, Oyama M, Osaka H, Inoue K, Takahashi K, Yamanaka S, Kosaki K, Takahashi T, Okano H.	Involvement of ER stress in dysmyelination of Pelizaeus-Merzbacher disease with PLP1 missense mutations shown by iPSC-derived oligodendrocytes.	StemCellReports 2,1 - 14,2014	Pelizaeus-Merzbacher病患者由来細胞を用いてiPSCを作成し、これを試験管内で成熟オリゴデンドロサイトに分化誘導することに成功した。この結果、疾患原因遺伝子PLP1の点変異が小胞体ストレスを惹起することを、患者由来細胞ではじめて明らかにした。
138	Masuda T, Nishimoto N, Tomiyama D, Matsuda T, Tozaki-Saitoh H, Tamura T, Kohsaka S, Tsuda M, Inoue K.	IRF8 is a transcriptional determinant for microglial motility.	Purinergic Signal. 10(3),515 - 521,2014	脳内グリア細胞であるミクログリアは脳の損傷部位に移動し、その場所で様々な機能を発揮していることが知られている。しかしながらこの損傷部位への細胞移動を支える細胞内メカニズムについては不明な点が多い。我々の以前の研究でATPがその受容体であるP2Y12を介して細胞移動を誘導することを報告した。本研究ではこのATPによる細胞移動に転写因子であるIRF8が重要な役割を担っていることを明らかにした。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
139	Tanboon J, Hayashi YK, Nishino I, Sangruchi T	Kyphoscoliosis and easy fatigability in a 14-year-old boy	NEUROPATHOLOGY 35(1),91 - 93,2015	TPM2遺伝子内にc.415_417delGAG (p.Glu139del)変異を持つキャップミオパチー患者を、初めてアジアから報告した。臨床的には易疲労性、両側性眼瞼下垂、脊柱後側弯、拘束性換気障害を認め、筋病理学的にはタイプ1筋線維萎縮、タイプ1筋線維優位、キャップ構造を認めた。これらの特徴は同変異をもつヨーロッパ人症例とよく合致している。
140	Miyashita A,Wen Y,Kitamura N,Matsubara E,Kawarabayashi T,Shoji M,Tomita N, Furukawa K,Arai H,Asada T,Harigaya Y,Ikeda M,Amari M,Hanyu H,Higuchi S,Nishizawa M, Suga M, Kawase Y, Akatsu H, Imagawa M, Hamaguchi T, Yamada M, Morihara T, Takeda M, Takao T, Nakata K, Sasaki K, Watanabe K, Nakashima K, Urakami K, Ooya T, Takahashi M, Yuzuriha T, Serikawa K, Yoshimoto S, Nakagawa R, Saito Y, Hatsuta H, Murayama S, Kakita A, Takahashi H, Yamaguchi H, Akazawa K, Kanazawa I, Ihara Y, Ikeuchi T, Kuwano R	Lack of genetic association between TREM2 and late-onset Alzheimer's disease in a Japanese population	Journal of Alzheimer's Disease 41 (4),1031 - 1038,2014	日本人の高齢発症のアルツハイマー病の症例の脳のRNAの網羅的検索により、TREM2という遺伝子が関与していることが明らかとなった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
141	Yuen M, Sandaradura SA, Dowling JJ, Kostyukova AS, Moroz N, Quinlan KG, Lehtokari VL, Ravenscroft G, Todd EJ, Ceyhan-Birsoy O, Gokhin DS, Maluenda J, Lek M, Nolent F, Pappas CT, Novak SM, D'Amico A, Malfatti E, Thomas BP, Gabriel SB, Gupta N, Daly MJ, Ilkovski B, Houweling PJ, Davidson AE, Swanson LC, Brownstein CA, Gupta VA, Medne L, Shannon P, Martin N, Bick DP, Flisberg A, Holmberg E, Van den Bergh P, Lapunzina P, Waddell LB, Sloboda DD, Bertini E, Chitayat D, Telfer WR, Laquerrière A, Gregorio CC, Ottenheim CA, Bönnemann CG, Pelin K, Beggs AH, Hayashi YK, Romero NB, Laing NG, Nishino I, Wallgren-Pettersson C, Melki J, Fowler VM, MacArthur DG, North KN, Clarke NF	Leiomodlin-3 dysfunction results in thin filament disorganization and nemaline myopathy	THE JOURNAL OF CLINICAL INVESTIGATION 124(11),4693 - 4708,2014	ネマリンマイオパチーの新規原因遺伝子としてLMOD3を報告した。エクソーム解析とサンガーシーケンスにより、本遺伝子の常染色体劣性変異が15家系に見出された。また、LMOD3がアクチンフィラメントを伸長することが示された。本患者において、アクチンフィラメントの短縮が確認された。これらの結果からLMOD3の機能喪失変異は、アクチンフィラメントの短縮を引き起こし、ネマリンマイオパチーを発症すると考えられた。
142	Wang CH, Liang WC, Minami N, Nishino I, Jong YJ	Limb-girdle Muscular Dystrophy Type 2A with Mutation in CAPN3: The First Report in Taiwan	PEDIATRICS AND NEONATOLOGY 56(1),62 - 65,2015	台湾で初めて見出された33歳の肢帯型筋ジストロフィー2A型女性患者を報告した。15歳に運動不耐で発症。来院時には動揺性歩行とGowers徴候を示した。筋病理では分葉線維を多数認めた。CAPN3遺伝子解析では、c2047_2050 del4, p.Lys683fsがホモ接合型で見出された。
143	Goto M, Abe O, Aoki S, Hayashi N, Ohtsu H, Takao H, Miyati T, Matsuda H, Yamashita F, Iwatsubo T, Mori H, Kunimatsu A, Ino K, Yano K, Ohtomo K.	Longitudinal gray-matter volume change in the default-mode network: utility of volume standardized with global gray-matter volume for Alzheimer's disease: a preliminary study.	Radiol Phys Technol 8(1),64 - 72,2015	軽度認知障害からアルツハイマー病に移行した患者群におけるDefault Mode Networkにおける体積変化を検討した。7人の健常者と7人のアルツハイマー病に移行した軽度認知障害患者のT1強調画像のデータをADNIから得た。SPM5にてアトラスに基づいて測定した。外側側頭葉皮質と楔前部の体積変化が移行軽度認知障害患者で健常者に比べて大きかった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
144	Ninomiya Y., Miyamoto S, Tenjin T, Ogino S, Miyake N, Kaneda Y, Sumiyoshi T, Yamaguchi N	Long-term efficacy and safety of blonanserin in patients with first-episode schizophrenia; A 1-year open-label trial.	Psychiatry and Clinical Neurosciences 68(12),841 - 849,2014	第二世代抗精神病薬ブロナセリン1年間投与の効果と、未服薬の初発統合失調症患者23名を対象に検討した。結果として、主観的な生活の質、認知機能、精神病症状において有意な改善効果が認められた。
145	Echigoya Y, Aoki Y, Miskew B, Panesar D, Touznic A, Nagata T, Tanihata J, Nakamura A, Nagaraju K, Yokota T	Long-term efficacy of systemic multiexon skipping targeting dystrophin exons 45-55 with a cocktail of vivo-morpholinos in mdx52 mice.	Mol Ther Nucleic Acids. 4,e225 - ,2015	エクソスキップ治療はデュシェンヌ型筋ジストロフィーに対する治療法として最も実現化が近いとされている。この中でもジストロフィンエクソン45-55は変異集積領域として知られておりこの領域をすべて読み飛ばせることができれば治療対象の拡大が見込まれる。我々はこの領域をアンチセンス核酸を用いてスキップさせることで短縮型ジストロフィンが産生され機能も回復することを明らかにしてきた。一方で、長期間の投与における有効性や安全性に関する知見は明らかとなっていない。本研究ではこの点を明らかにするため長期間アンチセンス核酸の投与を行った結果、短縮型ジストロフィンの発現が認められ、筋病理所見・筋機能が改善した。また、免疫応答や毒性も認められず、この領域を対象としたエクソスキップを行うコンセンサスを得ることができた。
146	Akamatsu T, Dai H, Mizuguchi M, Goto Y, Oka A, Itoh M.	LOX-1 Is a Novel Therapeutic Target in Neonatal Hypoxic-Ischemic Encephalopathy.	The American Journal of Pathology 184(6),1843-1852,2014	新生児低酸素性虚血性脳症の病態にLOX-1が関与し、これを抑えることで治療効果が得られることを明らかにした。
147	Yamada M, Tsukagoshi M, Hashimoto T, Oka J, Saitoh A, Yamada M	Lysophosphatidic acid induces anxiety-like behavior via its receptors in mice.	J Neural Transm. 2015 Mar;122(3):487-494,2015.	リゾホスファチジン酸(LPA)は、末梢において多彩な生物活性を有する脂質メディエーターである。これまでに我々は、SSRIであるセルトラリンの長期投与後にLPAシグナル伝達系分子群の発現が変化することを見出し、本シグナル伝達系が抑うつ/不安に関連すると仮説した。本研究では、LPAをマウスの脳室内に投与し情動行動変化を検討した。その結果、LPAは運動量に影響することなく、LPA受容体を介して不安様行動を惹起することが明らかとなった。以上より、LPAは末梢においてのみならず、中枢神経系においても生理活性を有しており、マウスの情動行動に影響することが示唆された。
148	Kawai N, Yasue M, Banno T, Ichinohe N.	Marmoset monkeys evaluate third-party reciprocity.	Biol Lett 10(5),20140058 - ,2014	マーモセットが、ヒトの行動を判断する事を示し、彼らの高い社会性知性を示し、社会行動の疾患モデルとして、使用に耐える事をしめた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
149	Goto A, Rudd RE, Bromet EJ, Suzuki Y, Yoshida K, Suzuki Y, Halstead DD, Reich MR	Maternal confidence of Fukushima mothers before and after the nuclear power plant disaster in Northeast Japan: Analyses of municipal health records.	Journal of Communication in Healthcare. 7(2),106 - 116,2014	放射線災害後、小さな子どもをもつ母親の不安が高まることが先行研究では報告されている。本研究では、東日本大震災後の原発事故の母親の育児への自信の影響を検討するために、震災前後の18か月健診時のデータを用いて震災前後の傾向と関連要因を調べた。2011年における育児への自信の得点は、2010年、2012年に比べて低かった。2011年の育児への自信のなさとの関連要因は、家族内の人間関係、そして2012年の抑うつ状態であった。
150	Suzuki Y, Fukasawa M, Obara A, Kim Y	Mental Health Distress and Related Factors Among Prefectural Public Servants Seven Months After the Great East Japan Earthquake.	J Epidemiol 24(4),287 - 294,2014	東日本大震災から7か月後に宮城県は行政職員の精神健康状態のアセスメントを行い、そのデータの二次解析を行った。震災から7か月後に精神健康不良が疑われるもの(K6 \geq 10)は、週1日程度の休暇をとれないことが関連していた。特に職場内コミュニケーションが良くないものでは、震災初期に住民の苦情対応にあたっていたこと、家族の喪失を経験したこと、長期間避難所生活をしてきたことが精神健康不良のリスクを高めていた。
151	Ishii D, Matsuzawa D, Matsuda S, Tomizawa H, Sutoh C, Shimizu E.	Methyl Donor-Deficient Diet during Development Can Affect Fear and Anxiety in Adulthood in C57BL/6J Mice.	PLoS One 9(8),e105750 - ,2014	本論文は、思春期におけるメチルドナー欠乏食が成体期の恐怖や不安といった情動を強めること、海馬内NMDA受容体及びGABA受容体の発現変動を生じさせることを明らかにし、思春期の栄養素の偏りがその後の情動及び脳内受容体に影響を及ぼすことを示したものである。
152	Tomizawa H, Matsuzawa D, Ishii D, Matsuda S, Kawai K, Mashimo Y, Sutoh C, Shimizu E	Methyl-donor deficiency in adolescence affects memory and epigenetic status in the mouse hippocampus	Genes Brain Behav.,2015	本論文は、思春期におけるメチルドナー欠乏食が成体期の海馬依存性の学習を障害すること、海馬内Gria1 mRNAの発現を低下させること、また、その受容体のプロモーター領域のメチル化を増加させることを明らかにし、思春期の栄養素の偏りがその後の学習及び脳内受容体に影響を及ぼすことを示したものである。
153	Yoon HS, Adachi N, Kunugi H	Microinjection of cocaine- and amphetamine-regulated transcript 55-102 peptide into the nucleus accumbens could modulate anxiety-related behavior in rats.	Neuropeptides ,2014	側坐核内に豊富に発現しているCocaine- and amphetamine-regulated transcript (CART) ペプチドが、不安行動の調節に関与しているかどうかを調べるため、両側の側坐核にCARTペプチドを局所投与し、行動を観察した。その結果、高架式十字架迷路では変化が見られなかったが、オープンフィールドや明暗箱試験では抗不安行動がCARTの容量依存的に見られ、側坐核内におけるCARTペプチドの抗不安効果を示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
154	Fujishima M, Maikusa N, Nakamura, Nakatsuka N, Matsuda H, Meguro K	Mild cognitive impairment, poor episodic memory, and late-life depression are associated with cerebral cortical thinning and increased white matter hyperintensities	Frontiers in Aging Neuroscience 6,306 1 – 306 12,2014	136人の健常高齢者と186人の健忘型のCDR 0.5の軽度認知障害患者において大脳皮質厚と大脳白質病変の多寡が記憶力障害やうつ症状とどのように関連するかを検討した。軽度認知障害患者は、側頭葉と下頭頂葉皮質厚が健常者に比べて低下し、大脳白質病変は放線冠と半卵円中心で増加していた。エピソード記憶障害は左嗅内皮質厚と関連し、うつ症状は内側側頭葉皮質厚および大脳白質病変の多寡と関連していた。また、大脳白質病変が多くなると前頭葉、側頭葉、頭頂葉の皮質厚が低下していた。
155	Higuchi Yuko, Seo Tomonori, Miyanishi Tomoniro, Kawasaki Yusuhiro, Suzuki Michio, Sumiyoshi Tomiki	Mismatch negativity and p3a/reorienting complex in subjects with schizophrenia or at-risk mental state	Front Behav Neurosci 8,172 – 172,2014	統合失調症(急性期、慢性期)患者、ハイリスク者 (At-risk mental state, ARMS)、健常者を対象として、ミスマッチ陰性電位(MMN), reorienting negativity (RON)などの事象関連電位を測定した。結果として、後に統合失調症に移行するハイリスク者(発症者)におけるMMN, RON振幅は発症前にすでに統合失調症患者と同程度に低下しており、非発症者よりも低下していた。以上より、これら事象関連電位は統合失調症の神経生理学的マーカー、および発症予測の指標となりうることが示唆された。
156	Späti J, Aritake S, Meyer AH, Kitamura S, Hida A, Higuchi S, Moriguchi Y, Mishima K	Modeling circadian and sleep-homeostatic effects on short-term interval timing	Front Integr Neurosci 9,2015	本研究では、18名の若年成人男性を対象として、28時間の睡眠覚醒スケジュールの前後に配置した2回に渡る38.67時間の持続覚醒期間中に時間長の見積もりと時間長生成課題を用いて時間認知パフォーマンスを評価した。その結果、直線的な増加と減少に加え、指数関数的変化の組み合わせによる対立する振動性の時間経過がみられ、生物時計発振機構によるペースメーカーの発振制御と覚醒継続時間の延長が短時間の時間認知機能を決定しているという仮説を支持している。
157	Yamada D, Takeo J, Koppensteiner P, Wada K, Sekiguchi M	Modulation of Fear Memory by Dietary Polyunsaturated Fatty Acids via Cannabinoid Receptors	Neuropsychopharmacology 39 (8),1852 – 1860,2014	恐怖嫌悪記憶は情動記憶の一種であり、不安症等との関連が指摘されている。本論文ではマウスをオメガ-3系とオメガ-6系不飽和脂肪酸の比が異なる餌で飼育すると恐怖嫌悪記憶の程度が変化することを見いだした。この変化はシナプス伝達を制御するカンナビノイド系への影響を介して起こるというメカニズムも明らかにした。摂食による情動記憶変化の生物学的メカニズムのひとつを提示する研究である。
158	Ishikawa T, Tomatsu S, Tsunoda Y, Hoffman DS, Kakei S.	Mossy fibers in the cerebellar hemisphere show delay activity in a delayed response task	Neuroscience Research 87,84 – 89,2014	小脳への入力経路の一つである苔状線維が、未来の運動を準備する段階で、運動方向特異的な活動をしていることを報告した。
159	Katsuki F, Takeuchi H, Watanabe N, Shiraishi N, Maeda T, Kubota Y, Suzuki M, Yamada A, Akechi T.	Multifamily psychoeducation for improvement of mental health among relatives of patients with major depressive disorder lasting more than one year: study protocol for a randomized controlled trial	Trials 15(1),320 – 320,2014	うつ病は患者のみならず、その家族にも大きな影響を与える。家族心理教育は患者治療にも有効とされているが、家族への影響を見た先行研究はない。そのため、本研究では無作為割り付け対照試験で家族心理教育の、患者のみならず家族の精神的健康への影響を確かめる。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
160	Ohnuki Y, Takahashi K, Iijima E, Takahashi W, Suzuki S, Ozaki Y, Kitao R, Mihara M, Ishihara T, Nakamura M, Sawano Y, Goto Y, Izumi S, Kulski J-K, Shiina T, Takizawa S	Multiple deletions in mitochondrial DNA in a patient with progressive external ophthalmoplegia, leukoencephalopathy and hypogonadism.	Inter Med 53: 1365-1369, 2014	慢性進行性外眼筋麻痺、筋力低下、難聴、白質脳症、性腺機能低下症をもつ31歳女性の骨格筋で、ミトコンドリアDNAを解析し、多発性の欠失を同定した。
161	Ojima K, Ono Y, Hata S, Noguchi S, Nishino I, Sorimachi H	Muscle-specific calpain-3 is phosphorylated in its unique insertion region for enrichment in a myofibril fraction	GENES TO CELLS 19(11),830 - 841,2014	肢帯型筋ジストロフィー2A型の原因タンパク質であるカルパイン3がリン酸化されていることを見いだした。このリン酸化によりカルパイン3の自己分解活性が若干抑えられること、リン酸化されたカルパイン3は主に筋原線維に含まれることがわかった。ミスセンス変異をもつ肢帯型筋ジストロフィー2A患者筋のカルパイン3では、リン酸化が低下していた。このことから、カルパイン3のリン酸化は病態に関与することが考えられた。
162	Cho A, Hayashi YK, Monma K, Oya Y, Noguchi S, Nonaka I, Nishino I	Mutation profile of the GNE gene in Japanese patients with distal myopathy with rimmed vacuoles (GNE myopathy)	JOURNAL OF NEUROLOGY NEUROSURGERY AND PSYCHIATRY 85(8),914 - 917,2014	212人の日本人GNEミオパチー患者の変異を同定した。患者の臨床症状を元に、表現型を遺伝子型の関連を調べた。63の異なる変異が見つかり、うち25が新たに見いだされた変異だった。c.1714G>C変異が最も多くあり、総変異アレルの48.3%を占めていた。この変異のホモ接合体が最も重い症状を示した。一方、二番目に多いc.527A>T変異は全体の22.4%を占めるが、患者の症状は軽度であり、特にホモ接合体は3名の患者のみしか見いだされていない。このことから、この変異のホモ接合体では症状を示さない例も存在する可能性を示唆していた。
163	Nakanishi Miharuru, Yamauchi Takashi, Takeshima Tadashi	National strategy for suicide prevention in Japan: Impact of a national fund on progress of developing systems for suicide prevention and implementing initiatives among local authorities.	Psychiatry and clinical neurosciences 69(1),55 - 64,2015	本研究は、地域の自殺対策の推進体制ならびに大綱における重点項目の実施度の観点から、地域自殺対策緊急強化基金の効果を評価することを目的として実施された。分析の結果、基金により普及啓発のみを行った地域と、自殺対策を全く行わなかった地域では、自殺対策ネットワークの形成や行動計画策定の程度に差がみられなかった。本研究の結果は、基金は地域における自殺対策の推進に寄与したものの、自殺予防キャンペーンの実施だけでは地域の自殺対策は進展しないことを示唆するものであった。
164	Mori-Yoshimura M, Hayashi YK, Yonemoto N, Nakamura H, Murata M, Takeda S, Nishino I, Kimura E.	Nationwide patient registry for GNE myopathy in Japan.	Orphanet J Rare Dis. 11(9),150 - ,2014	GNEミオパチー患者は国内に300人程度の希少疾病である。GNEミオパチー登録事業を世界で初めて開始した。121人が登録し、発症年齢は27.7±9.6歳、18%が独歩可能、2名が人工呼吸器を使用していた。治験候補者募集をアナウンスした。GNEミオパチー患者登録は治験促進ツールとして有効である。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
165	Itoh M, Iwasaki Y, Ohno K, Inoue T, Hayashi M, Ito S, Matsuzaka T, Ide S, Arima M.	Nationwide survey of Arima syndrome: new diagnostic criteria from epidemiological analysis.	Brain Dev 36:388-393,2014	先天性奇形症候群の一つである有馬症候群は本邦で確立した疾患であるが、患者数が少なく、診断が困難である。そこで、全国的な疫学調査を行い、患者数と分布などを調べ、診断基準を確立した。
166	Uehara T., Sumiyoshi T., Rujescu D., Genius J., Matsuoka T., Takasaki I., Itoh H., Kurachi M.	Neonatal exposure to MK-801 reduces mRNA expression of mGlu3 receptors in the medial prefrontal cortex of adolescent rats.	Synapse 68(5),202 - 208,2014	幼若期にMK-801(グルタミン酸(Glu)-NMDA受容体拮抗薬)を一過性に投与したラット(統合失調症モデル)を対象に、成長後(思春期)における脳内Glu受容体に対する効果を検討した。結果として、代謝型Glu受容体の一部の亜系(mGluR3)をコードする遺伝子の減少が、同モデルラットの前頭前皮質において認められた。
167	Kasahara Kazumi, DaSalla Charles Sayo, Honda Manabu, Hanakawa Takashi	Neuroanatomical correlates of brain-computer interface performance.	NeuroImage 110,95 - 100,2015	脳波を用いたBMIの操作成績は個人で大きく異なり、リハビリテーション応用のためにはBMI操作能力の個人差を理解しつつ技術を洗練させていく必要がある。今回、MRIで測定できる大脳皮質運動野の量がBMI操作成績の個人差と相関することを始めて示した。本研究は脳波BMI操作の神経メカニズムの理解に貢献するばかりでなく、今後個人差を考慮に入れたBMI設計に資するバイオマーカーとして大脳皮質運動野量を活用できる可能性を示すものである。
168	Arimura S, Okada T, Tezuka T, Chiyo T, Kasahara Y, Yoshimura T, Motomura M, Yoshida N, Beeson D, Takeda S, Yamanashi Y	Neuromuscular disease. DOK7 gene therapy benefits mouse models of diseases characterized by defects in the neuromuscular junction.	Science. 345(6203),1505 - 1508,2014	神経筋接合部 (NMJ) の形成不全を伴う筋無力症などの筋疾患を発症したマウスにおいて、NMJ形成に必須のDok-7を発現するAAVベクターを投与することによりNMJの後天的拡張、運動機能の改善および延命を示した。このNMJの形成増強法は、多様な神経筋疾患への新たな治療法として期待される。
169	Kanie A, Hagiya K, Ashida S, Pu S, Kaneko K, Mogami T, Oshima S, Motoya M, Niwa SI, Inagaki A, Ikebuchi E, Kikuchi A, Yamasaki S, Iwata K, Roberts DL, Nakagome K.	New instrument for measuring multiple domains of social cognition: Construct validity of the Social Cognition Screening Questionnaire (Japanese version).	Psychiatry Clin Neurosci. 68(9),701 - 711,2014	米国のRobertsらが開発した統合失調症患者に対する社会認知評価尺度(SCSQ)の日本語版を作成し、その構造妥当性と内的整合性について検証した。まず、統合失調症患者と健常者との判別精度について検討したところ、ROC曲線のAUCが0.84と十分な値を示した。さらに4つのサブスケールに関するCronbachの α は0.72と許容範囲内であった。また、基準関連妥当性に関しては、心の理論、メタ認知、敵意バイアスについて、それぞれ関連する評価尺度と有意な相関を示し、生態学的妥当性に関しては、心の理論サブスケールについて社会機能との関連性が示された。SCSQ日本語版は、統合失調症の社会認知評価尺度としての妥当性が示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
170	Miyagawa T, Toyoda H, Hirataka A, Kanbayashi T, Imanishi A, Sagawa Y, Kotorii N, Kotorii T, Hashizume Y, Ogi K, Hiejima H, Kamei Y, Hida A, Miyamoto M, Imai M, Fujimura Y, Tamura Y, Ikegami A, Wada Y, Moriya S, Furuya H, Kato M, Omata N, Kojima H, Kashiwase K, Saji H, Khor SS, Yamasaki M, Ishigooka J, Kuroda K, Kume K, Chiba S, Yamada N, Okawa M, Hirata K, Uchimura N, Shimizu T, Inoue Y, Honda Y, Mishima K, Honda M, Tokunaga K	New susceptibility variants to narcolepsy identified in HLA class II region	Hum Mol Genet 24(3),891 – 898,2015	ナルコレプシーはHLA-DQB1*06:02と強く関連することが知られている。しかし、遺伝子型DQB1*06:02は一般集団においても10–30%の頻度で認められることから、他の遺伝要因の関与が示唆されている。そこで、日本人ナルコレプシー患者664例および日本人コントロール3131例においてHLA-DQB1のタイピングを行った。その結果、ナルコレプシーに対してDQB1*06:01は抵抗性を、DQB1*03:02は感受性を示した。また、HLA-DPB1に位置するrs3117242やDPB1*05:01もナルコレプシーと関連することが明らかとなった。これらの結果から、HLAクラスII遺伝子の組み合わせがナルコレプシー発症の素因となっている可能性が考察される。
171	Fujii Hideaki, Hayashida Kohei, Saitoh Akiyoshi, Yokoyama Akinobu, Hirayama Shigeto, Iwai Takashi, Nakata Eriko, Nemoto Toru, Sudo Yuka, Uezono Yasuhito, Yamada Mitsuhiko, Nagase Hiroshi	Novel delta opioid receptor agonists with oxazatricyclodecane structure.	ACS medicinal chemistry letters 5 (4),368 – 372,2014	新規に合成されたオキサザトリサイクロデカン骨格誘導体化合物は、ピオイドδ受容体に対して選択的な作動活性を示した。また、全身投与によりナルトリンドール拮抗性の鎮痛効果をマウス酢酸ライジング試験で示し、痙攣作用も認められなかった。本化合物は、新規オピオイド受容体作動薬のリード化合物となることが期待される。
172	Ogawa K, Tateno A, Arakawa R, Sakayori T, Ikeda Y, Suzuki H, Okubo Y	Occupancy of serotonin transporter by tramadol: a positron emission tomography study with [11C]DASB.	Int J Neuropsychopharmacol 17 (6),845 – 850,2014	PETおよび[11C]DASBを用いてトラマドールのセロニントランスポーター占有率を測定し、50mgで34.7%、100mgで50.2%であった。このことから、鎮痛効果にセロニンが関与すること、トラマドールが抗うつ効果を示す可能性が示唆された。
173	Ichinohe Noritaka	On-going elucidation of mechanisms of primate specific synaptic spine development using the common marmoset (Callithrix jacchus).	Neuroscience research ,2014	霊長類の大脳皮質では、生後一過性にシナプスが過剰に形成され、その後減少する。この発達過程の異常は、様々な精神疾患の原因となる。マーモセットの視覚関連領野と内側前頭前皮質領野のニューロンの樹状突起の発達過程とその分子基盤を調査し、視覚関連領野では生後90日齢でスパイン数が最大になること、前頭連合野のニューロンは一次視覚野と比較すると多数のスパインをもっていることを明らかにした。また、内側前頭前皮質の辺縁系領野では、スパイン刈り込みの規模が小さいことがわかった。これらスパイン刈り込みを制御する候補分子を探索し、軸索誘導因子、ミクログリア関連遺伝子などを見出した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
174	Saitoh Y, Fujikake N, Okamoto Y, Popiel HA, Hatanaka Y, Ueyama M, Suzuki M, Gaumer S, Murata M, Wada K, Nagai Y	p62 plays a protective role in the autophagic clearance of polyglutamine aggregates in polyglutamine disease model flies	J Biol Chem 290(3),1442 - 1453,2014	アルツハイマー病、ポリグルタミン(PolyQ)病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)などの多くの神経変性疾患において、異常蛋白質のオリゴマー・凝集体が重要な役割を果たすと考えられている。オートファジー・リソソーム分解系は、このような異常蛋白質のオリゴマー・凝集体を分解できる可能性があり、神経変性疾患全般に共通する治療戦略の1つと考えられる。p62はユビキチン化蛋白質を選択的にオートファジー分解に誘導するアダプター分子であるが、神経変性疾患の病態においてp62が生体内でどのように機能しているかは不明な点が多い。本研究では、ショウジョウバエモデルを用いて神経変性疾患病態におけるp62の役割を検討した。PolyQ病モデルショウジョウバエMJD-Q78 flyにおいて、p62 dsRNA発現により機能喪失させたと、複眼変性は増悪し、細胞質内のMJD蛋白質凝集体が増加した。オートファジー分解関連分子の機能喪失でも同様に複眼変性増悪、細胞質内MJD蛋白質凝集体の増加を認め、さらにp62とオートファジー分解系の両者の機能喪失では、相加的な増悪効果は認めなかったことから、p62はオートファジー分解系を介して機能すると考えられた。生化学的解析から、p62の機能喪失によりMJD蛋白質オリゴマーの著明な蓄積を認めた。さらにTDP-43を発現するALSモデルショウジョウバエにおいても、やはりp62の機能喪失による複眼変性の増悪を認めた。以上のことから、p62はオートファジー分解系を介して特にPolyQ蛋白質オリゴマーの分解除去に寄与して、神経変性に対して保護的に働いていると考えられた。
175	Goto A, Reich MR, Suzuki Y, Tsutomi H, Watanabe E, Yasumura S	Parenting in Fukushima City in the post-disaster period: short-term strategies and long-term perspectives.	Disasters. 38(Suppl 2),179 - 189,2014	放射線災害後、小さな子どもをもつ親に心理的影響が残ることが実証されている。東日本大震災前から築いてきた福島市における行政と公衆衛生研究者による協働が、東日本大震災後の母子保健活動にどのように展開されたかについて、短期的、長期的視点で記述した。本報告は、放射線災害後に、小さな子どもをもつ親の健康保持するための方策の改善に有用な情報をもたらすかもしれない。
176	Fujino H, Sumiyoshi C, Sumiyoshi T, Yasuda Y, Yamamori H, Ohi K, Fujimoto M, Umeda-Yano S, Higuchi A, Hibi Y, Matsuura Y, Hashimoto R, Takeda M, Imura O.	Performance on the Wechsler Adult Intelligence Scale-Third Edition in Japanese patients with schizophrenia.	Psychiatry and Clinical Neurosciences 68(7),534 - 541,2014	Wechsler Adult Intelligence Scale-III(WAIS-III)日本語版を統合失調症患者157名に施行し、健常者(264名)の成績と比較した。その結果、すべての下位検査得点が統合失調症患者で低下しており、特に処理速度を反映する検査において顕著であった。
177	Teraishi T, Hori H, Sasayama D, Matsuo J, Ogawa S, Ishida I, Nagashima A, Kinoshita Y, Ota M, Hattori K, Higuchi T, Kunugi H	Personality in remitted major depressive disorder with single and recurrent episodes assessed with the Temperament and Character Inventory.	Psychiatry Clin Neurosci 69,3 - 11,2015	大うつ病性障害の発症には、病前性格が関与することが知られているが、再発要因となるか否かについてはよくわかっていない。本研究では、寛解状態にある大うつ病性障害患者86名(単一エピソード群 29名、反復群 57名)、健常者 529名に対しクロニンジャーの気質性格検査(Temperament and Character Inventory)を施行した。先行研究と一致して、寛解状態にある大うつ病患者全体は健常者と比較して、有意に「損害回避」が高く、「自己志向」が低かった。次に単一エピソード群と反復エピソード群を比較したところ、損害回避とその下位項目である易疲労性、さらに家族歴が反復性の予測因子となった。強い損害回避と易疲労性は、再発リスクの予測因子となることが示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
178	Katanuma Y, Numakawa T, Adachi N, Yamamoto N, Ooshima Y, Odaka H, Inoue T, Kunugi H	Phencyclidine rapidly decreases neuronal mRNA of BDNF.	Synapse 68(6),257 - 265,2014	フェンサイクリジンによるBDNFmRNA転写阻害機構
179	Ogawa S, Fujii T, Koga N, Hori H, Teraishi T, Hattori K, Noda T, Higuchi T, Motohashi N, Kunugi H.	Plasma L-tryptophan concentration in major depressive disorder: new data and meta-analysis.	Journal of Clinical Psychiatry 75 (9),e906 - e915,2014	うつ病患者における血漿中トリプトファン値の低下が、自験例のデータおよび24報の先行研究を合わせたメタアナリシスによって強固なエビデンスとともに明らかとなった。
180	Irahara K, Saito Y, Sugai K, Nakagawa E, Saito T, Komaki H, Nakata Y, Sato N, Baba K, Yamamoto T, Chan WM, Andrews C, Engle EC, Sasaki M.	Pontine Malformation, Undecussated Pyramidal Tracts, and Regional Polymicrogyria: A New Syndrome.	Pediatr Neurol. 50(4),384 - 388,2014	錐体路の交叉を認めない橋奇形と後頭葉の多小脳回を呈した女児例を報告した。この奇形の組み合わせはこれまでに知られておらず、新しい症候群の可能性はある。
181	Soshi T, Ando K, Noda T, Nakazawa K, Tsumura H and Okada T	Post-error action control is neurobehavioral modulated under conditions of constant speeded response(2015).	Front. Hum. Neurosci. 8:1072,2015	性急性反応を引き起こす条件下で、反応抑制課題を行い、抑制エラー後の行動特性と脳活動を調べた。エラー直後においてエラー回復が起こらず、遅れて起こることが観察された。また、0.3秒以内の抑制脳活動が衝動性特性と相関し、衝動性評価が高いほど抑制脳活動が低下していた。このような行動・脳活動パターンの報告は、本研究が初めてである。
182	Sasaki T, Aoi H, Oga T, Fujita I, Ichinohe N.	Postnatal development of dendritic structure of layer III pyramidal neurons in the medial prefrontal cortex of marmoset.	Brain Struct Funct. 2014	精神疾患と関係の深い内側前頭前皮質の3領野(area9, area14r, area24)に特徴的なシナプス発達様式があるのか調査を試みた。どの領野でもスパイン密度・総数は生後60-90日齢で最大値に達し、その後減少することが分かった。内側前頭前皮質の錐体細胞は、視覚関連領野の細胞と比較すると生後発達期を通して多数のスパインを有していること、内側前頭前皮質の中でも辺縁系皮質(area14r, area24)はスパインの刈り込み規模が小さいことを見出した。この特徴は、area14r, area24の統合失調症・自閉症に対する分子脆弱性との関係を示唆していると考えられ、証明が待たれる。本研究成果は、日経産業新聞・科学新聞などのメディアで報道された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
183	Sakuma A, Takahashi Y, Ueda I, Sato H, Katsura M, Abe M, Nagao A, Suzuki Y, Kakizaki M, Tsuji I, Matsuoka H, Matsumoto K	Post-traumatic stress disorder and depression prevalence and associated risk factors among local disaster relief and reconstruction workers fourteen months after the Great East Japan Earthquake: a cross-sectional study.	BMC Psychiatry 2015, 15:58,2015.	東日本大震災後の支援者を対象に災害後14か月後に精神健康の調査を行った(N=1294)。PTSD、うつ病、心理的不調が疑われた割合は、自治体職員、病院職員、消防団員の順で高かった。休息がないことが自治体職員と病院職員のPTSDとうつ病のリスクを高めており、コミュニケーション不足が病院職員のPTSD、自治体職員のうつ病のリスクを高めていた。震災関連業務への従事が、自治体職員のPTSDとうつ病のリスクを高めていた。職場環境に関する要因は、災害要因と異なり修正可能なので、対策をとる必要がある。
184	Mimura Koki, Kishino Hirohisa, Karino Genta, Nitta Etsuko, Senoo Aya, Ikegami Kentaro, Kunikata Tetsuya, Yamanouchi Hideo, Nakamura Shun, Sato Kan, Koshiba Mamiko	Potential of a smartphone as a stress-free sensor of daily human behaviour.	Behavioural brain research Volume 276,181 - 189,2014	動物ケア作業者の行動をスマートフォン内臓型センサでモニタリングし、環境温湿度および心理スコアとの相関解析を行った。
185	Yoshiyo Oguchi, Atsuo Nakagawa, Mitsuhiro Sado, Dai Mitsuda, Yuko Nakagawa, Noriko Kato, Sayuri Takechi, Mitsunori Hiyama and Masaru Mimura.	Potential predictors of delay in initial treatment contact after the first onset of depression in Japan: a clinical sample study	International Journal of Mental Health Systems 2014	未治療期間の短縮は、うつ病の治療結果や予後に関連するというエビデンスが示されてきた。しかし、初発のうつ病患者における治療へのコンタクトの遅れに関連する要因については十分に理解されていない。そこで、この横断研究では、最初の治療コンタクトの遅れを予測する特徴を同定することを目的とした。日本の3つの医療機関を受診した95名のうつ病患者を対象として検討を加えた。その結果、未治療の平均期間は4か月間で、72.6%の患者が初発から1年以内に治療へのコンタクトをとっていた。多変量ロジスティック回帰分析の結果、婚姻状態(未婚)が未治療期間の長さに関連することが示された。
186	Suzuki C, Tsuji AB, Kato K, Kikuchi T, Sudo H, Okada M, Sugyo A, Zhang MR, Arano Y, Saga T	Preclinical characterization of 5 amino-4-oxo-[6- ¹¹ C]hexanoic acid as an imaging tracer probe to estimate protoporphyrin IX accumulation induced by exogenous aminolevulinic acid	J. Nucl. Med. 55(10),1671 - 1677,2014	体外から投与したアミノレブリン酸がプロトポルフィリンとして腫瘍に蓄積することを予測するPETプローブの開発

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
187	Pu S, Nakagome K, Yamada T, Yokoyama K, Matsumura H, Nagata I, Kaneko K.	Prefrontal activation predicts social functioning improvement after initial treatment in late-onset depression.	J Psychiatr Res. 62,62 – 70,2015	高齢発症のうつ病患者において、近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)を用いて、前頭前皮質での神経活動性が低下しており、社会機能との関連を示すことをすでに報告してきた。本研究では、ベースラインでの前頭前皮質における神経活動性が社会機能の改善の予測因子となることを明らかにした。すなわち、右腹外側前頭前皮質における神経活動性が低いほど、治療前後での社会機能の改善の程度が大きかった。
188	Aritake S, Kaneita Y, Ohtsu T, Uchiyama M, Mishima K, Akashiba T, Uchimura N, Nakaji S, Munezawa T, Ohida T	Prevalence of fatigue symptoms and correlations in the general adult population	Sleep and Biological Rhythms Article first published online,1 – 9,2014	本研究の目的は日本の不眠症患者のhealth-related quality of life (hrQOL)の実態を明らかにし、hrQOL 障害の関連因子を抽出することである。2012 Japan National Health and Wellness Surveyに参加した18以上の男女30,000人の中から、主観的不眠症状があり治療のため処方を受けている不眠症群と不眠症状のない良眠群の二群を抽出した。不眠症と関連する健康関連要因を多重回帰モデルで求めた。その結果、不眠症群(n=1,018; 3.4%)では良眠群(n=20,542)に比較して有意にhrQOL (Short Form-36 version 2 (SF-36v2))の悪化が認められた。また喫煙、運動不足、飲酒がhrQOL低下の予測因子であった。これら身体要因はないが不安、抑うつがある群、身体要因はあるがメンタルヘルスが良好な群、どちらの要因もない群の三群で比較すると、順にhrQOLは不良であった。本研究の結果から、不眠症患者ではhrQOL障害が大きな負担となっていること、hrQOL障害の関連因子として身体要因(喫煙、運動不足、飲酒)及びメンタルヘルス問題(不安、抑うつ)が関連することが明らかになった。これらの要因は一般的な睡眠衛生指導の項目にも取り入れられており、不眠症患者に対する生活指導の重要性が改めて確認された。
189	Kawashima Yoshitaka, Yonemoto Naohiro, Inagaki Masatoshi, Yamada Mitsuhiko	Prevalence of suicide attempters in emergency departments in Japan: A Systematic review and meta-analysis.	J Affect Disord 163,33 – 39,2014	日本では、救急医療機関(ED)受診者中の自殺未遂者の実態に関する包括的な情報が不足している。本研究では、日本のEDを受診した自殺未遂者に関する研究の系統的レビューとメタ解析を行い、EDにおける自殺未遂者の割合、自殺未遂者における精神疾患有病割合、自殺企図手段割合を示した。文献データベースとハンドサーチにより計3,338件の論文を抽出し、適格基準を満たした論文は計70件であった。メタ解析により自殺未遂者の割合(pooled prevalence)を算出した結果、全ED受診者中の自殺未遂者の割合は、4.7%であった。また、自殺未遂者中の精神疾患有病割合は、気分障害が最も高かった(ICD:30%、DSM:35%)。自殺企図手段割合は、薬物/毒物服用が最も多かった(52%)。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
190	Ota M, Ishikawa M, Sato N, Okazaki M, Maikusa N, Hori H, Hattori K, Teraishi T, Ito K, Kunugi H	Pseudo-continuous arterial spin labeling MRI study of schizophrenic patients.	Schizophr Res 154(1-3),113 - 118,2014	ASLという非侵襲的な脳血流画像、およびDTI,3D-MRIの同時撮像を統合失調症を対象に行い、健常者との比較を行った。その結果DTI,3D-MRIにて脳形態障害が確認された左下前頭前野において局所脳血流の低下が認められた。先行するSPECTやPET研究と同じ領域の障害が確認されており、ASLによる血流評価が侵襲的なSPECTやPET研究と同程度の精度で行うことができることが確認された。
191	Yabe H, Suzuki Y, Mashiko H, Nakayama Y, Hisata M, Niwa S, Yasumura S, Yamashita S, Kamiya K, Abe M	Psychological distress after the great East Japan earthquake and fukushima daiichi nuclear power plant accident: results of a mental health and lifestyle survey through the fukushima health management survey in fy2011 and fy2012.	Fukushima J Med Sci 【online】 60 (1),57 - 67,2014	東日本大震災後の原発事故の避難指定地域の住民を対象に健康管理調査を行った。2011年度調査、2012年度調査として、それぞれ震災から10か月後、22か月後に自記式調査を行った。多くの住民が家族離散を経験し、複数回の転居を経験していた。全般的な精神健康状態、トラウマ反応(PCL)子どもを対象とした情緒と行動の評価(SDQ)でいずれもカットオフ以上の割合は平常時に比較して多かった。いずれの結果からも、被災によって対象住民は心理的苦悩を感じており、継続的な調査とケアプログラムが必要である。
192	Inoue Y, Ito K, Kita Y, Inagaki M, Kaga M, Swanson JM	Psychometric properties of Japanese version of the Swanson, Nolan, and Pelham, version-IV Scale-Teacher Form: a study of school children in community samples	Brain Dev 36(8),700 - 706,2014	ADHD評価尺度として反抗挑戦性障害の症状を同時に評価できるSNAP-IV(教師版)を作成者であるSwanson博士の許諾の元日本語訳し、信頼性と妥当性の検討を行った。同評価尺度を用いて1296名の小中学生について教師による評価を行った。その結果、同評価尺度が①不注意・②多動衝動性・③反抗挑戦性障害の3因子構造を有していることが示された。Test-Retest Reliabilityや他の子どもの行動評価スケール(SDQ)との外的妥当性も確認された。本評価尺度はADHD症状を評価する臨床的ツールとして有用である可能性が示された。
193	Fujii K, Ozeki Y, Okayasu H, Takano Y, Shinozaki T, Hori H, Orui M, Horie M, Kunugi H, Shimoda K	QT is longer in drug-free patients with schizophrenia compared with age-matched healthy subjects	PLoS One 9(6) : e98555,2014	統合失調症では、向精神薬の非服薬患者においても心電図におけるQT間隔が延長していることを見出した。
194	Yamauchi M, Imabayashi E, Matsuda H, Nakagawara J, Takahashi M, Shimosegawa E, Hatazawa J, Suzuki M, Iwanaga H, Fukuda K, Iihara K, Iida H	Quantitative assessment of rest and acetazolamide CBF using quantitative SPECT reconstruction and sequential administration of 123I-iodoamphetamine: comparison among data acquired at three institutions.	Ann Nucl Med 28(9),836 - 850,2014	安静時とダイアモックス負荷時の脳血流SPECTの123I-IMP dual table ARG法のQSPECT法による正常データベースを構築し、さらに施設間での信頼性を32例の健常ボランティアで検討した。一施設でのダイアモックス負荷時の広大脳動脈領域を除き、各施設で得られた脳血流量に有意の差異はみられなかった。今回の検討で、本法の正常値データベースを構築することができ、各施設で利用できるようになった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
195	Ishitobi M, Kawatani M, Asano M, Kosaka H, Goto T, Hiratani M, Wada Y.	Quetiapine responsive catatonia in an autistic patient with comorbid bipolar disorder and idiopathic basal ganglia calcification	Brain and Development 36,823 – 825,2014	自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder: ASD) では、主に思春期青年期に、言動の緩慢化・受動性の増加・自発性の低下などのカタトニアを呈する場合がある。一方、ASDでは気分障害の合併率が高いことが報告されており、ASDにおいてカタトニアを引き起こす要因のひとつと考えられている。今回、双極性障害のうつ病相に伴い出現したと考えられるジストニアを主症状とするカタトニアに対し、クエチアピンが奏功した自閉性障害の1例を経験したので、若干の考察を加えて報告した。
196	Asano Mizuki, Ishitobi Makoto, Kosaka Hirotsuka, Hiratani Michio, Wada Yuji	Ramelteon monotherapy for insomnia and impulsive behavior in high-functioning autistic disorder.	Journal of clinical psychopharmacology 34(3),402 – 403,2014	自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder: ASD) 児では、定型発達児よりも睡眠障害の合併頻度が高く、特に入眠や睡眠維持の障害が起こりやすい。睡眠障害の併発によりASD児における社会性の障害、情緒の問題、不注意および多動などを悪化させることが報告されており、ASD児の睡眠障害の治療は日中の行動の改善にも寄与すると考えられる。今回、様々な薬物治療が無効であった高機能自閉症児において、ラメルテオン単剤治療が睡眠障害のみならず衝動性にも奏功した1例を経験したので、若干の考察を加えて報告した。
197	Ogawa S, Hattori K, Sasayama D, Yokota Y, Matsumura R, Matsuo J, Ota M, Hori H, Teraishi T, Yoshida S, Noda T, Ohashi Y, Sato H, Higuchi T, Motohashi N, Kunugi H	Reduced cerebrospinal fluid ethanolamine concentration in major depressive disorder.	Sci Rep 5,7796 – ,2015	大うつ病性障害の診断や類型化に用いられる生化学的マーカーは今のところなく、いまだに問診によって行われている。我々はうつ病のバイオマーカーを探索するために、脳脊髄液中のアミノ酸およびその関連分子に着目して解析した。その結果、エタノールアミンの濃度はうつ病患者群で有意な減少を示し、約40%のうつ病患者が健常者群の下位5パーセントイル値を基準とした値よりも低値を示した。患者群においてエタノールアミン低値群は高値群と比べて重症度が高かった。また、エタノールアミン濃度はドパミン代謝物質であるホモバニリン酸やセロトニンの代謝物質である5-ヒドロキシインドール酢酸と有意な正の相関を示した。これらはうつ病の類型化マーカーあるいは状態依存的マーカーとなりうる可能性が示唆された。
198	Okajima I, Nakajima S, Ochi M, Inoue Y.	Reducing Dysfunctional Beliefs about Sleep Does Not Significantly Improve Insomnia in Cognitive Behavioral Therapy	PLoS ONE 9(7)(e102565),2014	本研究の目的は、不眠症に対する認知行動療法による不眠の改善に非機能的認知は改善するかを明らかにすることであった。64名の慢性不眠症患者に対し、1回50分合計6セッションからなる認知行動療法を実施した。患者は治療の前後で質問紙によって不眠症状及び非機能的認知が測定された。その結果、認知行動療法は不眠症状及び睡眠に関する非機能的認知の改善に有効であった一方で、非機能的認知は不眠の改善を媒介する要因ではない可能性が示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
199	Teraishi T, Hori H, Sasayama D, Matsuo J, Ogawa S, Ishida I, Nagashima A, Kinoshita Y, Ota M, Hattori K, Kunugi H.	Relationship between Lifetime Suicide Attempts and Schizotypal Traits in Patients with Schizophrenia.	PLoS One 9(9),e107739 - ,2014	統合失調症患者は自殺率が高く、様々な危険因子が研究されているが、パーソナリティとの関連を調べた研究は少ない。今回、87名の統合失調症患者(平均年齢38.1 ± 10.6)と322名の健常者(40.8 ± 13.9)を対象にSchizotypal Personality Questionnaire (SPQ)を実施した。全てのSPQ評価尺度(合計得点、及び「認知/知覚」「対人」「解体」の3因子)について、統合失調症患者群は、健常群よりも高値であった(性、年齢を調整した共分散分析により $p < 0.001$)。自殺企図既往の有無により、統合失調症を二群[既往あり(SA)、既往なし(nSA)]に分けて解析したところ、合計得点及び「対人」と「解体」の2因子について、有意な差を認めた(全ての比較において、 $nSA < SA$, $p < 0.01$)。ROC解析により、合計得点を使ってSAとnSAの2群を区別するための最適のカットオフ値は33.5となり、そのときのオッズ比は4.7となった[$\chi^2(1) = 10.6$, $p = 0.002$, オッズ比: 4.7, 95%信頼区間: 1.8-12.1, 感度: 0.70, 特異度: 0.67]。以上より、SPQによる統合失調型パーソナリティ傾向は、統合失調症における自殺企図の既往と関連しており、したがってSPQの合計得点は、自殺企図のリスク評価のために利用できるかもしれない。
200	Shiraishi N, Nishida A, Shimodera S, Sasaki T, Oshima N, Watanabe N, Akechi T, Furukawa TA, Okazaki Y.	Relationship between Violent Behavior and Repeated Weight-Loss Dieting among Female Adolescents in Japan	PLoS One 9(9),e107744 - e107744,2014	女子中高生において自身のBMIや体重に関する認識が、対人・対物暴力につながるかどうかを探索した。結果として、ダイエット回数、低体重、体重に関する歪んだ認識がこれら暴力行動に通ずることを明らかとした。
201	Ishikawa T, Tomatsu S, Tsunoda Y, Lee J, Hoffman DS, Kakei S.	Releasing dentate nucleus cells from Purkinje cell inhibition generates output from the cerebrocerebellum.	PLoS One 9(20),e108774 - ,2014	小脳プルキンエ細胞の活動と歯状核の活動が逆相関にあることから、小脳プルキンエ細胞による歯状核の脱抑制が運動制御に重要であることを示した。
202	Saito T, Kondo K, Iwayama Y, Shimasaki A, Aleksic B, Yamada K, Toyota T, Hattori E, Esaki K, Ujike H, Inada T, Kunugi H, Kato T, Yoshikawa T, Ozaki N, Ikeda M, Iwata N	Replication and cross-phenotype study based upon schizophrenia GWASs data in the Japanese population: support for association of MHC region with psychosis	Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet165B(5):421-427, 2014	過去の海外での全ゲノム解析のデータの再現性について日本人サンプルを用いて検討したところ(他施設研究)、組織適合性抗原領域の遺伝子多型と精神病との間に関連があることが確認された。
203	Ohashi M, Saitoh A, Yamada M, Oka J, Yamada M	Riluzole in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuates veratrine-induced anxiety-like behaviors in mice.	Psychopharmacology. 2015 Jan;232(2):391-398.2015	電位依存性ナトリウムチャンネル活性化薬ベラトリンを内側前頭前野上辺縁皮質領域に処置することで誘発された不安惹起作用は、リルゾールの併用処置により改善し、同時に認められるベラトリン誘発グルタミン酸放出増加作用も完全に抑制された。従って、リルゾールの情動調節作用機序の一部に内側前頭前野上辺縁皮質領域におけるグルタミン酸神経伝達の調節が関与していることが示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
204	Mizuno Y, Nomoto M, Hasegawa K, Hattori N, Kondo T, Murata M, Takeuchi M, Takahashi M, Tomida T; on behalf of the Rotigotine Trial Group.	Rotigotine vs ropinirole in advanced stage Parkinson's disease: A double-blind study.	Parkinsonism Relat Disord. 20 (12), 1388 - 1393, 2014	進行期パーキンソン病患者を対象とした、ドパミン受容体刺激薬であるロチゴチン、ロピニロールとプラセボの3群比較試験。UPDRSIIIでロチゴチンはプラセボより有意に改善し、またロピニロールに対し非劣性を証明した。貼布部位反応はロチゴチン実薬群で有意に多かった。
205	Hida A, Kitamura S, Katayose Y, Kato M, Ono H, Kadotani H, Uchiyama M, Ebisawa T, Inoue Y, Kamei Y, Okawa M, Takahashi K, Mishima K	Screening of Clock Gene Polymorphisms Demonstrates Association of a PER3 Polymorphism with Morningness-Eveningness Preference and Circadian Rhythm Sleep Disorder	Sci Rep 4, 6309 - , 2014	概日時計は、睡眠・覚醒、体温、ホルモン分泌など行動や生理活動に見られる約24時間周期の生体リズムを制御し、朝型夜型(クロノタイプ)や睡眠習慣の決定にも影響を及ぼすと考えられている。事実、いくつかの時計遺伝子多型はクロノタイプや睡眠障害と関係している。本研究では、睡眠相後退型182名、フリーラン型67名、健常者925名から得たDNAサンプルを用いて時計遺伝子PER1、PER2、PER3、TIM、CLOCK、NPAS2、CRY2の多型タイピングを行った。その結果、PER3多型(rs228697)マイナーアリルが夜型およびフリーラン型と有意に関連することが明らかとなった。時計遺伝子PER3は個人の概日・睡眠特性を推定する有用な遺伝マーカーとなることが期待される。
206	Ikeda H, Kubo T, Kuriyama K, Takahashi M	Self-awakening improves alertness in the morning and during the day after partial sleep deprivation.	J Sleep Res 23 (6), 673 - 680, 2014	自己覚醒(目覚し時計などの外的手段を使わず、自発的に覚醒すること)が睡眠短縮時の睡眠慣性と日中の覚醒度に及ぼす影響を検討した。その結果、自己覚醒条件の朝と日中の覚醒度が強制覚醒条件より高かった。これは、睡眠短縮時の覚醒度の低下を自己覚醒で低減できることを示している。
207	Ando S, Yasugi D, Matsumoto T, Kanata S, Kasai K	Serious outcomes associated with overdose of medicines containing barbiturates for treatment of insomnia	Psychiatry Clin Neurosciences 68, 721 - 721, 2014	2008~2009年に多摩総合医療センター救命救急センターに精神科治療薬の過量服薬によって搬送され、入院となった患者190名を対象にして、服用した精神科治療薬と入院後の転帰の関連を検討した。その結果、barbiturate系成分を含有する合剤「ベゲタミン」を服用した者は、誤嚥性肺炎になるリスクと自殺既遂によって死亡するリスクが著しく高かった。
208	Sumiyoshi T, Kunugi H, Nakagome K.	Serotonin and dopamine receptors in motivational and cognitive disturbances of schizophrenia.	Front Neurosci 8, 395 - , 2014	統合失調症に認めるモチベーション(動機づけ)および認知機能の障害に対する、セロトニン(5-HT)およびドーパミン(DA)受容体や関連する神経伝達系の役割について考察を行った。その結果、DAのみならず5-HT受容体に関連する遺伝的要因が、動機づけの程度の多様性に影響を与えたと考えられた。このような分野におけるさらなる神経生物学的検討が、患者の社会復帰を目的とした生物学的あるいは心理社会的介入の促進につながると思われる。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
209	Sumiyoshi T	Serotonin1A receptors in the action of aripiprazole.	Journal of Clinical Psychopharmacology 34(3),396 - 397,2014	抗精神病薬アリピプラゾールのセロトニン1A型受容体に対する親和性をPETにより示したLerondら(2013)の報告について、我々の研究を含むこれまで同薬の臨床および前臨床研究との関連を論じた。
210	Nishi D, Hashimoto K, Noguchi H, Matsuoka Y.	Serum neuropeptide Y in accident survivors with depression or posttraumatic stress disorder.	Neuroscience Research 83,8 - 12,2014	交通事故コホート研究を活用し、レジリエンスに関連があることが指摘されているニューロペプチドY(NPY)と、うつ病およびPTSDとの関連を、コホート内ケースコントロール研究で調べた。事故1か月後調査に参加した交通外傷者138人のうち、大うつ病は26人、小うつ病は6人、PTSDは9人、部分PTSDは16人であった。解析の結果、血清NPYとうつ病およびPTSDの間には、関連が認められなかった。血清NPYが中枢のNPYを反映していない可能性があること、うつ病およびPTSDの異種性などがその理由として考えられた。
211	Moriguchi Y, Touroutoglou A, Dickerson BC, Barrett LF.	Sex differences in the neural correlates of affective experience.	Soc Cogn Affect Neurosci 9 (5),591 - 600,2014	女性が感情的という一般仮説には実は科学的根拠に乏しい。様々な性差の過去の研究から、本研究では感情反応の量としては男女差はないが、反応の質に差がある-特に男性は視覚処理が優位で、女性は体性感覚・内受容感覚が優位である、という仮説を立て、情動刺激に対する機能的磁気共鳴画像にて実証を試みた。この仮説に沿うように、男性では視覚野の活動が優位であったのに対し、女性では、内受容感覚を司る前島皮質の活動が優位で、さらに島皮質-前帯状回の機能的結合(内受容→外界への注意のスイッチングに関わる)が男性の方で優位であった。このことは、「男性は目で感じ、女性は体で感じる」、という感情体験の男女での質の違いを表している。
212	Yonekawa T, Malicdan MC, Cho A, Hayashi YK, Nonaka I, Mine T, Yamamoto T, Nishino I, Noguchi S	Sialyllactose ameliorates myopathic phenotypes in symptomatic GNE myopathy model mice	BRAIN 137(10),2670 - 2679,2014	縁取り空胞を伴う遠位型ミオパチー(DMRV)は、シアル酸合成経路の律速酵素の遺伝的欠陥によって発症する慢性進行性の遺伝性筋疾患である。本症の発症にはシアル酸の低下が重要である。今回、ミオパチーを発症した50週齢の高齢DMRVマウスに対して、N-acetylneuraminic acid (NeuAc)またはシアリル乳糖(6'-SL)を30週間継続投与する試験を行い、表現型により治療効果を判定するとともに、投与化合物の効果の差異や特徴を明らかにした。自発運動量を50、65、72、80週齢で経時的に計測し、試験終了時に腓腹筋のサイズ、収縮力、筋病理と各組織シアル酸レベルを解析した。6'-SL投与によってマウスの自発運動量は経時的に回復した。6'-SLは骨格筋シアル酸レベルを著明に回復させ、腓腹筋サイズ、収縮力、筋病理を改善した。NeuAcの治療効果は6'-SLに及ばなかった。6'-SLはNeuAcに比し体内を留まる時間が長く、吸収された後それ自体として働くとともに、体内を循環している間にNeuAcへと代謝されさらに働くと考えられた。6'-SLのような化合物がもつ特性は、DMRV患者の実際の治療薬開発へ応用されるべきものである。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
213	Yamamoto T, Shimojima K, Umemura A, Uematsu M, Nakayama T, Inoue K	SLC16A2 mutations in two Japanese patients with Allan-Herndon-Dudley syndrome.	HumGenVar 1:14010,2014	日本人のAllan-Herndon-Dudley症候群2症例について、新規SLC16A2遺伝子の変異を同定した。
214	Motomura Y, Kitamura S, Oba K, Terasawa Y, Enomoto M, Katayose Y, Hida A, Moriguchi Y, Higuchi S, Mishima K	Sleepiness induced by sleep-debt enhanced amygdala activity for subliminal signals of fear	BMC Neurosci 15(1),97 - ,2014	睡眠不足のシミュレート試験により、眠気が強くなると意識上の視覚処理機能(網膜-視覚野-扁桃体)が低下するのに相反して、無意識的な視覚処理機能(網膜-上丘-扁桃体)が高まり、サブリミナル呈示された恐怖画像に対する扁桃体の反応性が亢進することを明らかにした。この現象は、睡眠不足が恒常化している現代人の情動制御に不安定性をもたらしている可能性がある。
215	Fujisawa D, Umezawa S, Basaki-Tange A, Fujimori M, Miyashita M.	Smoking status, service use and associated factors among Japanese cancer survivors—a web-based survey.	Support Care Cancer 22(12),3125 - 3134,2014	本研究は、がんサバイバーの喫煙状況とその関連要因を検討した論文である。
216	Yamada M, Seto Y, Taya S, Owa T, Inoue YU, Inoue T, Kawaguchi Y, Nabeshima Y, Hoshino M	Specification of spatial identities of cerebellar neuron progenitors by ptf1a and atoh1 for proper production of GABAergic and glutamatergic neurons	J Neurosci 34(14),4786 - 4800,2014	小脳の神経前駆細胞の位置情報が、二つの転写因子Ptf1aおよびAtoh1によって与えられることを見いだした。その位置情報によって、それぞれの神経前駆細胞は抑制性神経細胞および興奮性神経細胞を生み出す。
217	Watanabe Y, Suzuki S, Nishimura H, Murata KY, Kurashige T, Ikawa M, Asahi M, Konishi H, Mitsuma S, Kawabata S, Suzuki N, Nishino I	Stains and myotoxic effects associated with anti-3-hydroxy-3-methylglutaryl-coenzyme a reductase autoantibodies: an observational study in Japan	MEDICINE 94(4),e416 - e416,2015	スタチンはさまざまな筋毒性効果や炎症性筋疾患のトリガーとなることが今まで報告されている。とくにスタチン関連性ミオパチーでは自己抗体の一つである抗HMGCR抗体が検出されることがある。この研究ではELISA法による抗HMGCR抗体の検出法を確立し、炎症性筋疾患や重症筋無力症の患者について検討した。再生線維および患者血清で陽性を示すことがわかった。8人の壊死性ミオパチーの患者は、その他の炎症性ミオパチーの患者よりもはるかに高い陽性を示し、うち3人がスタチンの投与を受けていた。重症筋無力症では251人中23人が、スタチンの投与を受けていたが、その他1人でしか抗HMGCR抗体は検出されず、この1人はスタチンの投与は受けていなかった。以上より壊死性ミオパチーはスタチンの投与の有無に関わらず、臨床的に利用可能なマーカーとして有用であり、重症筋無力症に関しては関連がなかった。
218	Yamaguchi S, Ling H, Kim K, Mino Y	Stigmatisation towards people with mental health problems in secondary school students: an international cross-sectional study between three cities in Japan, China and South-Korea	International Journal of Culture and Mental Health 7(3),273 - 283,2014	本研究は、大阪(日本)、瀋陽(中国)、釜山(韓国)の中学生における、この病や精神障害に対する態度や偏見の実態と、それに関連する要因を明らかにすることを目的とした。調査の結果、「この病に関する知識・情報」について、釜山の学生において好ましい回答が多い傾向にあった。社会的距離に影響する要因とし「知り合いに居ること」、「この病に関する知識・情報」の量などが関係していると示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
219	Matsumoto H, Sengoku R, Saito Y, Kakuta Y, Murayama S, Imafuku I	Sudden death in Parkinson's disease: A retrospective autopsy study	Journal of the Neurological Sciences 343(1),149 – 152,2014	突然死したパーキンソン病の症例の剖検例を経験した。末梢自律神経障害が著明であり、それが死因と関係すると考えた。自律神経障害の強い同疾患患者では、留意する必要があるということが示唆された。
220	Takeshima Tadashi, Yamauchi Takashi, Inagaki Masatoshi, Kodaka Manami, Matsumoto Toshihiko, Kawano Kenji, Katsumata Yotaro, Fujimori Maiko, Hisanaga Ayaka, Takahashi Yoshitomo	Suicide prevention strategies in Japan: A 15-year review (1998–2013).	Journal of public health policy 36(1),52 – 66,2015	本研究は、1998年から2013年にかけての日本における包括的な自殺対策の発展過程を検討することを目的として実施された。2006年の自殺対策基本法制定、2007年の自殺総合対策大綱策定は、自殺総合対策の促進に大きな効果があり、地方自治体を対象にした基金の整備とともに、包括的かつ多部門による自殺予防アプローチの発展につながった。日本における自殺死亡率は、2009年以降減少しつつあり、日本の自殺予防戦略の評価のため継続的なモニタリングが求められている。
221	Kodaka Manami, Matsumoto Toshihiko, Katsumata Yotaro, Akazawa Masato, Tachimori Hisateru, Kawakami Norito, Eguchi Nozomi, Shirakawa Norihito, Takeshima Tadashi	Suicide risk among individuals with sleep disturbances in Japan: a case-control psychological autopsy study.	Sleep medicine 15(4),430 – 435,2014	本研究では、自殺の心理学的剖検による症例対照研究を実施した。その結果、睡眠障害と自殺とは有意な関係性が認められた。睡眠障害と精神障害は自殺の相対リスクは同程度であったが、自殺予防においては、自殺に対する人口寄与危険割合のより高い睡眠障害を特定した方がより有用であることが分かった。また、自殺のサインとしての睡眠障害の評価は、既に自殺リスクの高い集団に対して有用であることが推測された。
222	Uehara Takashi, Matsuoka Tadasu, Sumiyoshi Tomiki	Tandospirone, a 5-HT1A partial agonist, ameliorates aberrant lactate production in the prefrontal cortex of rats exposed to blockade of N-methyl-D-aspartate receptors; Toward the therapeutics of cognitive impairment of schizophrenia	Frontiers in Behavioral Neuroscience 8,291 – 291,2014	乳酸は脳へのエネルギー供給に重要な役割を果たすことが明らかにされており、グルタミン神経伝達に依存する。本研究は、セロトニン1A(5-HT1A)受容体部分作動薬タンドスピロン(TSP)が、統合失調症モデルラット前頭前皮質における乳酸代謝の低下を改善することを示した。この結果は、TSPの統合失調症における認知機能障害改善作用を説明し得ると考えられた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
223	Hori H, Fujii T, Yamamoto N, Teraishi T, Ota M, Matsuo J, Kinoshita Y, Ishida I, Hattori K, Okazaki M, Arima K, Kunugi H.	Temperament and character in remitted and symptomatic patients with schizophrenia: modulation by the COMT Val158Met genotype.	J Psychiatr Res. 56,82 - 89,2014	統合失調症において、寛解に関連する要因を検討することは重要である。本研究では、統合失調症寛解患者、非寛解患者、健常者において、Temperament and Character Inventoryを用いてパーソナリティを評価するとともに、catechol-O-methyltransferase(COMT)遺伝子のVal158Met多型がパーソナリティに与える影響を調べた。非寛解患者のパーソナリティと比較し、寛解患者のパーソナリティはより適応的なプロフィールを示し、健常者のプロフィールに近かった。非寛解患者においてMetアレルは報酬依存や協調性の低さと関連したのに対し、寛解患者ではVal158Met多型とパーソナリティの間に関連がみられなかった。したがって、この多型は統合失調症における寛解とパーソナリティの関連を修飾する可能性が示唆された。
224	Kimura Y, Sato N, Saito Y, Ito K, Kamiya K, Nakata Y, Watanabe M, Maikusa N, Matsuda H, Sugimoto H	Temporal Lobe Epilepsy with Unilateral Amygdala Enlargement: Morphometric MR Analysis with Clinical and Pathological Study.	J Neuroimaging 25(2),175 - 183,2015	扁桃腫大は側頭葉てんかんの一亜型としててんかん原性を有することが報告されている。われわれは後方視的に23人の一側の扁桃腫大による側頭葉てんかん患者における臨床像と画像所見を検討した。21人の患者は抗てんかん薬に著効を示した。難治性の2人の患者では手術の結果、限局性皮質異形成が確認された。Voxel-based morphometryでは、50%の症例で患側の側頭極までの広い範囲の体積増加が認められ、FreeSurferによる体積測定では、患側扁桃で大きな値を示した。
225	Bruffaerts, R., Demyttenaere, K., Kessler, R. C., Tachimori, H., Bunting, B., Hu, C., . . . Scott, K. M.	The Associations Between Preexisting Mental Disorders and Subsequent Onset of Chronic Headaches: A Worldwide Epidemiologic Perspective.	J Pain, 16(1), 42-52. 2015	本研究は、世界の一般住民において、広い範囲の精神障害がその後の重症もくくは頻回の頭痛の発症と関係があることを明らかにした。
226	Mishima K, DiBonaventura MD, Gross H	The burden of insomnia in Japan	Nat Sci Sleep 7,1 - 11,2015	研究目的: 日本人の不眠症患者におけるQOL障害の実態を明らかにする。 研究方法: Japan National Health and Wellness Survey 2002の18歳以上の登録者(n=30,000)から、不眠症状があり投薬を受けている不眠症患者(n=1,018; 3.4%)と対照良眠者(n=20,542)を抽出した。多重回帰モデルを用いて、不眠症患者のQOL障害とその背景要因を解析した。 研究結果: 不眠群では対照群に比較して有意にQOLが低下していた。喫煙、運動不足、飲酒、そしてメンタルヘルスの悪化はQOL障害と有意に関連していた。 考察: 不眠症患者における深刻なQOL障害の存在が明らかにされたと同時に、運動、禁煙、節酒などの生活習慣指導を実践している群ではQOLは対照群と同程度にまで改善する可能性も示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
227	Fujii T, Ota M, Hori H, Hattori K, Teraishi T, Matsuo J, Kinoshita Y, Ishida I, Nagashima A, Kunugi H	The common functional FKBP5 variant rs1360780 is associated with altered cognitive function in aged individuals	Scientific Reports 4,6696 - ,2014	ストレス脆弱性を規定するグルココルチコイド受容体シグナルのシャペロン分子FKBP5の機能多型rs1360780 (C/T)と認知機能(ウエクスラー記憶検査と成人知能検査成績)との関係について、およそ700人の一般成人(健常者)を対象として検討した結果、高齢群(>50歳)では、ストレス脆弱性アリルTをもつ者は、もたない者と比較して作動記憶の成績が低く、注意/集中力が低下していることを明らかにした。
228	Frisoni GB, Jack CR Jr, Bocchetta M, Bauer C, Frederiksen KS, Liu Y, Preboske G, Swihart T, Blair M, Cavado E, Grothe MJ, Lanfredi M, Martinez O, Nishikawa M, Portegies M, Stoub T, Ward C, Apostolova LG, Ganzola R, Wolf D, Barkhof F, Bartzokis G, DeCarli C, Csernansky JG, deToledo-Morrell L, Geerlings MI, Kaye J, Killiany RJ, Lehericy S, Matsuda H, O'Brien J, Silbert LC7, Scheltens P, Soininen H, Teipel S, Waldemar G, Fellgiebel A, Barnes J, Firbank M, Gerritsen L, Henneman W, Malykhin N, Pruessner JC, Wang L, Watson C, Wolf H, deLeon M, Pantel J, Ferrari C, Bosco P, Pasqualetti P, Duchesne S, Duvernoy H, Boccardi M; EADC-ADNI Working Group on The Harmonized Protocol for Manual Hippocampal Volumetry and for the Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative.	The EADC-ADNI Harmonized Protocol for manual hippocampal segmentation on magnetic resonance: Evidence of validity.	Alzheimers Dement 11(2),111 - 125,2015	海馬の用手による体積測定の調和プロトコルの妥当性を検証する。14人のトレーサーが10人のADNIでのアルツハイマー病患者の1.5Tと3TによるMRIで海馬をローカルルールと今回の調和プロトコルで体積測定を行った。さらにそのうちの5人の最も正確なトレーサーが15人のADNIでのアルツハイマー病患者の海馬を1.5Tと3Tでの3時点で体積測定を行った。ローカルルールでは、海馬体積の一致率はICCで0.44と低値であったが、調和プロトコルでは0.88と高値であった。15人のアルツハイマー病患者での3時点での体積一致率はICCで0.94ときわめて高値であった。調和プロトコルは安定な体積測定を提供し、高い信頼性を有することがわかった。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
229	Hajime Sueki, Naohiro Yonemoto, Tadashi Takeshima, Masatoshi Inagaki	The Impact of Suicidality-Related Internet Use: A Prospective Large Cohort Study with Young and Middle-Aged Internet Users.	PLoS ONE 9(4), e94841 - ,2014	自殺に関するインターネット利用の影響を明らかにするためオンライン質問紙調査を実施した。インターネット利用経験者と対照群それぞれ約4千人に自殺念慮や抑うつ・不安感等の変化を追跡調査した。死にたい気持ちを匿名他者に打ち明けることと自殺方法を閲覧することは自殺念慮の悪化につながっていた。匿名他者にメンタルヘルスの相談をすることは抑うつ・不安感の悪化につながっていた。自殺リスクの高いインターネット利用者への効果的な支援方法の開発が望まれる。
230	Sacai Hiroaki, Sasaki-Hamada Sachie, Sugiyama Azusa, Saitoh Akiyoshi, Mori Kazuhiro, Yamada Mitsuhiko, Oka Jun-Ichiro	The impairment in spatial learning and hippocampal LTD induced through the PKA pathway in juvenile-onset diabetes rats are rescued by modulating NMDA receptor function.	Neurosci Res 81-82,55 - 63,2014	幼年期発症の1型糖尿病は、中程度の認知の障害作用を起こし、認知機能低下のリスクを増加させる。若年期の糖尿病発症における、認知機能と海馬機能の関連はほぼ明らかになっていない。今回JDMラットにおいて、NMDA受容体阻害薬メマンチンが海馬LTDをよび海馬依存的な記憶を回復させるか検討を行った加えて、LTDの障害がNMDA受容体サブタイプNR2Bの機能不全に起因するか検討した。結果、JDMラットにおいてNMDA受容体機能を変化させ、LTDを障害することが知られているPKAの過度な活性化が認められた。以上の結果から、NR2Bを含むNMDA受容体とPKA活性の変化がJDMラットの学習障害と関連する可能性が示唆された。
231	Uchiyama S, Nishino I, Izumi T	The muscle findings in a pediatric patient with live attenuated oral polio vaccine-related flaccid monoplegia	VACCINE 32(42),5379 - 5381,2014	ポリオ弱毒生ワクチンの経口摂取後に弛緩性単麻痺を呈した1例を報告した。ポリオ弱毒生ワクチンを生後3箇月と6箇月の2回経口摂取した男児が、3歳6箇月頃に左足を引きずる事に気付かれた。7歳11箇月時の入院検査したところ、左前脛骨筋と左長母趾伸筋の筋萎縮と筋力低下がみられ、下垂足を呈していた。緩慢な臨床経過を辿った、ポリオ弱毒生ワクチン関連単麻痺と診断した。
232	Numakawa T, Richards M, Nakajima S, Adachi N, Furuta M, Odaka H, Kunugi H	The role of brain-derived neurotrophic factor in comorbid depression: possible linkage with steroid hormones, cytokines, and nutrition	Front Psychiatry 5:136,2014	うつ病は発症率の高い病気であるが、その発症メカニズムには多くの仮説が存在する。例えば、中枢ニューロンの機能に重要な脳由来神経栄養因子BDNFの発現低下は、うつ病患者の死後脳などで確認されている。しかし、ストレスに関係するグルココルチコイドや、産後うつ病との関係が高いエストロゲンなど、ホルモンとBDNF動態との関係も興味深い。本レビューでは、脳機能に欠かせない栄養因子BDNF、ストレスホルモンに加えて、炎症性サイトカインや栄養状態とうつ病病態の関係における最近の知見をまとめている。
233	Hamazaki K, Nishi D, Yonemoto N, Noguchi H, Kim Y, Matsuoka Y.	The role of high-density lipoprotein cholesterol in risk for posttraumatic stress disorder: Taking a nutritional approach toward universal prevention	Eur Psychiatry 29(7),408 - 413,2014	交通外傷患者の精神健康に関するコホート研究のデータを活用して、血清脂質レベルとPTSD発症について縦断的に検討した。研究の結果、交通事故直後の低HDLおよび高TGレベルが、事故6カ月後のPTSD発症リスクと関連する可能性が示唆された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
234	Hamazaki Tomohito, Colleran Heather, Hamazaki Kei, Matsuoka Yutaka, Itomura Miho, Hibbeln Joseph	The Safety of Fish Oils for Those Whose Risk of Injury is High.	Military medicine 179(11 Suppl),134 - 137,2014	ω3系脂肪酸を含む魚油摂取が外傷後の出血リスクを大きくするかどうか、ω3系脂肪酸プロファイルが改善することにより外傷からの修復過程に影響を与えるかどうかについて検討した。1日のω3系脂肪酸摂取を3グラムとすることを否定するエビデンスはなかった。しかし3グラム以上摂取する場合の安全性については十分なデータが得られなかった。
235	Chika Sumiyoshi, Manabu Takaki, Yuko Okahisa, Thomas Patterson, Philip D. Harvey, Tomiki Sumiyosh	THE UCSD PERFORMANCE-BASED SKILLS ASSESSMENT-BRIEF JAPANESE VERSION (UPSA-B_J): DISCRIMINATIVE VALIDITY FOR SCHIZOPHRENIA	Brain Stimulation 153(1),S266 - S266,2014	日常生活技能評価尺度UCSD Performance-based Skills Assessment - Brief (UPSA-B)日本語版による統合失調症患者および健常者に施行し、良好な疾患感受性が得られた。
236	Yasunari Matsuzaka, Soichiro Kishi, Yoshitsugu Aoki, Hirofumi Komaki	Three novel serum biomarkers, miR-1, miR-133a, and miR-206 for Limb-girdle muscular dystrophy, Facioscapulohumeral muscular dystrophy, and Becker muscular dystrophy	Environ Health Prev Med ,2014	血清中の骨格筋特異的なmicroRNAはドウシャンヌ型以外の筋ジストロフィーの診断にも有用なバイオマーカーであることを報告した。
237	Ishikawa R, Kim R, Namba T, Kohsaka S, Uchino S, Kida S.	Time-dependent enhancement of hippocampus-dependent memory after treatment with memantine: Implications for enhanced hippocampal adult neurogenesis.	Hippocampus. 24(7),784 - 793,2014	成熟したラットでみられる海馬での神経細胞の新生は学習や記憶と密接に関連していることが知られている。本研究においてはこの海馬における神経細胞新生に対するNMDA受容体の阻害剤であるメマンチン(MEM)の効果について検討した。その結果MEMは容量依存的に海馬における細胞新生を促進させ、かつ学習能力をも亢進させることが明らかになった。このことは老化で見られる学習障害の治療に結びつく可能性を示唆している。
238	Nomoto M, Mizuno Y, Kondo T, Hasegawa K, Murata M, Takeuchi M, Ikeda J, Tomida T, Hattori N.	Transdermal rotigotine in early stage Parkinson's disease: a randomized, double-blind, placebo-controlled trial.	J Neurol. 261(10),1887 - 1893,2014	わが国における進行期パーキンソン病患者を対象としたドパミンアゴニスト貼布薬ロチゴチンの第3相治験の結果の報告。ロチゴチンはプラセボと比較して有意なUPDTS IIIの改善及びオフ時間の短縮を認めた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
239	Sutoh C, Matsuzawa D, Hirano Y, Yamada M, Nagaoka S, Chakraborty S, Ishii D, Matsuda S, Tomizawa H, Ito H, Tsuji H, Obata T, Shimizu E	Transient contribution of left posterior parietal cortex to cognitive restructuring	Sci Rep. 2015	本論文は、ヒトにおいて認知の再構成時に左後頭頂葉が活性化することを機能的MRIを明らかにし、用いて示したものである。この成果は、認知行動療法の神経機構の理解に繋がりを示している。
240	Takezawa Y, Kohsaka S, Nakajima K.	Transient down-regulation and restoration of glycogen synthase levels in axotomized rat facial motoneurons.	Brain Res. 1586(1),34 - 45,2014	ラットの顔面神経線維の切断後に見られる活性化ミクログリアにおいて細胞のエネルギー源となるグリコーゲンの合成酵素が軸索切断後1~2週間に一過性に減少する事が明らかとなった。
241	Yonekawa T, Nishino I	Ullrich congenital muscular dystrophy: clinicopathological features, natural history and pathomechanism(s)	JOURNAL OF NEUROLOGY, NEUROSURGERY & PSYCHIATRY 86(3),280 - 287,2015	VI型コラーゲンは各組織の細胞外マトリックスに存在し、骨格筋では筋細胞基底膜とその近傍に密に存在する。ウルリッヒ型先天性筋ジストロフィーはCOL6A1, COL6A2, COL6A3遺伝子のいずれかの変異によって発症し、細胞外マトリックスのVI型コラーゲンが欠損する。常染色体劣性、優性のどちらの遺伝形式によっても起こるが、多くの患者ではヘテロ接合性de novo変異が見つかる。本症の患者は特徴的な臨床像を呈し、最近では自然歴も知られるようになってきた。筋病理の特徴は、壊死再生が軽い割に線維化が目立つことである。現在の治療は対症療法に留まるが、骨格筋におけるVI型コラーゲン産生細胞が同定されたことにより、今後細胞治療の発展が期待されている。
242	Wright MC, Reed-Geaghan EG, Bolock AM, Fujiyama T, Hoshino M, Maricich SM	Unipotent, Atoh1+ progenitors maintain the Merkel cell population in embryonic and adult mice	J Cell Biol 208(3),367 - 379,2015	本研究では、マウスの遺伝学的手法を用いて、「延髄のRTZ核が、血中二酸化炭素濃度の上昇やpHの低下に反応して呼吸を活性化させる働きを担っている」ということを証明した。
243	Sumiyoshi C., Takaki M., A., Okahisa Y., Patterson T. L., Harvey P.D, Sumiyoshi T.	Utility of the UCSD performance-based Skills Assessment-brief Japanese version: discriminative ability and relation to neurocognition.	Schizophrenia Research Cognition 1(3),137 - 143,2014	日常生活技能評価尺度UCSD Performance-based Skills Assessment - Brief (UPSA-B)日本語版による統合失調症患者および健常者に施行し、良好な疾患感受性が得られた。また同尺度から得られる得点は、MATRICS Cognitive Consensus Battery日本語版により認評価される認知機能知機能と有意な正の相関を示した。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
244	Ito M, Oe Y, Kato N, Nakajima S, Fujisato H, Miyamae M, Kanie A, Horikoshi M, NormanSB	Validity and Clinical Interpretability of Overall Anxiety Severity and Impairment Scale(OASIS)	J Affect Disord. 170, 217-224 , 2014	本論文は、不安症状の重症度とその機能障害を測定する簡易的な尺度 (Overall Anxiety Severity and Impairment Scale(OASIS))の信頼性、妥当性、臨床解釈可能性について検討した。対象は、インターネット調査会社に登録する不安障害患者、うつ病患者、非臨床群であった。分析の結果、OASISの信頼性、因子的妥当性、収束的・弁別的妥当性が示された。さらに、層別尤度比を算出することにより、OASISの各得点範囲がそれぞれの程度の臨床的な意義を持つのかを示した。
245	Nakazaki K, Kitamura S, Motomura Y, Hida A, Kamei Y, Miura N and Mishima K	Validity of an algorithm for determining sleep/wake states using a new actigraph	Journal of Physiological Anthropology 33(1),31 - ,2014	本研究では、健常者34名を対象とし、腰部装着型の活動量計FS-750で計測した活動量(活動強度)の時系列データから睡眠/覚醒を判定するアルゴリズムを求め、その精度を評価した。作成した睡眠/覚醒判定アルゴリズムを用いて、PSG判定との判定精度を求めた結果、従来の活動量計と同等の一致率で睡眠/覚醒を判定できることが示された。さらに、FS-750による睡眠パラメータの推定ルールを作成し適用した結果、入眠潜時、中途覚醒時間、睡眠時間、睡眠効率、いずれの項目においても、PSGと比較して平均値に差がなく、かつPSGとの相関が認められた。従来より小型、廉価、かつ長期間にわたり測定できるFS-750の活用により在宅での睡眠研究や遠隔睡眠医療により一層の進展が期待される。
246	Kitamura S, Hida A, Aritake S, Higuchi S, Enomoto M, Kato M, Vetter C, Roenneberg T, Mishima K	Validity of the Japanese version of the Munich ChronoType Questionnaire	Chronobiol Int 31(7),845 - 850,2014	ミュンヘンクロノタイプ質問紙(MCTQ)の日本語版を開発し、妥当性を検討した。MCTQは仕事や学校、家事などの制約がない日の睡眠のタイミングを個人のクロノタイプ(朝型夜型)の手がかりとする質問紙である。標準的な朝型夜型質問紙(MEQ)及び内因性メラトニン分泌リズムを指標とした体内時計の時刻とも有意な相関が得られたことから、MCTQ日本語版の妥当性が確認された。MCTQ日本語版は日本人を対象とした体内時計の簡易的な測定を可能とするツールとして今後の活用が期待される。
247	Takei R, Matsuo J, Takahashi H, Uchiyama T, Kunugi H, Kamio Y	Verification of the utility of the Social Responsiveness Scale for Adults in non-clinical and clinical adult populations in Japan	BMC Psychiatry 2014 14 (302),2014	近年、未診断の自閉症スペクトラム障害の成人のアンメット・ニーズが明らかになりつつある。本研究は、簡便に自閉症特性の定量化ができる尺度である、対人応答性尺度成人用(SRS-A)の日本語版の臨床的な有用性を検討することを目的とし、19歳～59歳の一般サンプル(n=592)での分布の特徴を調べ、ASD、非ASDの臨床サンプル(n=142)を対象として信頼性妥当性の検証と因子構造の検討を行い、ASDスクリーニングのカットオフポイントの算定を行った。その結果、SRS-Aはさまざまな領域における発達障害のある成人を対象とする支援および研究等において簡便で有用な行動評価尺度であることが示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
248	Miura E, Hasegawa T, Konno M, Suzuki M, Sugeno N, Fujikake N, Geisler S, Tabuchi M, Oshima R, Kikuchi A, Baba T, Wada K, Nagai Y, Takeda A, Aoki M	VPS35 dysfunction impairs lysosomal degradation of α -synuclein and exacerbates neurotoxicity in a Drosophila model of Parkinson's disease	Neurobiol Dis 71,1 – 13,2014	家族性パーキンソン病において、レトロマーに関わるVps35遺伝子の変異が同定された。本研究では、Vps35の機能喪失によるレトロマー障害によりカテプシンDのリソソームへの輸送が障害され、 α シヌクレインの分解が低下し、蓄積することを明らかにした。さらに α シヌクレインを発現するショウジョウバエモデルにおいて、Vps35ノックダウンにより不溶性 α シヌクレインが蓄積し、運動障害、複眼変性が増悪することを見出した。以上の結果から、レトロマーによるカテプシンDの輸送が、 α シヌクレインの分解、パーキンソン病の病態に重要な役割を果たすことが示唆された。
249	Yokota Toshifumi, Miyagoe-Suzuki Yuko, Ikemoto Takaaki, Matsuda Ryoichi, Takeda Shin'ichi	α 1-Syntrophin-deficient mice exhibit impaired muscle force recovery after osmotic shock.	Muscle & nerve 49(5),728 – 735,2014	ジストロフィン-糖たんぱく質複合体の構成分子の一つ、alpha1-syntrophinの欠損マウスを用いてalpha1-syntrophinとそれにアンカリングされる水チャンネル、アクアポリン-4が浸透圧変化に対する骨格筋膜の耐性に重要な役割を果たすことを見出した。
250	菊池美名子, 金 吉晴	DSM-5におけるトラウマ・ストレス関連疾患の診断基準について	心と社会 157,48 – 52,2014	DSM-5では多くの診断基準に変更が見られたが、なかでもPTSDについてはいくつかの重要な改編が行われた。発症のきっかけとなったトラウマ的出来事の基準は、「死亡、重傷、性的暴行あるいはその脅威」のみに限定され、「恐怖・無力感・戦慄を伴うものであった」という主観的基準は削除された。症状基準は、これまでの再体験、回避・麻痺、過覚醒のtriadに、認知と気分の否定的変化に関する項目が追加され、4つの症状クラスターへと変更された。また、解離が重視されるようになったことも大きな特徴のひとつである。
251	佐々木 啓, 舞草 伯秀, 今林悦子, 湯浅 哲也, 松田 博史	アミロイドPET/CTによるアルツハイマー病診断のためのSPM8を用いたCT画像による部分容積効果の補正	Medical Imaging Technology 32(5),323 – 331,2014	アルツハイマー型認知症の早期診断には、アミロイドPET (positron emission tomography) 画像から推定される灰白質へのアミロイド沈着量の解析が有効である。しかし、PET画像では、その低空間分解能に起因する部分容積効果により、灰白質へのアミロイド沈着量が過小評価される傾向がある。本研究では、PET/CT (computed tomography) により同時撮像されたCT画像から得られる高解像度の形態情報を利用することで、PET画像の部分容積効果の補正を行い、アミロイド沈着量の定量性改善を試みた。AD (Alzheimer's disease) 患者9名、健常者11名の臨床データからCT画像の形態情報に基づいて、PET画像の部分容積効果の補正をSPM8 (statistical parametric mapping 8) を用いて行うことで、AD患者群と健常者群の差を際立たせることができることをVOI (volume of interest) 解析により示した。AD診断に有効とされる8箇所のVOIに対してROC (receiver operating curve) を作成し、AUC (area under ROC curve) を比較したところ、すべてのVOIで部分容積効果の補正を適用した結果が適用しない結果を上回った。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
252	引土絵未,松本俊彦,和田清,谷淵由布子,高野歩,今村扶美,川地拓,若林朝子,加藤隆	いわゆる『脱法ドラッグ』使用障害患者の集団薬物再乱用防止プログラム(SMARPP)における治療反応性?覚せい剤使用障害患者との比較	日本アルコール・薬物医学会雑誌 49(6),318 - 329,2014	本研究では,NCNP病院で実施するSMARPPに参加する脱法ドラッグ使用障害患者の治療反応性について,覚せい剤使用障害患者との比較において検証した。その結果,プログラム参加率や自己申告飲酒・薬物使用頻度など治療反応性に概ね差異はなく,脱法ドラッグ使用障害患者の大きな特徴は見受けられなかった。しかし,脱法ドラッグ使用障害患者の特徴として,個別場面で薬物の誘いを断る自信については覚せい剤使用障害患者ほど高まらず,治療の動機付けについてはわずかに低下しており,治療が有効に機能していない側面も示唆された。この要因として,重症度が得点に影響している点,脱法ドラッグの入手の容易さや「脱法」という規範意識の低さが影響している点,そして,覚せい剤から脱法ドラッグへの「移行群」に対する方法論的問題が考えられた。今後は,今回明らかになった脱法ドラッグ使用障害患者の特徴をふまえ,脱法ドラッグ使用障害患者に有効な治療プログラムの開発が望まれる。
253	野田隆政,中込和幸,樋口輝彦	うつ病から躁うつ病へ診断変更となった1例 診断補助としての近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)の可能性	Bipolar Disorder 12,56 - 60,2014	入院時は反復性うつ病の診断で治療を行っていたが,その後治療経過の中で双極II型障害に診断が変更となった43歳の症例を報告した。27歳時に抑うつ状態にて発症し,近医を受診してうつ病と診断され,抗うつ薬治療により数カ月で改善した。しかし,34歳の時に再発し,抗うつ薬治療が行われたものの,初回エピソードよりも改善に至るまでに時間がかかった。40歳時に3回目のうつエピソードを呈したが5種類の抗うつ薬を最大量にて十分期間投与しても反応は不十分であり,増強療法を試みるも効果がなかったため,43歳時に入院となった。入院時に近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)から双極性障害に類似した波形パターンを示していると考えられた。入院直後に電気けいれん療法(ECT)を導入し計8回施行したものの,明らかな効果は得られなかった。認知行動療法(CBT)を開始し,処方調整を行った。退院時はリチウムとクエチアピンが主剤であり,エスタロプラムなどを併用薬として用いた。4か月経過した頃によりやく落ち着いた。
254	臼杵理人,西大輔,松岡豊	せん妄を伴う可逆性後頭葉白質脳症にolanzapineと降圧薬の併用が奏功した1例	総合病院精神医学 26(1),69 - 74,2014	うつ病既往歴のある患者が意識障害を呈して入院となったが,臨床所見,頭部MRI所見などから,せん妄を伴った可逆性後頭葉白質脳症と診断した症例を経験した。せん妄に伴う精神運動興奮を認めたが,オランザピン投与と降圧剤の併用が奏功し,後遺症なく軽快した。
255	宮脇統子,古東秀介,石原広之,後藤雄一,西野一三,荻田典生,戸田達史	ミトコンドリアDNA8729G>A変異を認めたneurogenic muscle weakness, ataxia, and retinitis pigmentosa (NARP) の1例.	臨床神経学 55(2),91 - 95,2015	ミトコンドリアDNAの8729変異を認めたNARPの症例を症例報告
256	堀越勝・古川壽亮・今井必生	モバイルメンタルヘルス-精神科医が利用できるスマートフォン認知行動療法	総合病院精神医学 23(3),255 - 260,2015	認知行動療法(CBT)の均てん化はCBT介入者の訓練に時間が要する等,遅々たる歩みである。そこで,CBTを携帯端末,特にスマートフォンを介して提供することを考えた。又,うつ病は医師の診断を要する精神疾患であるので,利用については精神科医がきちんとマネージできるシステムを構築している。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
257	原口英之, 加藤香, 井上雅彦	わが国におけるペアレント・メンター養成研修の現状と今後の課題	自閉症スペクトラム研究 12(2), 63 - 63, 2015	2010~2013年度に実施されたペアレント・メンター養成研修の全国的な実施状況について把握することを目的に、全国都道府県および政令指定都市の発達障害者支援センターを対象に質問紙調査を実施した。48カ所から回答を得た結果、30カ所の地域で研修が一度以上実施されていることが明らかになった。しかしながら、研修の実施状況には地域差が見られた。今後、養成研修の実施内容と成果や課題について、また養成研修を修了したメンターの活動の現状や課題をさらに調査する必要性を指摘した。
258	安藤久美子, 中澤佳奈子, 浅野敬子, 津村秀樹, 長沼洋一, 菊池安希子	わが国における触法精神障害者通院医療の現状-2005~2013年の全国調査の分析から-	臨床精神医学 43(9), 1293 - 1300, 2014	医療観察法における通院処遇対象者を対象に全国調査を実施した。その結果、対象者の約半数が、通院処遇中に精神保健福祉法による入院治療を受けていること、対象者4人に1人の割合で、通院の不遵守や服薬拒否といった医療に関する問題行動が発生していることなどを明らかとした。こうしたエビデンスに基づいた提言は、今後の我が国の司法精神医療社会内処遇にあり方を検討するにあたって、多いに寄与するものと思われる。
259	赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 小高真美, 川上憲人, 江口のぞみ, 白川教人, 立森久照, 竹島正	過去に自殺企図歴のない成人男性における自殺のリスク要因の検討	精神科治療学 29(4), 519 - 526, 2014	心理学的剖検の手法を用いて収集した自殺既遂事例のうち、過去に自殺企図歴がない男性47名の自殺既遂事例の情報と、性別・年齢階級・居住地域を一致させた155名の生存対照群の情報とを症例対照研究のデザインで比較し、過去に自殺企図歴のない成人男性の自殺のリスク要因について検討した。多変量解析の結果、過去1年の返済困難な借金の経験、気分障害、物質関連障害が自殺既遂と有意に関連していた。過去に自殺企図歴のない男性の自殺既遂を防ぐためには、精神障害への保健医療的介入に加えて、返済困難な借金に対する社会的支援の重要性が示唆された。
260	野田寿恵, 佐藤真希子, 杉山直也, 吉浜文洋, 伊藤弘人	患者および看護師が評価する精神科病棟の風土 エssen精神科病棟風土 評価スキーマ日本語版 (EssenCES-JPN) を用いた検討	精神医学 56(8), 715 - 722, 2014	エッセン精神科病棟風土評価スキーマ日本語版を用い、全国23病院の入院患者151名と看護師661名からの回答を同時評価した。因子得点において、「安全性への実感」で看護師の評価が患者に比べて有意に低く、「患者間の仲間意識・相互サポート」は患者が有意に高評価し、「治療的な関心」の患者・看護師間の不一致は欧州に比べ小さかった。人員配置の違いが要因として考慮され、本邦の精神科病棟風土に関する興味深い特徴が描出された。
261	西川敦子, 森まどか, 岡本智子, 大矢寧, 中田智彦, 大野欽司, 村田美穂	顔面肩甲上腕型筋ジストロフィーと診断されていたDOK7型筋無力症の1例	臨床神経 54(7), 561 - 564, 2014	26歳女性。出生時呼吸不全あり顔面肩甲上腕型筋ジストロフィーと診断されていた。眼瞼下垂、変動する筋力低下、易疲労性、反復刺激試験でwaning現象あり。DOK7遺伝子に新規変異を認め、先天性筋無力症候群と確定診断した。症状は3,4-ジアミノピリジンで改善した。筋力低下の変動は診断に重要である。
262	木村 円, 中村治雅, 西野一三	筋ジストロフィー: Remudy	BRAIN AND NERVE 66(11), 1396 - 1402, 2014	神経・筋疾患患者情報登録Remudyは国立精神・神経医療研究センター-TMCに事務局を置き、国際協調に基づきジストロフィン異常症とGNEミオパチーの二つのナショナルレジストリーを運用している。目的は臨床研究の基盤整備であり臨床試験の推進であり、すでにフィージビリティ調査や研究への参加者リクルートに用いられ、自然歴・疾患疫学データを提示してきた。レジストリーに基づく臨床研究は希少疾患の臨床研究の新しいスタイルであり、Remudyはそのプロトタイプを提示している。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
263	木村 円, 中村治雅, 三橋里美, 竹内芙実, 森まどか, 清水玲子, 小牧宏文, 林由起子, 西野一三, 川井 充, 武田伸一	筋ジストロフィーの臨床開発を推進する研究基盤: RemudyとMDCTN	臨床神経学 54(12), 1069 - 1070, 2014	国際協調に基づく遺伝性神経・筋疾患の臨床研究の推進を目的とし、国立精神・神経医療研究センターに、神経筋疾患患者情報登録Remudyを構築し、現在、ジストロフィノパチーおよびGNEミオパチーのレジストリーを運営している。設立当初の目的である臨床研究の計画および実施の際に対象となる疾患の疫学データを提供し、登録者へ正確な情報提供と迅速かつ効率的な試験参加者のリクルートフローを筋ジストロフィー臨床試験ネットワークMDCTNと共に構築した。さらに、疫学・自然歴情報を提供する臨床研究も実施している。これらの取り組みは、希少な難治性疾患の臨床研究基盤整備のモデルケースを提示している。
264	高井 美智子, 上條吉人, 井出文子	向精神薬による急性薬物中毒の実態および関連する心理社会的要因についての考察: 臨床心理士の立場からの提言	日本臨床救急医学会誌 18, 22 - 29, 2015	北里大学病院救命救急センターに搬送された急性薬物中毒患者81名(男性: 18名, 女性: 63名)を対象に質問紙調査を実施し、向精神薬の過量服薬の実態および関連する心理社会的要因について検討を行った。80名(98.8%)が何らかの精神障害に罹患していた。自殺念慮の有無における過量服薬した向精神薬の量に違いが認められなかったが、数時間以上前から過量服薬を考えていた患者は、衝動的に過量服薬した患者に比べて、摂取する量が有意に多かった。患者の心理社会的背景として、無職で家族・恋人・友人といった身近な人間とのトラブルを契機に衝動的に過量服薬する傾向が認められた。今後、精神障害の治療に加え心理社会的介入の必要性が示唆された。
265	太田一樹, 小澤竹俊, 寺田菫美, 村澤直子, 今井洋史, 安藤哲也, 望月弘彦	在宅療養中のがん緩和治療期患者における血清アルブミン、トランスサイレチン濃度の検討	日本病態栄養学会誌 17(4), 493 - 500, 2014	在宅療養中のがん緩和治療期患者では予後日数が短くなるほどアルブミン、TTRとも低下する可能性が示された。
266	竹谷隆司, 奥村安寿子, 河西哲子	錯視的輪郭に特異的な視覚誘発反応は認知的負荷により減衰する	生理心理学と精神生理学 32(1), 11 - 17, 2014	錯視的輪郭(illusory contour: IC)図形は統制図形と比較して、刺激提示後約90-200msに特異的な電気生理学的反応を惹起する。このIC効果は、視覚皮質におけるICの自動的な知覚的処理を反映すると考えられているが、十分に検証されているとはいえない。本研究では、事象関連電位(event-related potential: ERP)におけるIC効果が認知課題の負荷により異なるかどうかを検討した。実験において17名の参加者は、IC図形とその統制図形、および数字からなるランダムな刺激系列に対し、低負荷条件では数字刺激のカウンティング課題、高負荷条件では計算課題を行った。その結果、低負荷条件でのみIC図形に対するより陰性のERPが、刺激提示後110-160ms区間に右後頭側頭部において観察された。この結果は計算に伴う認知的負荷が、IC知覚処理に干渉したことを示唆するため、IC知覚処理は完全に自動的とはいえないだろう。
267	須貝研司, 根津敦夫	産科医療補償制度の現状と問題点に関する実践セミナー	脳と発達 46(3), 217-220, 2014	産科医療補償制度の現状と問題点を明らかにし、よりよい診断書の書き方や疑問点に対する扁桃を示し、制度改善の意見をまとめた。
268	小林朋佳, 稲垣真澄, 山崎広子, 北 洋輔, 加我牧子, 岡明	視覚誘発電位を用いた大細胞系機能評価と読字能力の関連性	脳と発達 46(6), 424 - 428, 2014	発達性読み書き障害の背景病態の一つである大細胞系機能障害を明らかにするために、DD児と定型発達児各々19名に対し、低空間周波数・低コントラストのサイン様白黒縦縞模様を高反転頻度で視覚提示し、視覚誘発電位を記録した。DD児群VEPIはTD児群と比較してComplex demodulation法によるピーク振幅が有意に低下した。構造方程式モデリングによりピーク振幅は線画呼称課題の成績に関連し、線画呼称が良好であるほど音読が向上することが見出された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
269	榎園 崇, 中川栄二, 遠藤ゆかり, 永井盛博, 松田悠子, 安村 明, 稲垣真澄	自閉症スペクトラム障害児における日本語版異常行動チェックリスト(ABC-J)の再検査信頼性の検討	臨床医薬 30(3),271 - 277,2014	<p>【目的】小児の自閉性症状に合併する異常行動に対する薬物治療において、日本語版異常行動チェックリスト(ABC-J)の評価尺度の検証を行った。</p> <p>【方法】自閉症スペクトラム障害(ASD)児を対象に、ABC-Jの初回検査と再検査のスコアを級内相関係数により解析し、再検査信頼性を検討した。</p> <p>【結果】12名(男11名、女1名)、平均年齢8.4±2.5歳について解析したところ、興奮性、無気力、常同行動、多動、不適切な言語と、すべてのサブスケールで高い相関を示し再検査信頼性は良好であった。</p> <p>【結論】薬物治療を受けているASD児の異常行動に対して、ABC-Jは信頼できる評価尺度であると考えられた。</p>
270	岡島純子・加藤典子 吉富裕子ほか	自閉症スペクトラム障害児に対する社会的スキル訓練・親訓練の効果-「獨協なかまプログラム」開発のための予備的研究-	子どもの心とからだ 23(1),49 - 57,2014	<p>自閉症スペクトラム障害(ASD)児とその親を対象とした親訓練(PT)と社会的スキル訓練(SST)から構成される「獨協なかまプログラム」を開発し効果について検討した。小学2～5年生のASD児とその親7組を介入群、6組を通常治療群(TAU群)とした。1回90分のセッションを13回、6か月間実施し、事前、中間、事後に評価を行った。介入群ではプログラムを完遂した6組、TAU群6組が解析の対象とされた。TAU群と比較して介入群は、親評定のストレス反応、子どもの対人的コミュニケーションにおいて有意な改善が認められた。教師評定においては有意な改善が認められなかった。本プログラムは、ASD児の行動特徴の改善、親のストレス軽減に有効であると考えられたが、今後は、学校連携などを含めた内容にすることやサンプル数を増やして検討する必要があると思われた。</p>
271	宮城哲哉,近土善行,佐野輝典,岡本智子,西山毅彦,渡辺雅子,渡辺裕貴,村田美穂,高橋幸利.	失語発作を主症状とする成人型ラスマッセン症候群の一例	てんかん研究 32(2),556 - 563,2015	通常小児発症であるラスマッセン脳症の成人発症例でかつてんかん発作症状として失語症を主症状とした症例を報告した。
272	勝又陽太郎, 松本俊彦	若年者の自傷行為に対する援助行動と感情体験との関連	日本社会精神医学会雑誌 24(1),9 - 18,2015	<p>公立高校の生徒280名に対して、独自に開発した無記名の自記式質問紙を用いて調査を実施し、過去に親しい知人の自傷行為に遭遇した経験があったと回答した60名のデータを用いて分析を行った。多重対応分析の結果、「大人への相談を勧める」といった自傷行為に対する援助行動は男性との結びつきが強く、「不安」や「困惑」といった感情と関連していることが示唆された。一方、「話をじっくり聞く」や「心配していることを伝える」といった援助行動は女性との結びつきが強く、「悲しみ」や「怒り」、「心配」といった感情と関連していることが示唆された。また、自傷者に対する援助行動が生起しない背景には、嫌悪・回避的感情が関連しているパターンがある一方で、自らも自傷経験があるために自傷を特別な行為として感じておらず援助の必要性を感じていない、あるいは同じ経験のある者として同情心は湧くものの他者の自傷に関わることで自分が不安定になるのを避けるために援助を行わない、といった場合があることが推察された。</p>

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
273	岡本依子, 菅野幸恵, 川野健治, 高崎文子	授乳スタイルの選択・定着のプロセス 1: 授乳についての語りにもみられる母乳プレッシャーの受け入れ/拒否	子育て研究4: 53-64, 2014	本研究では、5名の母親に授乳についての日誌を依頼し、母乳か人工乳かを含めた授乳のやり方全般についての授乳スタイルが、どのように定着していくかを検討した。分析1では、日誌から、授乳評価についての語りと人工乳の増減との関係を検討した。その結果、多くの母親は、生後1ヶ月半から2ヶ月以内に、授乳に関して特定の語り口に安定していくことが見出された。分析2では、語り口が安定しなかった母親の日誌について、授乳スタイルの変化の背景として考えられる人工乳への“わりきり”について、質的に検討した。このように授乳スタイルが安定しない背景には、母乳の出方についての“わりきれなさ”、第三者の意見の取り込みと反発、および、乳量評価の根拠の受け入れ拒否などがあった。最後に、授乳からみる親への移行について論じた。
274	塚田恵鯉子, 木村綾乃, 亀井雄一, 瀬川和彦, 岡本智子, 渡辺雅子	終夜睡眠ポリグラフィが捉えた、複雑部分発作に伴う発作性心停止	てんかん研究 32(3), 548 - 555, 2015	終夜睡眠ポリグラフィ検査(PSG)中に複雑部分発作に伴う発作性心停止を呈したてんかん患者を報告した。
275	野田寿恵, 佐藤真希子, 杉山直也, 吉浜文洋, 伊藤弘人	精神科看護師が抱く入院患者の攻撃性への態度と対処手法への臨床姿勢の関連	精神医学 56(7), 601 - 607, 2014	精神科患者の示す攻撃性およびそれに対処する抑制手法への看護師の臨床的な認識を「攻撃的に対する態度尺度」(ATAS)と「抑制手法への臨床姿勢質問票」(ACMQ)を用いて、全国23病院の看護師による回答646件から検討した。ACMQの身体拘束などの制限性の強い手法がATASのネガティブ因子と、タイムアウトなどの制限性の低い手法がポジティブ因子と正の相関を示した。攻撃性を共感的・前向きに捉える看護師は制限性の低い手法を好む傾向があった。
276	安藤道人, 後藤基行	精神病床入院体系における3類型の成立と展開-制度形成と財政的変遷の歴史分析-	医療経済研究 26(1), 27 - 41, 2014	戦後直後から1960年代にかけての日本の精神病床入院の急拡大について、「行政収容」(措置入院)、「公的扶助」(医療扶助入院)、「社会保険」(保険給付)という3つの制度体系から分析した。その結果、日本の精神病床入院に見られる3体系は戦前にその原型が形成され、それが戦後に継承されたことが明らかになった。また、「公的扶助」と「社会保険」という精神医療に特化しない領域における制度変遷が、精神病床入院増を財源面から支えたことが明らかとなった。
277	近藤あゆみ, 井手美保子, 高橋郁絵, 谷合知子, 三浦香澄, 山口亜希子, 四辻直美, 松本俊彦	精神保健福祉センターにおける薬物依存症再発予防プログラム「TAMARPP」の有効性評価	日本アルコール・薬物医学会雑誌 49(2), 119 - 135, 2014	本研究では、多摩総合精神保健福祉センターの相談事業の一環で行っている再発予防プログラムTAMARPPについて、断薬継続など数値化できる効果以外の質的効果に注目し、31人の利用者を対象に担当職員の振り返りを行うことで、広く効果の検討を試みた。結果、TAMARPPの効果とは「再発モデル」に基づく学習に限定されるものではなく、「安心できる場」を土台として、仲間と出会い、薬物等について学び、自分の選択した方法を試し検証しながら、回復へのイメージを培い、社会参加の経験を広げていき、さらには、グループの場から次の取り組みとなる「外の場」につながっていくことを後押しするものがあると考えられた。この質的効果を発揮するためには、①『安全・安心』の土台作り、②初期支援を受け入れやすい学習スタイル、③次のステップへの橋渡し機能、④薬物等の問題に限定されない「思考・感情・行動」の変化、⑤生活の質の向上、について職員が留意すべきであることが確認された。また、公的相談機関である精神保健福祉センターでプログラムを実施することについて、①初期支援の場の提供、②地域の中の精神保健福祉センターとしての役割、③薬物等の問題以外の精神科疾患を併存してもつ人への支援の点にセンター機能の特性を活かした意義があると考えた。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
278	池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子, 岩波 明	措置入院指定病院に入院する違法物質使用障害者の実態調査-退院時における逮捕群と非逮捕群との比較から	日本社会精神医学会雑誌 23,112 - 122,2014	措置入院をした違法物質使用障害(ISUD)患者の退院支援策を検討する目的で、10年間に、東京都内における一精神科単科大学附属病院に措置入院をした全ての患者465名のうち、違法物質使用障害者65名について実態調査を行った。退院時に逮捕される群とされない群の比較から、非逮捕群では、1割に措置入院前に違法薬物の使用が確認され、約6割については措置入院前に尿検査がなされていなかった。ここから、尿中薬物反応が陽性であっても、逮捕される場合とされない場合があり、本来であれば逮捕されるはずの者が非逮捕群に混在していると思われる。また、逮捕群には非逮捕群と比べ、犯罪歴が少なく、同居者がおり、仕事を持っているという特徴が見出された。他方、非逮捕群の3割は違法薬物を使用しておらず、統合失調症や気分(感情)障害を合併している場合が多かった。警察介入時から措置入院に至る間では、尿検査の結果よりむしろ更生可能性に基づく選別がなされる傾向があることから、指定病院は、その点を十分踏まえた対応を行うと共に、退院支援のあり方に関して、検討を重ねる必要があるものと考えられた。また、措置入院となるISUD患者の中には、違法物質の使用が無くとも症状が再燃した者が少なからず含まれていることが明らかになった。これらの患者は、依存症治療と精神症状への治療の双方が必要となるため、指定病院において積極的に治療を行うことが望まれる。
279	池田朋広, 小池純子, 森田展彰, 山本和弘, 合川勇三, 松本俊彦, 稲本淳子	措置入院指定病院の立場における違法物質使用障害者への退院支援策の検討-司法的処遇と薬物尿検査に着目した4事例から-	日本アルコール・薬物医学会雑誌 49(1),45 - 56,2014	措置入院をした違法SUD患者の支援策を明らかにする目的で、違法物質使用関連障害者4事例の検討を行った。その結果、措置入院をした違法SUD患者は、①司法機関で処遇される者、②司法と医療のいずれの対象であるかの選別が曖昧である者、③医療福祉的支援を強化する必要がある者の3つの類型にわけられた。いずれの者も、再犯や再発を予防しながら地域で安定した生活が行えるよう、司法判断が適正に行われた上で、医療福祉的支援を継続して受ける必要があった。この実現には、司法と医療の総合的支援体制の整備と現場に即したシステムの構築が急務になると考えられた。
280	白神敬介, 川野健治, 勝又陽太郎, 川島大輔, 荘島幸子	中学校における自殺予防教育プログラムの達成目標についての実証的検討	自殺予防と危機介入 35(1): 23-32, 2015	自殺予防教育プログラムGRIPの段階的達成目標の達成度について、理論的検討からその指標を作成し、中学校生徒を対象として実施したデータを分析した。
281	勝又陽太郎, 赤澤正人, 松本俊彦, 小高真美, 亀山晶子, 白川教人, 五十嵐良雄, 尾崎茂, 深間内文彦, 榎本稔, 飯島優子, 竹島正	中高年男性うつ病患者における自殺のリスク要因: 心理学的剖検を用いた症例対照研究による予備的検討	精神医学 56(3),199 - 208,2014	うつ病は自殺既遂の重要な危険因子とされているが、これまでのところうつ病で精神科外来治療を受けている中高年男性を対象とした研究は見当たらない。そこで本研究では、精神科外来受診歴を持つ中高年男性うつ病患者の自殺のリスク要因について、心理学的剖検を用いた症例対照研究のデザインで検討を行った。本研究の結果、事例群に比べて対照群において休職歴を持つ者の割合や精神科治療を受けるにあたって自立支援医療(精神通院医療)を利用している者の割合が有意に高いという結果が得られた。本研究は予備的な検討にとどまるものの、うつ病という重大な自殺の危険因子を抱えながら精神科に受診している中高年男性の場合には、休職や自立支援医療の利用といった環境調整の手続きを丁寧に行うプロセス自体が、恥やプライドを含む男性特有の防衛的構えを和らげ、本人の治療への動機づけを高め、結果的に自殺予防につながる可能性が推測された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
282	長沼洋一, 三澤孝夫, 福田敬, 安藤久美子, 岡田幸之, 菊池安希子	東京都の医療観察法指定通院医療機関の精神保健福祉士が直面する困難に関する研究	臨床精神医学 43(9),1317 - 1323,2014	指定通院機関の課題を精神保健福祉士(PSW)の視点から把握するためにPSW11名にフォーカスグループインタビューを行った。スタッフの理解や意思統一の不足などの「医療機関内の受入体制」、業務の多さやスキルの習熟に関連した「ケース対応」、地域体制や行政に関連した「地域連携」といった課題があげられた。受入体制やケース対応については情報収集や院内調整が、また地域連携については行政や地域の介入が必要なが指摘された。
283	福田敬, 菊池安希子, 長沼洋一, 三澤孝夫, 安藤久美子, 岡田幸之	東京都内の医療観察法指定通院医療機関における業務量調査	臨床精神医学 43(9),1309 - 1316,2014	都内の指定通院医療機関14施設、患者72名への医療提供時間を調査し、業務にかかる費用の推計を行い、関連要因を検討した。対象者毎の業務内容別ではデイケアが最も長かった。職種では、精神保健福祉士と看護師の業務が多く、記録のための時間が長かった。平均人件費は64,000円/月で、前期・中期・後期とも大きな差はなかった。診療報酬の採算は取れるものの、中期、後期と業務量が減少しない一方で診療報酬は下がることが指摘された。
284	白神敬介, 川野健治, 立森久照, 竹島 正	東日本大震災被災地岩手県大槌町における精神的健康－居住形態ごとのQOLの比較－	厚生 の指標62(3): 9-18, 2015	岩手県大槌町の住民健康調査で得られたデータを分析し、震災発生から1年反語の状況で居住環境によってQOLの程度が異なり、特に女性、高齢者のリスクの高さが示された。
285	石黒陽子, 山重慎二, 伊藤弘人	統合失調症の疾病費用と患者の地域移行に関するシミュレーション	社会保険旬報 (2583),20 - 27,2014	地域移行の社会への影響を明らかにするために、統合失調症の疾病費用のシミュレーションを行った。2008年の費用は約1.5兆円と推計され、入院期間を1/4とする仮定では、医療費は低下するものの、福祉及び家族負担の増加により全体は12%の減少にとどまった。一方で、地域医療も拡充させる場合には、全体で20%増加した。これは、単純な入院日数の減少は財政支出削減に寄与せず、地域ケア充実に伴う追加支出が必要であることを示唆している。
286	中村達也, 鮎澤浩一, 北 洋輔, 柴 玲子, 山形暁子, 小沢 浩	特別支援教育における小学校教員と言語聴覚士の連携に関する調査	言語聴覚研究 11(3), 166 - 174, 2014	特別支援教育において、教育と専門職の連携が始まっているが、現状の教育と言語聴覚士(ST)の連携は十分とは言えない。本研究では通常学級を含む小学校教員を対象に、専門職であるSTとの連携について、現状における連携の実態把握と、学校の体制に由来するもの以外のSTが取り組むべき課題を探る目的で質問紙調査を行った。結果、STの認知度の低さに加えて、教員の業務の多忙さから連携する時間がない等の時間的な問題も連携の障壁と考えられた。さらに、児童の言語・コミュニケーション面での困難さは、行動面の問題や学習の困難に比べて気づかれにくい可能性があることが示された。これより、今後、学校とSTの連携強化のためには、STの認知度向上とともに、児童が示す困難さの背景を言語・コミュニケーション面の視点から検討するSTの専門性が特別支援教育に活かせることを示す必要があり、連携に当たっては、時間的な問題を考慮する必要性が示された。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
287	奥村泰之, 藤田純一, 松本俊彦	日本における子どもへの向精神薬処方の経年変化-2002年から2010年の社会医療診療行為別調査の活用-	精神神経学雑誌 116(11),921 - 935,2014	成年における精神疾患の受診者数は増加しているものの、子どもにおける向精神薬の多くは適応外である。これまでの研究では、どの程度の子どもへ向精神薬が処方されているか、明らかにされてこなかった。そこで研究では、日本全国の子どもの対する向精神薬処方の経年変化を把握することを目的とした。具体的には、2002年から2010年の社会医療診療行為別調査における18歳以下の外来患者の診療報酬明細書と調剤報酬明細書をデータ源として、向精神薬の処方件数と向精神薬の多剤併用処方の件数を評価した。調査の結果、レセプトの件数は9年間で233,399件であった。2002-2004年と2008-2010年を比較すると、6-12歳における向精神薬の処方オッズは、ADHD治療薬が84%増 (95% Confidence Interval [CI] 1.33, 2.56)、抗精神病薬が58%増 (95% CI 1.06, 2.34)、抗不安・睡眠薬が33%減 (95% CI 0.46, 0.99)であった。13-18歳における向精神薬の処方オッズは、ADHD治療薬が2.5倍増 (95% CI 1.34, 4.62)、抗精神病薬が43%増 (95% CI 1.20, 1.70)、抗うつ薬が37%増 (95% CI 1.09, 1.72)であった。クラス間多剤併用処方、気分安定薬では93%、抗うつ薬では77%、抗不安・睡眠薬では62%、抗精神病薬では61%、ADHD治療薬では17%にみられた。以上より、向精神薬の適応外使用が増えていることから、治療の推進と長期的な有効性と安全性をモニタリングするための臨床データベースの構築が喫緊の課題と考えられる。
288	奥村康之, 藤田純一, 松本俊彦, 立森久照, 清水沙友里	日本全国の生活保護受給者への抗不安・睡眠薬処方の地域差	臨床精神薬理 17(11),1561 - 1574,2014	本研究は、生活保護受給者の外来患者における、向精神薬の多剤処方の都道府県差を検討することを目的として、医療扶助実態調査を情報源とした解析を行った。適格基準は、①2011年から2012年の調査票情報、②歯科を除いた調剤レセプトとした。47の都道府県の向精神薬が3剤以上処方される標準化レセプト出現比を経験的ベイズ推定により求めた。その結果、0-19歳の向精神薬3剤以上の処方割合は、愛媛県が突出しており、全国平均よりも2倍高いことが明らかにされた。また、40-59歳の向精神薬3剤以上の処方割合は、和歌山県が突出しており、全国平均よりも80%高いことが明らかにされた。向精神薬の多剤処方の地域差は明瞭に存在し、年齢区分により多剤処方の多い地域は異なっていた。向精神薬の多剤処方の状況を定期的にモニタリングするための体制を構築し、地域の実情に応じた対策を進めることが望まれる。
289	仲村貞郎, 中川栄二, 安村明, 稲垣真澄	脳波異常を伴った発達障害に対する薬物治療の検討	臨床医薬 30(11),957 - 962,2014	発達障害では、てんかんの合併を認めることが多く、また脳波異常を認める割合はさらに高いと報告されている。自閉症スペクトラム(Autistic Spectrum Disorder: ASD)や注意欠陥多動性障害(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder: ADHD)と脳波異常の関連について、前頭葉の脳波異常が認知機能や抑制機能に影響を与えているとする報告がある。発達障害に対する薬物治療として、抗精神病薬のみならず、抗てんかん薬の併用が精神症状や行動障害、睡眠障害に治療効果を認めることを経験する。脳波異常を伴った発達障害に対する抗てんかん薬使用の報告は散見されるが、脳波異常を伴う発達障害に対する薬物治療の一定の見解はまだ十分に得られていないのが現状である。今回、脳波異常を伴った発達障害に対する薬物治療の検討を行った。

	著者、発表者等	論文名、演題名等	掲載誌、学会等	成果又は特記事項
290	小林朋佳, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子, 稲垣真澄	発達障がい診療における保護者支援のあり方-母親が振り返る「子育て」の視点から-	小児保健研究 73(3),484 - 491,2014	発達障害児を15年以上育ててきた母親23名に半構造化面接を行った。母親は子とコミュニケーションをとり、子のよいところを発見し伸ばす養育態度を持ちつつも、子自身に苦手な点を認識させ、助けを求めることを教え、目先のことより先を見据えた子育てを心がけていた。医療従事者は母親の心情に配慮し、正しい診断と適切な治療を提供することが重要と考えた。生涯を通じた発達障害児・者と保護者を支援する体制の充実が求められた。
291	原口英之, 井上雅彦, 山口穂菜美, 神尾陽子	発達障害のある子どもをもつ親に対するピアサポート:わが国におけるペアレント・メンターによる親支援活動の現状と今後の課題	精神保健研究 28,49 - 56,2015	近年、発達障害のある子どもをもつ親支援の1つとして、ペアレント・メンターによるインフォーマルな支援が目されている。海外のペアレント・メンター活動の先行事例と、わが国への導入から事業化までの経緯について紹介し、それらを踏まえて、今後のわが国のペアレント・メンターによる発達障害児の親支援に関する研究面における課題を整理した。
292	小林朋佳, 鈴木浩太, 森山花鈴, 加我牧子, 稲垣真澄	発達障害診療における保護者支援のあり方-医師8名への面接結果から-	小児保健研究 73(5), 737 - 744, 2014	8名の医師に保護者への働きかけで好転するケースについて尋ねた。共通点として母親の積極的な思考と未来への肯定的な期待、子の長所を認めて育てかつ子に合わせた対応、専門家や家族との良好なコミュニケーション力が見出された。医師は①母親の役割を肯定し、②児の立場を尊重し③保護者に合わせた個性の高い配慮を心がけ、保護者の「困難な状況下でも対処できる力」、すなわち「レジリエンス」を高める支援を実践していた。
293	遠藤明代, 小保内俊雅, 稲田尚子, 森脇愛子, 神尾陽子	保育所・幼稚園に在籍する気になる年中児の行動と発達に関する保育者意識調査	小児の精神と神経 54(3),229 - 241,2014	就学前の発達障害支援の介入時期として議論のある5歳児の集団場面での支援ニーズを把握することを目的として、東京多摩地域の自治体の協力のもと、約3000人の地域5歳児コホートを対象に在籍保育所および幼稚園の保育者に質問紙調査を実施した。その結果、保育士は社会性や協調運動の問題など発達障害と関連する諸問題を保育場面の観察から気づいており、特に対応に困る気になる子どもは約12%と回答された。7割の保育者が園外の専門家の助言を求めており、行政は保育者支援を強化することの必要性が明らかとなった。
294	高野歩, 宮本有紀, 松本俊彦	薬物使用障害を有する人を対象としたインターネットを活用した介入に関する文献レビュー	日本アルコール薬物医学界雑誌 50(1),19 - 34,2015	薬物使用障害を有する人を対象とし、インターネットを活用した心理社会的治療を提供した研究に関する論文をレビューした。認知行動療法などのエビデンスが確立されている手法を基に、インターネットを活用したプログラムを開発・提供することで、長期的な薬物使用低減が期待できることが明らかとなった。また、治療提供者と利用者双方にコスト削減効果があることが明らかとなった。薬物使用者に対するステイグマが根強く、治療資源の乏しい日本においても、このような手法を用いた介入を提供することで、潜在的に治療を求めている人に治療を提供できる可能性があると思われる。
295	原口英之, 野呂文行, 神山努	幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題:障害の診断の有無による支援の比較	障害科学研究 39,27 - 35,2015	幼稚園における特別な配慮を要する子どもの在籍状況と支援の実施状況を明らかにし、配慮を要する子どもの診断の有無により支援の実施状況や必要性の違いが見られるかを検討することを目的に、ある県の公立幼稚園に質問紙調査を実施した。75園から回答を得て、診断のない気になる子どもは88.0%の幼稚園に、障害児は65.3%の幼稚園に1名以上在籍し、全在籍児に占める人数の割合は、気になる子どもは5.9%、障害児は2.1%であった。また、診断の有無によって保育者による支援の実施状況と必要性には差が示された。